越路町文化財報告書第一九輯

岩田遺跡

一九九二

越路町教育委員会

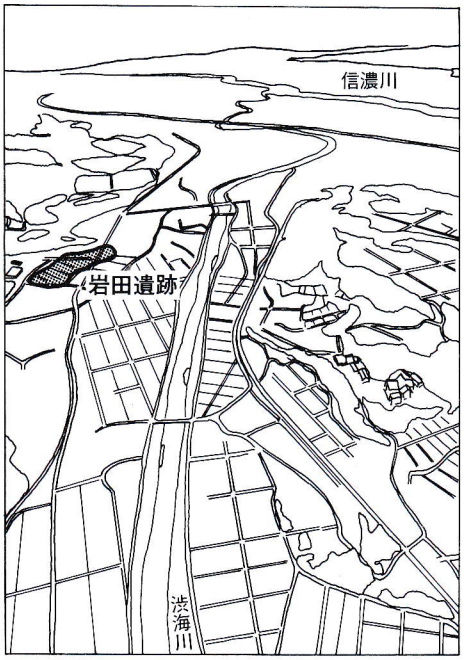
岩田遺跡

一九九二
越路町教育委員会

岩田遺跡発掘調査報告書正誤表（次のようにご訂正お願いします。）

例言中	一八行目	竹田祐二を竹田祐司に訂正
一二頁中	作業分担	下段　整理作業と報告書作成…佐藤雅二を佐藤雅一に訂正
一六頁中	二一行目	注六　深井栄一氏を深井英一氏に訂正
二〇頁中	一八行目	須土器を須恵器に訂正
二一頁中	三行目	無恵器を須恵器に訂正
二七頁中	一八行目	断面計を断面形に訂正
三七頁中	一〇行目	會根遺跡を曽根遺跡に訂正
四〇頁中	一一行目	會根遺跡を曽根遺跡に訂正
第二表	上段四行目	會根遺跡を曽根遺跡に訂正
	中段四行目	會根遺跡を曽根遺跡に訂正

岩田遺跡遠景


信濃川
岩田遺跡
渋海川

序文

このたび、帝国石油株式会社の天然ガス井戸掘削計画に伴い越路町大字沢下条地内にある岩田遺跡発掘調査を中村孝三郎先生ご指導のもと佐藤雅一、石坂圭介、神林昭一、星野洋治の諸先生から調査団を組織していただき、ここに「岩田遺跡発掘調査報告書」として学術報告書を刊行することに至りましたことは、この上ない喜びであるとともに中村先生はじめ諸先生方のご苦労に対しまして深く感謝の意を表する次第であります。

岩田遺跡の発掘は、当町では初めての平安時代の遺跡の調査であり、これから町史編纂に取り組む当町にとりましては、このたびの発掘調査は誠に意義深く、その歴史的解明に大きく期待するところであります。

また、昭和五八年の多賀屋敷遺跡発掘以来八年ぶりに行われた今回の発掘調査では、あらためて郷土の歴史を学びなおす機会を与えていただくことになり、先人の残された尊い文化遺産の保護と後世への継承の責務を痛感した次第であります。

出土した遺物の中には中越地方では初めてといわれる円面硯や盆、そして掘立柱建物跡などが確認されており、今後このたびの調査で得られた貴重な資料が地域の歴史研究の一助となるとともに越路町発展につながる新たな一面を引き出す源流になることを願って止みません。

最後になりましたが、この発掘調査にあたりまして確認調査から発掘調査まで子細にわたりご指導賜った新潟県教育庁文化行政課並びに中村先生はじめ発掘調査を担当された諸先生方、またこのたびの発掘調査に全面的にご協力賜りました大字沢下条並びに帝国石油株式会社、そして薫風の季節とはいえ連日の炎天下、発掘作業に真摯、流汗のご努力をいただいた沢下条老人クラブのみなさんほか関係各位に対しまして深甚なる感謝の意を表する次第であります。

平成四年三月

越路町教育委員会
教育長　山本順平

例　言

一、本書は新潟県三島郡越路町大字沢下条字岩田七五番地他に所在する岩田遺跡の発掘調査報告書である。調査は帝国石油株式会社ガス井戸掘削工事に伴い、越路町が事業者から受託して実施したものである。

二、発掘調査は新潟県教育庁文化行政課の指導を受け、越路町教育委員会が調査事業主体者となり一年度事業として実施した。

三、本書の作成にかかる遺物整理と図面作成などは、中村孝三郎先生の指導を受け佐藤雅一・石坂圭介・神林昭一・星野洋治が、渡辺マサ・石原純子・大矢裕子・矢田富美子・西脇千代子・丸山久美子・佐藤桂子の協力をえて実施した。

四、発掘調査による出土遺物は一括して越路町教育委員会が保管している。遺物の注記は「岩田遺跡」の略号『ＩＴ』を取り墨汁で記した。

五、土器実測図の断面は須恵器（黒ぬり）・土師器（白ぬり）によって区別した。土器実測図は縮尺三分の一、黒書土器・拓影は縮尺二分の一を原則とした。写真の遺物番号は図版の番号と同一である。

六、本書の執筆分担については、第一章に記載してある。

七、建物の方位測定は、東西棟建物は梁（短辺）の方位、南北棟建物は桁（長辺）の方位を基準とした。溝の方位測定は溝に主軸の方位を基準とした。

八、遺物や遺構の観察については、特に県文化行政課　坂井秀弥先生から適切なご指導を賜った。

九、円面硯の観察に関しては、國學院大学　吉田恵二教授から丁重なご教示を賜った。

一〇、生産遺跡（窯跡）の胎土分析用サンプルの提供には長岡市教育委員会・小千谷教育委員会・三島町教育委員会・駒形敏朗・小熊博史、遠藤孝司の諸機関・諸氏からご協力を得た。

一一、土器胎土分析・樹脂同定分析に関しては、パリノ・サヴェー株式会社に依頼した。

一二、発掘調査から本書作成に至るまでに、下記の諸氏・諸機関に貴重な御協力とご理解を得た（敬称略）。

竹田祐二・若松　茂・小林達雄・金子拓男・川崎義雄・戸根与八郎・寺崎裕助・高橋　保・品田高志・安藤正美・田中　靖・田村浩司
辻本崇夫・堀川秀夫・飯川健勝・加藤正明・山村貴輝・中野　純・徳沢啓一・沢下条老人クラブ・越後古代研究会・朝日酒造株式会社・
㈲田中組・音頭金属株式会社・四葉遺跡調査会・初台遺跡調査団

目次

第一章　調査に至る経緯……一
第二章　岩田遺跡の位置と環境……二
一　位置と地理的環境……二
A　岩田遺跡の位置……二
B　岩田遺跡周辺の地形……三
C　遺跡の範囲と現況……三
二　岩田遺跡周辺の歴史的環境……四
A　古代の越路町周辺の行政区分と交通……四
B　周辺の遺跡と越路町における考古学的調査……五
第三章　岩田遺跡の調査……六
一　調査の概要と経過……六
A　調査の経過……六
B　地層堆積……八
C　遺跡の概観……九
二　調査と整理……一〇
A　発掘作業……一〇
B　整理作業と報告書作成……一二
C　遺構各説……一三
D　遺物各説……一七
第四章　まとめ……三九
一　墨書土器について……三九
二　当該調査区の遺構分布について……四一
三　岩田遺跡発掘調査の意義……四四
〈付編〉岩田遺跡出土遺物自然科学分析報告……別冊

挿図目次

第1図　岩田遺跡位置図……二
第2図　基本土層図……八
第3図　岩田遺跡の概観……九
第4図　遺構分布図……四三

附図目次

附図1　岩田遺跡周辺の主な遺跡
附図2　グリット設定図
附図3　遺跡全体図
附図4　A区全体図
附図5　B区全体図
附図6　第一号掘立柱建物址・第一号柱穴列
附図7　第二・三号掘立柱建物址
附図8　第四号掘立柱建物址
附図9　第四・五号土坑
附図10　第一〇号土坑
附図11　古墳時代の遺物・平安時代の遺物
附図12　平安時代の遺物
附図13　平安時代の遺物
附図14　平安時代の遺物
附図15　平安時代の遺物・円面硯・渡来銭
附図16　墨書および篦書土器
附図17　木製品

図版目次

巻頭図版1　岩田遺跡遠景
図版1　遺跡遠景・遺跡近景(A区)・遺跡近景(B区)
図版2　A区作業風景・掘立柱建物址　平面プラン検討・地割れ状溝の検討
図版3　A区完掘状態・B区完掘状態・B区完掘状態
図版4　第一号掘立柱建物址完掘状態・第二・三号掘立柱建物址完掘状態・第四号掘立柱建物址完掘状態
図版5　第五号土坑周辺完掘状態・第一〇号土坑完掘状態・第一〇号土坑ベルト付近遺物出土状態
図版6　第七号溝跡周辺・第九号溝跡周辺・畝状小溝群
図版7　古墳時代の遺物・平安時代の遺物
図版8　平安時代の遺物
図版9　平安時代の遺物
図版10　平安時代の遺物
図版11　平安時代の遺物・円面硯・渡来銭・盆・柱根
図版12　墨書および篦書土器

第一章　調査に至る経緯

越路町沢下条地内岩田遺跡は、昭和二七年、神林昭一氏（来迎寺在住　越路町文化財調査専門委員）によって発見された平安時代の遺跡である。この時代の遺跡の発見は、越路町としては初めてのものであり、昭和三二年新潟県教育庁文化行政課へ報告され、周知の遺跡となった。

本遺跡の立地する越路原およびその周辺の小千谷市片貝から長岡市関原までの一帯は、多くの遺跡が存在する地域であるが、その一方で天然ガスの埋蔵量全国一の規模を誇る地域でもある。昭和五〇年代の後半以降、この地域に国産エネルギーの確保という国策に基づき、天然ガスの採取が行われ始めている。

平成二年八月、帝国石油株式会社（以下帝国石油）から越路町教育委員会（以下町教委）に対して、岩田遺跡地内にガス井戸掘削の計画が示された。この計画によると、試掘井は、平成三年度中に地下約五千㍍まで掘り下げるというものであり、平成三年四月までに発掘調査を完了して欲しいとの要望であった。これに対して町教委では、遺跡の現状保存を第一と考え、削井場所の変更が可能かどうかを帝国石油に問い合わせたが、周囲地はいずれも圃場整備がなされたばかりであり、土地改良法の制約で当該地以外は適当な場所がないという回答であった。このため町教委では、やむなく発掘調査・遺跡の記録保存に踏み切る事にし、直ちに新潟県文化行政課（以下県文化行政課）へ出向き、確認調査の実施と発掘調査の指導を願った。しかし、県文化行政課では主に確認調査時期の問題から難色を示し、その実施計画は一時暗礁に乗り上げた。その後、再三県文化行政課へ協力を要請した結果、年内一杯詰まっていた日程を調節していただき、同年一二月五日から七日までの三日間をもって、鈴木俊成・岩崎　均両氏（県文化行政課　文化財専門委員）から遺跡確認調査を実施していただいた。その結果、溝・土抗・ピットなどの遺構と共に平安時代中葉の遺物が検出され、工事前の発掘調査が必要であるとの報告・指導を受けた。

ここに至り本調査の実施が決定したのであるが、今度は調査担当者の確保という問題が生じた。数々の調整の末、多忙の中を佐藤雅一先生に快諾をいただくことができ、さらに幸甚なことに越路町文化財調査専門委員でもあられる中村孝三郎先生に団長をしていただくことになった。中村・佐藤両先生には速やかに調査団を組織していただき、ここにようやく岩田遺跡の発掘調査実施のめどが立った。

発掘調査は平成三年四月一五日から五月三一日までをもって実施することになった。

第二章　岩田遺跡の位置と環境

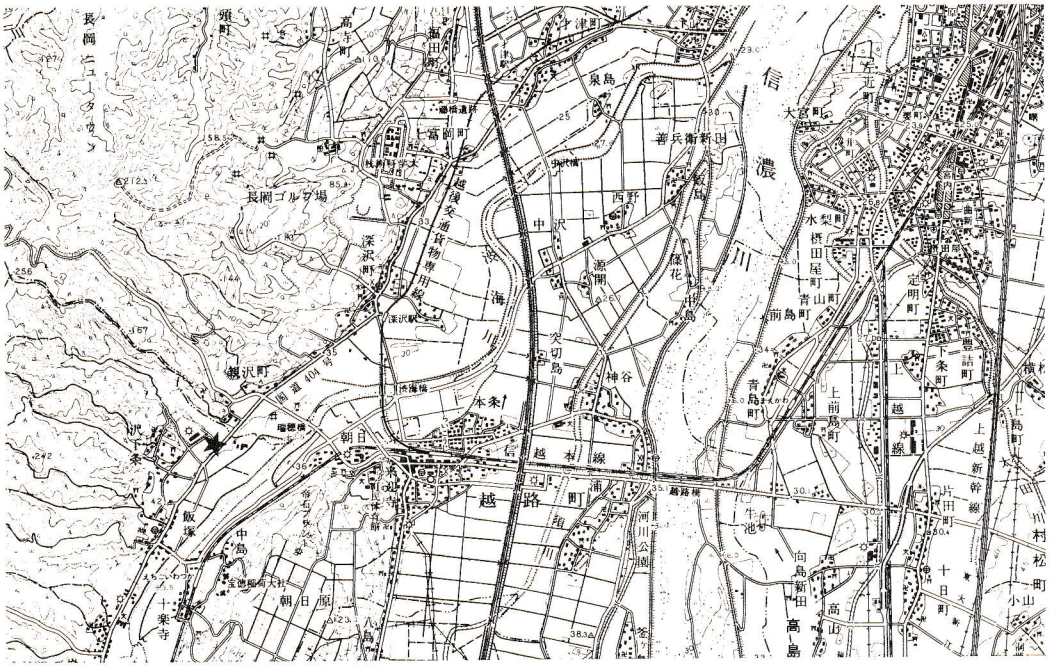
一　位置と地理的環境

A　岩田遺跡の位置（第1図）

岩田遺跡は、新潟県三島郡越路町大字沢下条字岩田七五番地他に所在する。北緯約三七度二三分七十秒、東経約百三八度四五分六六秒に位置し、信越本線の来迎寺駅より西へ約二・三㌔、越後岩塚駅からは北へ約一・三㌔の距離を計る。

本遺跡の所在する越路町は、中越地区のほぼ中央やや南西よりに位置し、北西から東にかけての広い範囲を長岡市と接し、南では小千谷市および刈羽郡小国町と、西側では曽地丘陵沿いに柏崎市と境界をなす。面積は約五八・四四㌔、翅を広げた蝶のような形状を呈している。これを便宜的に東部・中央部・西部に分けて略述すると、東部と西部にはそれぞれ信濃川と渋海川が流れ、東部には沖積平野と段丘が、西部には曽地丘陵が発達している。中央部は、南北を小千谷・長岡の両市に挟まれやや狭いが、市街地はその北側を中心に形成されている。

岩田遺跡はその中央部北端のやや西よりに位置し、曽地丘陵東際に形成された扇状地上に立地する。長岡市からほど近く、その境界から二〇〇㍍のところに所在する。南東へ五〇〇㍍に渋海川が北に流れ、さらに東へ三・五㌔は信濃川の中流域になっている。



第1図　岩田遺跡位置図

B　岩田遺跡周辺の地形（第1図）

本章一Aで触れたように、本遺跡の東には渋海川が流れている。現在、同川と本遺跡との比高差は約一〇㍍である。渋海川より東には信濃川が形成した段丘が発達しており、遺跡周辺では、西から順に、越路原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ面、浦面と展開する。また、本遺跡の西側には曽地丘陵がおよそ南北の軸に伸びている。この曽地丘陵は、渋海川や鴨田川へと流れ込む幾筋もの支流の供給源となっており、本遺跡周辺にも北に太田谷川、南に下条谷川が流れる。これらの地形の影響から、曽地丘陵の東際には、多くの複合扇状地が形成されており、さらにこの扇状地の東端は、渋海川の侵食作用によって崖線状を呈している。

本遺跡周辺の基盤は、相川層～灰爪層からなる新第三系と魚沼層群の第四系によって構成されている。魚沼層群の層厚はおよそ三〇〇〇㍍を計り、魚沼地方一帯、おもに信濃川、渋海川流域周辺と魚野川の左岸に広く堆積している。このうち小国層（上部墨層）と呼ばれる地層が、渋海川左岸の丘陵地帯から段丘面にかけて観察される。小国層の岩相は砂・シルト互層を主体とし、礫層・亜炭層・火山灰層が挟在する（註一）。本遺跡に近接する長岡市親沢から高寺町一帯にかけての小国層の露頭では、赤化した地表面の直下において、粘土層が観察・採集できる。この一帯は、岩野原・笹山窯跡など古代の窯跡が立地する地域でもある。さらに、同様の粘土層が小粟田原にも存在し、そこにはやはり権田窯跡があることから、この小国層内の粘土層は、古代窯跡の立地を考える上で、重要な手掛かりとなり得るかも知れない（註二）。

C　遺跡の範囲と現況（附図2）

岩田遺跡の範囲は、太田谷川以南の扇状地上約一万平方㍍である。しかしながら、本遺跡と近接する渋海川左岸の一帯に、広く同時代の遺物散布地が確認されていることから、遺跡範囲の実態は、これからの周辺の遺跡群を統合した視点で見る必要性があろう。具体的に言えば、本遺跡の北に位置する長岡市一王子遺跡、山王A・B遺跡（註三）とすぐ南に位置する村前遺跡などは岩田遺跡と強い関連性が指摘できるかも知れない。

本遺跡の現況はほとんどが水田である。この水田を開墾する際の切り盛り工法によって、現地表面の遺物・遺構分布は、顕著な影響を受けている。すなわち、削平され遺物包含層が耕作面となった部分は多くの遺物が表採されることから遺跡の確認が容易であるが、一方保存状態がより良好と思われる盛り土された部分では、その把握が難しいものと思われる。

註一　地学団体研究会　一九八三『魚沼層群』

註二　小国層中の粘土層の存在に関しては県立小千谷西高校教諭堀川秀夫氏より教えを賜った。

註三　今回の発掘調査にともなって実施した周辺調査により発見された。

二、岩田遺跡周辺の歴史的環境

A　古代の越路町周辺の行政区分と交通（附図1）

現在、越路町は三島郡に属しているが、古代から近世初頭にかけての同地区は、古志郡に属していた。大宝二年、それまで越中国に所在していた頸城・古志・魚沼・蒲原の四郡が越後国に編入され、このときに越後国の境域がほぼ以後の越後国の国域に一致するようになる。そしておよそ一世紀後の九世紀前葉には古志郡から三島（みしま）郡が分立したと推断される（註四）が、このときの三島（みしま）郡の郡域は、ほぼ現在の柏崎市と刈羽郡を含む地域と比定され、越路町に相当する地域は、依然古志郡内にあった。現在の三島（さんとう）郡の名称は、近世初頭にそれまで古志郡のなかの信濃川以西を山東郡と呼んでいたのを三島（さんとう）郡と呼称したことに始まる。また十世紀に成立した『倭名類聚鈔』「国郡部」によれば、当時古志郡には、大家（おおやけ）、栗家（くりや）、文原（ふんはら）、夜麻（やま）の四つの郷が存在した。これらの郷の位置は、大家郷が島崎川沖積地を基盤とする同時代の遺跡集中地域のいずれかと比定されているほかは、未だ確実なる根拠に薄いというのが実状であろう。その一方で、考古学的見地からは、規模はやや小さいながらも、奈良、平安時代の遺跡群がある程度の密集をみるこの渋海川流域に、現在では、栗家・文原・夜麻なる地名は残されていない。

次に本遺跡を取り巻いたと思われる交通についての概観・推論してみたい。ひとまず①北陸道へ至るルート、②古志郡の中心地（郡衛？）に至るルート、③水運を利用するルートの三つに分けてみたい。まず、北陸道に所在した古代の駅家へ至るルートを推定すると、現在、岩田遺跡周辺の信濃川左岸曽地・西山丘陵の東端から同丘陵を越えて日本海側方面、すなわち北陸道の方向へ抜ける峠は四つあり、北から順に地蔵峠、曽地峠、峠、塚山峠と並ぶ。このうち、より近距離であること、あるいはより中央へ近い南西方向を選ぶと、次の二つのルートが考えられる。すなわち、A・岩田から奔走川をさかのぼり、山屋、大積高鳥、鷹の巣、夏渡を抜け、峠を越え、吉井黒川から吉井に至るルート、B・ほぼ現在の信越本線沿いに渋海川をのぼり不動沢、西谷と南下し、塚野山から塚山峠を越え、長鳥川を下って小島、北条に至るルート、の二つである。このAルートの曽地、吉井周辺には、三島郡多太駅に比定される式内多伎神社があり、Bのルートには同じく式内石井神社、御嶋石部神社が存在する。

次に、古志郡内における中心地域との道筋を考慮すれば、前述のように、遺物包含地は島崎川流域（同地域は、近年八幡林遺跡が発掘調査され、改めて注目を集めた地域である）に集中し（註五）、本遺跡からこの地へ至るための曽地丘陵の東端沿いに北上す

るルートも視野にいれておく必要があるだろう。しかしながら、ここでもとりあえず北陸道へ出る最短ルート、特に多太駅に至るルートが用いられた可能性も大いに考えられる。ただし、これらの支線路は、幹線路と異なり充分に整備・維持されていたとは考えにくく、長期間一定であったという保証もないのが実状と思われる。

最後に、本遺跡の立地からは、渋海川とその本流である信濃川の水運を利用して、中央や佐渡、その他の地域との交易ルートの存在も考慮されるべきかも知れない。本遺跡から出土した遺物には、特に佐渡で生産されたと思われる須恵器が存在し、この地域との交流を伺わせる。ただし海運に関しては、『延喜式』「主税式　諸国運漕雑物功賃」に蒲原津の記載があるのみで、岩田遺跡とこの蒲原津とをつなぐ手掛かりとなる文献史料は皆無と言わざるをえず、今後の本遺跡の他地区や周辺地域における遺跡の発掘調査および考古学的資料の増加をまつのみである。

B　周辺の遺跡と越路町における考古学調査（附図1）

本遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡は、大きく三つのグループに分けることができる。第一は、古北陸道沿いに伸びる柏崎市から出雲崎町にかけての遺跡群であり、北側は前述の古代古志郡の中心地として想定されている一帯である。第二のグループは本遺跡の立地する信濃川左岸のグループで、一の沢窯跡を中心とする関原丘陵に立地する遺跡群と本遺跡周辺地域、さらに小千谷市権田窯跡を中心とする小粟田原の遺跡群に細分されよう。さらに第三は、信濃川右岸に立地する遺跡群で、東山丘陵の西端に位置する。この中で、長岡市乙吉町の間野窯跡は長岡科学博物館により昭和二八年と二九年の二度に渡って調査されている。

越路町における、本格的な考古学的調査は、昭和三六年の朝日遺跡の発掘調査に始まる。朝日遺跡は来迎寺に所在する縄文時代晩期の集落遺跡であり、当時調査の指揮を執ったのは中村孝三郎氏であった。以後、昭和四二年の朝日百塚（時期不明）の発掘調査に続き、同年の並松遺跡の調査から、五六年の成台遺跡、五七年と五八年の中山遺跡の第一次・二次の発掘調査、さらに昭和五八年の多賀屋敷と続くが、これらは朝日百塚を除くと、すべて縄文時代の遺跡発掘調査である。また、本遺跡の周辺では長岡市の岩野原遺跡A地点（一九八一）・笹山窯址（一九八〇）などが調査されている。

註四　米沢康　一九八〇「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』三二―六

註五　金子拓男・岡本郁栄　一九七七「西古志の古代と海上交通」『新潟県文化財調査年報　第16　寺泊・出雲崎』

第三章　岩田遺跡の調査

一、調査の概要と経過

A　調査の経過

岩田遺跡の調査は雪解け早々の四月五日から、けたたましい重機の轟きで始まった。調査対象地は事業計画と現地調査結果を踏まえて新潟県教育庁文化行政課が指導した二用地（総面積一〇三四平方㍍）を調査対象範囲として調査に着手した。現況の地目は水田であった。

グリットの設定は、開発用地の南側に走っている用水路主軸をy軸（基線）と呼称した。そのy軸ライン上で、なおかつ調査範囲西側の土地境界杭を零原点とし、そこでy軸に直行するラインをx軸（基線）と呼んだ。y軸とx軸の組み合わせで10㍍×10㍍の方眼を組んだ。これを大グリットと呼び、さらに大グリットを2㍍×2㍍の小グリット25区に区画した。グリット呼称は南北ライン（x軸）をアルファベットで、東西ライン（y軸）を算用数字を配して、その組み合わせをもって大グリットを表示した。

調査は、（一）出土した遺物の記録および収納は、その基本を遺構処理とした。また、攪乱以外の包含層出土資料については小グリット処理による「データシート記録収納法」を採用した。（二）遺構の性格を追及する必要が生じた場合、覆土のサンプリングと分析を実施することにした。（三）検出した遺構はその全体を把握してから調査方針を立てて進めることを心掛けた。以上の三点を基本調査方法として位置付けながら進めた。

調査進行についての詳細は以下の日誌抄にまとめたので参照されたい。

四月五日　予定していた除雪作業もせずに、事前準備に入ることができた。この事前準備期間に、調査範囲の確定・表土除去・暗渠工事・基本測量と方眼測量（大グリット）・資材と機材の搬入・危険個所（特に暗渠の集水桝）の確認と安全対策などを実施した（～四月一三日）。事前協議により、掘屑泥水溜と泥水廃水溜の予定地を取り囲む範囲を調査対象地（B区）とした。

四月一五日　いよいよ発掘調査の開始。沢下条集落の老人クラブの面々が元気な顔を揃えてくれた。教育長の挨拶・担当、調

査員の紹介・遺跡の概要と調査方法・安全管理指導・事務連絡を適宜に進めた。調査はA区から進めることからベルト・コンベアーの設置から始まった。調査はA区から始めて、下段のB区へ移動する計画であった。段差のあるA・B区の堆積土層を観察対比する必要性から、急遽事業主と協議して上・下段を結ぶ農道沿いに幅一五〇㌢のaトレンチを設定した。また、A区のB5区・D5区にトレンチを入れて土層を確認した。

四月一六日〜　早速、D5区・B4、5区から須恵器や土師器などの遺物が多量に出土し始めた。一七日にはC4、5区の小礫を基盤とする地区から大形の柱穴や柱の柱根と思われる木片などが検出され始める。配列関係についての検討が二二日に行なわれ、A区に二間×三間・三間×四間の建物群が整然と立ち並んでいたことが明らかになった。また、順次進めていた遺物洗浄で「墨書土器」が一点発見された。この遺構と遺物の確認を踏まえ、更に周辺の窯跡群の存在を勘案したときに、岩田遺跡の地域における位置付けが大きな課題として浮上してきた。二四日には、B、C、5、6区から検出された小さな溝群を「畝状小溝」と便宜的に呼称すると共にこの遺構覆土の花粉化石分析を試みて『畠』の畝跡かどうかを探ることにした。D8区から天禧通宝（渡来銭）が出土したことから、中世遺構の存在する可能性が指摘された。下段（B区）へ調査が入ると共に、B区北側暗渠沿い（幅約一㍍）を拡張することを協議し、ご理解いただいた（附図5）。二九日にはB区全体の遺構確認状態を確認して、B区南側について再度Ⅱ層の除去を実施することを決定した。最終的には、A区とB区における遺構の種類・その分布状況が異なることが明確となり、狭い調査区内で空間機能が相違していたことが指摘された。B5〜8区に掛けて幅約五㌢〜二〇㌢・深さが明確でないV字状の溝が蛇行して検出された。この溝は蛇行し第四号掘立柱建物址などの遺構を切り崩していることから、地震に伴う地割れの可能性を想定した。そこで三〇日に地震の専門家である飯川健勝先生（小千谷西高等学校）・加藤正明先生（長岡市立科学博物館）から来跡いただき、観察して所見をいただいた。その所見によれば、『地震の亀裂に極めて近似する。しかし、地震が要因であるとするならば、少なくとも基盤層まで亀裂が達しているはずである。それが確認できない以上、可能性の指摘に留まる。地滑りが原因とも言える。』以上のように要約される。五月二日に、水洗い作業によって更に墨書土器が確認された。B区で検出された第一〇号

土坑を井戸跡の想定で調査に着手した。しかし七日に完掘した結果、井戸跡でなく大きな土坑であった（詳細は後述）。

五月一一日　春雨によって、ますます新緑が鮮やかに映えてきた回りの景観を眺め、ようやく無事に基本的な発掘調査を終了することになった。また、一二日～一七日まで追加調査としてaトレンチの遺構発掘と周辺遺跡・地形調査を実施した。

B　地層堆積（第2図）

地理的環境（第二章一）で触れたように、第三紀層を基盤とする曽地丘陵の先端部に広がる扇状地が渋海川によって侵食崖線化した台地上に『岩田遺跡』は所在している。

当該調査区（地目は水田）で確認した基本堆積地層は四枚の地層に大別することができた。

Ⅰ層：表土層。地層の色調は黒色を基本とした暗黒褐色を呈していた。地層には径一五㍉程度の円礫（砂岩・粘板岩・チャート）と粒径の粗い砂を含有している。粘性はほとんどなく、しまりはない。

Ⅱ層：水田の客土層。粘性・色調・含有物によって細分される。

Ⅱa層はⅠ層に比べて粘性が確認できる黄灰色を基調にしている。褐色・黄色などを呈するシルト粒子を混入している。

Ⅱb層はⅡa層と比較すると粘性が強く、また色調も暗い感じを受ける。含有物としてリモナイト汚染物（径一㍉ほど）やシルト粒子を混在している。

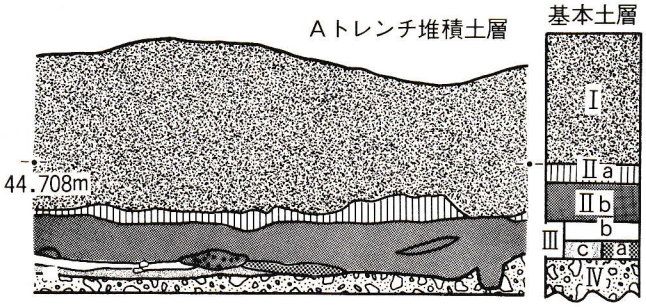
Ⅲ層：暗黒褐色を呈する粘質土である。構成物の違いから細分される。

Ⅲa層は色調極めて暗く、粘性も強い。粒径三㍉～一〇㍉程度の炭化物粒子を含んでいる。

Ⅲb層はⅣ層粒子を混入しながら砂粒子も多く認められる。粘性は極めて強い。

Ⅲc層は締まりのあるシルト質の強くなる地層である。部分的にⅣ層粒子が混入している。

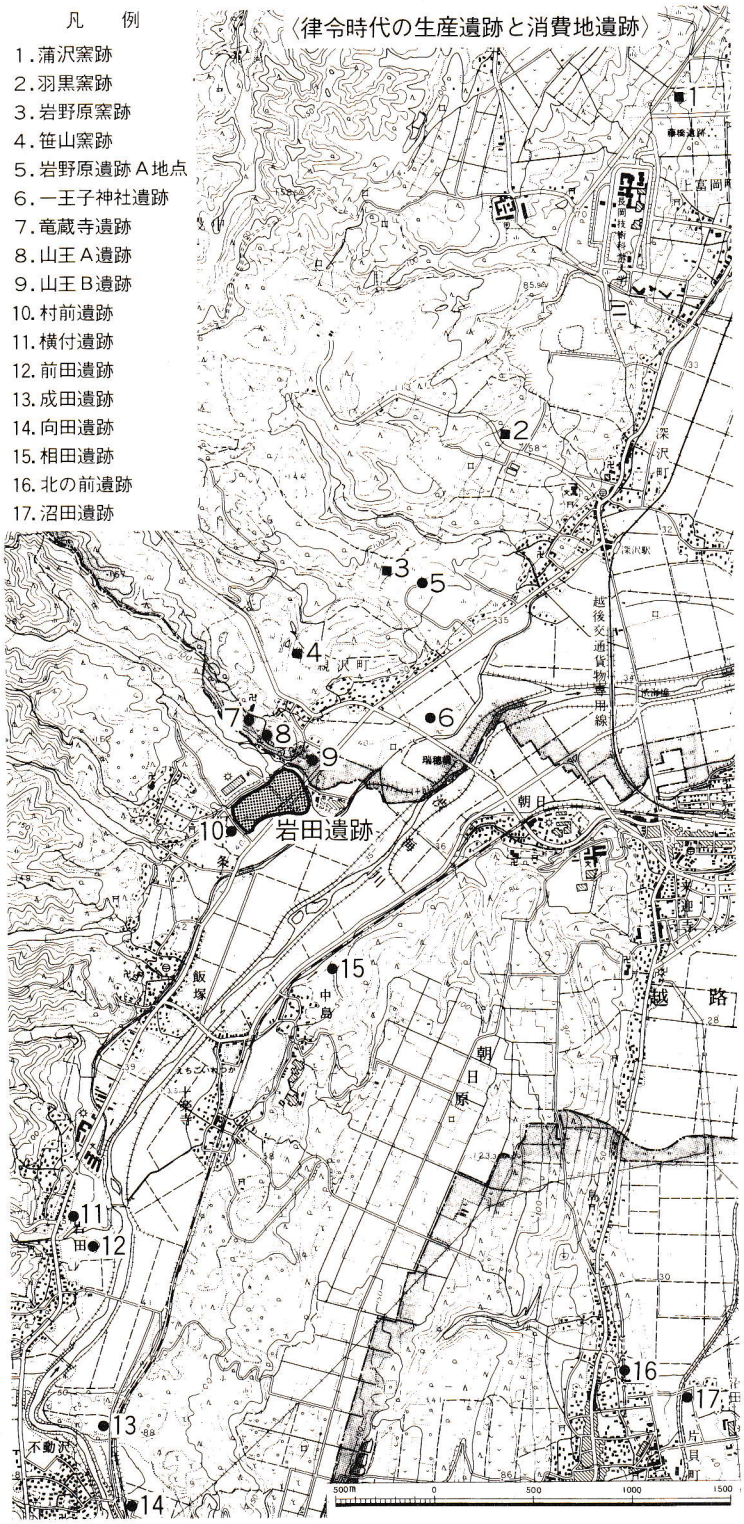
Ⅳ層：シルト・砂・礫の互層。部分的に全く性質の違う地層が分布している。所謂第三紀の基盤層。



第2図　基本土層

C　遺跡の概観（第3図）

東頸城山地から流れてくる渋海川が、越路の谷から平野へ流れ込む所に沖積段丘が広がる。そこに『一王子神社』の境内地がひっそりたたずんでいる。その周辺には平安時代の遺物群が散布している。ここから当該調査区を眺望するならば、渋海川に飛び出すひときわ聳えている台地がある。そこに岩田遺跡が展開している。この台地から渋海川を眺めれば、旧河道が大きく蛇行し、遺跡の真下をゆっくりと貫流していたことが地形観察から読み取られる。この旧河道と台地との比高差は約六～一〇メートルを計測する。



第３図　岩田遺跡の概観

二、調査と整理

A　発掘作業

岩田遺跡の調査は、工事期間との整合性を計ることを念頭に置き、平成三年一月一三日に調査計画事前協議が行なわれた。この協議において、調査期間・調査組織・調査範囲・安全管理責任・調査期間中の協議体制などについて話し合われた。特に、工事範囲と試掘調査結果を照合しながら、工事範囲を埋蔵文化財が稀薄な位置に極力移動して頂くことを強調した。その結果、当初計画のセラーの予定範囲を縮小し、掘屑泥水溜・泥水廃水溜の計画位置を移動して頂くようご理解とご協力を得た。

平成三年は幸運にも四月上旬に、ほとんど雪がなかったことから調査の準備に入ることにした。その準備は四月五日から開始した。事前準備として、一、調査エリアの設定　二、重機による表土剝ぎ　三、地目が水田であったため雪解けの湧水を想定して、調査区を取り巻くように暗渠を巡らす工事　四、安全柵や安全保護用看板の設置などの安全管理対策　五、調査事務所・休憩所・仮設トイレの設置　六、発掘機材の点検と搬入　七、ベルトコンベアー・ゼネレクター・ローリングタワーの搬入・設置　以上を行なった。

調査は、中村孝三郎先生からのご指導を頂き、別添の調査組織で進めた。調査方法は既存の水田面であった上段・下段を便宜的に、上段を(A区)・下段を(B区)と呼称して、順次A区からB区へ調査作業を進めた。また、A区とB区との地層堆積状況を調べるために、調査区南側に幅一五〇㌢の地層観察対比用のaトレンチを設置した。A区ではまばらに分布する地山の砂礫層を、切り抜くように柱穴が検出された。そのために、柱穴の覆土や規模から配列関係を確認し、その後カラーテープで位置関係を示して記録写真(遺構確認状況)を撮影した後に遺構発掘を手掛けた(図版2)。そして、地山を切り開くように検出された「地割れ状溝」が地震による地割れである可能性が推考されたために、飯川健勝先生(小千谷西高等学校教諭)・加藤正明(長岡市立科学博物館)から見学いただきご教示を賜った。

B区の調査はA区同様な手続きで進めることにした。しかし、遺構の検出状況に明確な違いが認められた。特に、A区で確認できなかった「径の大きな土坑」や「幅狭で浅い溝(同一方向の溝群)」が検出されたことから、空間的な場の使い分け(場

の機能差）を想定して、それら遺構の覆土サンプリングを取り入れ、花粉化石の分析検出（畠の畝の想定）やウォーター・セパレーションによる植物微細遺存体の検出（食料残滓物の摘出を想定）を目的とした調査を実施した。

検出遺構の記録測量図作成は、バルーンを利用した写真測量を導入した（株式会社こうそく）。

この度の調査区の意義付けのために、周辺地域の表面採集調査と聞き込み調査を現場調査の一部門と位置付けて三日間掛けて周辺をくまなく歩き回った。

以上の調査を、以下の調査組織で対応した。

発掘調査主体　越路町教育委員会　　総括　教育長　山本順平

調　査　団　長　中村孝三郎　（日本考古学協会　会員）

調　査　担　当　佐藤雅一　（日本考古学協会　会員）

主任調査員　石坂圭介　（國學院大学考古学専攻　第九一期卒業）

調　査　員　神林昭一　（新潟県考古学会　会員　新潟県文化財保護指導委員）

調　査　員　星野洋治　（新潟県考古学会　会員）

調査補助員　渡辺マサ・石原純子・大矢裕子（越路町の星空と歴史文化を守る会　会員）

調査協力員　長束健三・長束伊次郎・長束朝次郎・吉岡由春・太刀川熊一・重野甲一・陶山金一・藤塚修次
高頭石五郎・長束イト・長束シズエ・長束セツ・長束フミ・長束キヨ・長束マス・重野ウメノ・
重野ミツ・松永みす・中村ミイ・吉岡トシ子・丸山チヨ・平石　芳

整理協力員　西脇千代子・丸山久美子・佐藤桂子・矢田冨美子

事　務　局　越路町教育委員会　社会教育係
伊佐文也事務局長・金安栄一参事・松井幸二参事・関　誠也・安藤正芳・小野塚　了・新保浩一・
佐藤一好・永井千恵子

B　整理作業と報告書作成

出土遺物の水洗い洗浄は、現場調査の後半(四月三〇日～五月一三日)に作業協力員のローテーションで進めた。遺構覆土のウォーター・セパレーションを同様に実施した(五月一四・一五日)。そして、五月一六日から正式な整理作業を開始した。

整理作業は、基本として主任調査員・調査員および調査補助員によって進めたが作業量と整理期間との関係から変則的に整理協力員を願って協力を得た。この整理作業は、第一次整理から第三次整理作業に分けて進めた。第一次整理作業は、遺物の注記・遺物の選別・出土遺物の点数調べ・水洗い検出資料の選別・写真台帳、図面台帳などの作成・データシートの整理を実施した(五月一六日～六月八日)。

第二次整理作業は、出土土器を中心とした形態分類作業と分析集計作業を実施した。また、搬入礫の属性分析や墨書土器、柱痕などの写真撮影・墨書土器の集成作業も含まれている(六月十日～二六日)。

第三次整理作業は、整理場所を郷土資料館から福祉センターに移動して再開された。ここでは抽出した遺物の復元、実測、拓本、撮影と属性分析グラフ作成を主に行なった(九月一七日～一一月八日)。

また、本格的な実測トレース・挿図レイアウト・写真図版作成・文章執筆・編集は、中村孝三郎先生の指導のもとで、担当・主任調査員・調査員が分担作業を行なった。編集は佐藤・石坂が共同で実施した。

第一章　調査に至る経緯……安藤正芳
第二章　岩田遺跡の位置と環境
一、位置と地理的環境
A　岩田遺跡の位置……石坂圭介
B　岩田遺跡周辺の地形……石坂圭介
C　遺跡の範囲と現況……石坂圭介
二、岩田遺跡周辺の歴史的環境
A　古代の越路町周辺の行政区分と交通……神林昭一・石坂圭介
B　周辺の遺跡と越路町における考古学調査……神林昭一・石坂圭介
第三章　岩田遺跡の調査
一、調査の概要と経過
A　調査の経過……神林昭一・佐藤雅一
B　地層堆積……佐藤雅一
C　遺跡の概観……佐藤雅一
二、調査と整理
A　発掘作業……佐藤雅一
B　整理作業と報告書作成……佐藤雅二
C　遺構各説……佐藤雅一・石坂圭介
D　遺物各説……佐藤雅一・石坂圭介
第四章　まとめ
一、墨書土器について……神林昭一・石坂圭介
二、当該調査区の遺構分布について……星野洋治・佐藤雅一
三、岩田遺跡発掘調査の意義……中村孝三郎・神林昭一
星野洋治・佐藤雅一
石坂圭介
〈付編〉岩田遺跡出土遺物自然科学分析報告　パリノ・サヴェー株式会社

C　遺構各説

今回の発掘総面積は一〇三四平方㍍である。工事の関係からA区とB区に分かれ、それぞれの面積はA区四九五平方㍍、B区は五二四平方㍍である。またこの東西に長く設定した両区の西よりに、A－B区間の土層を観察するため、幅約一五〇㌢のaトレンチ（一五平方㍍）を設定した。

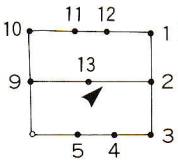
以下、まず各区毎に概略を述べる（附図4・5）。

A区はB区の北約一二㍍に設定され、農地整備後の現在において、B区よりも一段高くなっており、その比高差は約二㍍である。このA区においては、掘立柱建物址四基と柱穴列一基が検出されており、そのほか土坑が五基確認されている。B区はA区の南より、すなわち渋海川よりに位置する。このB区においては柱穴列が二基東端に認められたほかは、掘立柱建物址は検出されなかった。その代わりA区で認められなかった畝状小溝が西側で、また中央や東よりで方向を異にする溝跡が確認されている。土坑はこのB区からも多数検出されている。aトレンチからは土坑が三基検出された。また、ピット類は遺跡の各区から偏りなく検出されている。

以下本調査区から検出された主な遺構について説明を加える。

第一号掘立柱建物址（附図6：図版4）

A区の南側中央C・D5・6区にある南北二間（四㍍）×東西三間（四・七㍍）の東西建物である。方位は西に約四八度傾く。西南隅の一部が調査区域外にあたり、確認されていない。また、南側柱列の東から二番目の柱は、第一柱列の柱穴と重複している。ただし掘り替えの痕跡は認められなかった。桁行柱間は北側柱列において東から順に一・七、一・三、一・七㍍である。また、西妻と東妻を結ぶライン上のほぼ中央に掘り込みの浅い（一八㌢）柱穴が存在する。柱掘形は大小二種類あり、北側柱列の東から三本と南側柱列の中央がやや小さく、一辺四〇㌢である。これらの深さは確認面から二〇㌢～三〇㌢である。その他の柱掘形は一辺五〇㌢～八〇㌢で、やや丸みをおびる方形であり、深さは三〇㌢～四〇㌢である。掘形埋土は黒色土が主体で、柱痕跡は経約二〇㌢であった。遺物は第八ピットから土師器が二点出土している。



第四図

第二号掘立柱建物址（附図7：図版4）

A区の北側中央C・D4・5区にある南北三間（五・四㍍）×東西二間（四・六㍍）の南北建物である。方位は西に四七度傾く。柱間寸法は桁行・梁間それぞれにおいてほぼ等間で、桁行が西側柱列において北から一・九、一・八、一・七㍍、梁間が北側柱列において約二・三、二・三㍍である。柱堀形はやや丸みをもつものと方形のものとがあり、ほぼ同程度の大きさで、径約六〇㌢～八〇㌢である。これらの確認面からの深さは三〇㌢～六〇㌢である。掘形埋土は黒色土が基本で、青灰色シルト層がこれに付随することもある。柱痕跡は径約一六～二〇㌢である。遺物は各柱穴から土師器が一八点、須恵器が七点出土している。

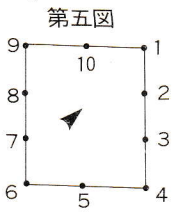
第三号掘立柱建物址（附図7：図版5）

A区の北側中央に位置する南北三間（六・五㍍）×東西二間（五・二㍍）の南北建物である。前述した第二号掘立柱建物址と大きく重複する。方位も第二号掘立柱建物址とほぼ同じで、西に四四度傾く。柱間寸法は、桁行が西側柱列において、北から二・三、二・二、二・〇㍍とほぼ等間で、梁間も北側柱列において西から二・六、二・七㍍と等間であるが、南側柱列においては、中央の柱穴が東にかなり寄っている（東から二・〇㍍）。柱掘形は方形で、一辺約七〇～一一〇㌢と大きく、確認面からの深さは四〇～六〇㌢である。掘形埋土は黒色土が主体をなす。柱痕跡は約二〇㌢であった。各柱穴からの遺物は、土師器が主体を占め一〇四点、須恵器も二二点出土している。

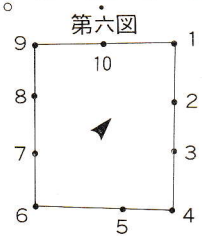
第四号掘立柱建物址（附図8：図版4）

A区の西南隅、B5・6区に位置する南北四間（五・六㍍）×東西五・二㍍の南北建物である。方位は西に四五度傾く。建物の北西隅の一部は、調査区外にあって確認されていない。柱間寸法は、桁行が東側柱列において北から一・九、一・八、一・九㍍とほぼ等間であるが、梁間に関しては南側柱列においては三間で、西から、一・二、二・〇、一・九となる。さらに北側柱列においては、二間であったと思われる。柱掘形はすべてほぼ方形を呈し、大きさは一辺八十㌢程度のものが多く、南側柱列の両隅は一〇〇㌢を超える。これらの確認面からの深さは、六㌢～八〇㌢と深い。掘形埋土は黒色土を主体とする。柱痕跡は約三五㌢である。なお、北西から南東にのびる地

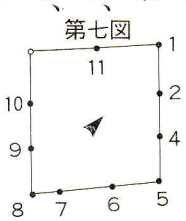
第五図



第六図



第七図



割によって、破壊を受けた柱穴がある。遺物は、土師器八二点、須恵器二八点が出土している。

第四号土坑（附図9）

B－4・5区に位置する第四号土坑は、長軸九八〇㌢：短軸二四〇㌢を計測する長楕円形を呈する溝状土坑である。近接する第六号溝に幅が近似するが、壁の立ち上がり角度や遺構覆土の諸要素に相違点が認められた。遺構壁の立ち上がりは緩く、その横断面形は逆台形を呈している。覆土は褐色土を基本として地山粒子（径五㍉）と風化円礫（径二〇㍉）を混入すると共に、径十㍉前後の炭化物を含んでいた。粘性・含水率が高い単一土層であった。包含されていた遺物は稀薄であった。それら包含されていた遺物群から抽出した資料を附図11に掲載した。須恵器の有台坏・無台坏・坏蓋や土師器の坏と甕などで、その調整技術や器形法量の特徴から平安時代前半（九世紀前半）に比定できるものであろう。したがって、第四号土坑の埋没時期は少なくとも平安時代前期に求めることができるであろう。

第五号土坑（附図9：図版5）

A区南隅のやや西より、C6にある浅い土坑である。不整形な平面プランを示し、長軸は北西―南東方向である。長軸は約一・八㍍、これに直交する短軸は一・四㍍を測った。確認面からの深さは一〇～二〇㌢であり、北側と東側にやや深い箇所が認められた。覆土は黒褐色土を主体とし、しまり良く、1層で炭火物を大量に含む。これは遺物とともに廃棄されたものと思われる。遺物は、数箇所でやや集中して出土し、小破片のものは全体から多量に出土している。須恵器が三一点、土師器は二五八点を数える。平面図およびセクション図には現れないが、担当者の観察所見によれば、本土坑は、短時間のうちに数回に渡って掘られた小さな土坑の複合したものであり、その度に遺物が廃棄されたゴミ穴かと思われる。しかしながら底面付近からの出土遺物は少ない。なお、本土坑も、第四号掘立柱建物で述べた地割によって破壊を受けている。

第一〇号土坑（附図10：図版5）

B区の中央やや北西よりC8に位置する土坑である。平面形はほぼ正方形を呈し、西に三五度傾く。一辺の長さは約一九〇㌢である。底面は、西から緩やかに傾斜して深くなっていき、五〇㌢ほどの深さで平坦になり、東はやや急にたちあがる。覆土は炭火物粒を含む黒色土および暗褐色土が主体をなし、東側の底面近くでは、暗灰青色シルト層や黒色土が堆積してい

る。詳細は附図10を参照されたい。遺物の出土量は、1・2層で多いが、3・4層でも出土している。須恵器一五点、土師器六六点のほかに、木片が六点出土しており、この中に盆も含まれる。

第一号柱穴列（附図6：図版4）

C－6区のピット1・2とD－6区のピット1～4計六基の柱穴は約一一〇㌢間隔を開けてほぼ等間隔に並んでいる。柱穴の平均の大きさは、径二五㌢：深さ二〇㌢であった。この配列軸を中心に延長範囲あるいは直行範囲で詳細な遺構検出を試みたが、関連すると思われる遺構は確認できなかった。

第二号柱穴列（附図5）

F－7区のピット1a・1b・2とF－8区のピット5は、約一四〇㌢の間隔を持ちながら確認された。柱穴の大きさは、径約二五㌢：深さ約二〇㌢に平均値を求めることができる。その大きさは、第一号柱穴列の柱穴に近似していることが指摘できる。この確認された配列軸の延長および直行する範囲を、細かく観察したが関連する柱穴は認められなかった。しかし、配列軸の西側に延びていく可能性がある（未調査区）。

第三号柱穴列（附図5）

F－7区のピット3とF－8区のピット15～17が直線に並んで検出された。この配列軸の延長範囲や配列軸の直行する範囲をくまなく観察したが、一連の配列関係を検討しうる遺構はなかった。しかし、後ほど触れるが配列軸は第一号建物址の桁軸に直行することが確認されている。

畝状小溝群（附図5：図版6）

B・C8区を中心に幅五㌢～一五㌢程で確認面から深さ約二㌢～五㌢程の溝が、若干の重なり合いを持ちながら確認できた。この溝の基本主軸方向は第二号・第三号建物址の梁行軸とほぼ揃っていると言える。所謂東西軸に沿って畝状小溝群が分布していることが附図5を参照頂ければわかる。これら畝状小溝群は畠耕作に伴う『はだっこ』（註六）の跡だと推考している。畠に関連する遺構の可能性から、覆土の花粉分析を試みたが花粉化石は摘出できなかった。

註六　来迎寺在住の深井栄一氏（65才）によれば、畠を耕す際に鍬で掘り起こす谷の部分を当地では『はだっこ』と呼称している。

D　遺物各説

この度の岩田遺跡の発掘調査において、Ⅲ層中から、およびⅣ層面で確認された遺構の覆土内から須恵器・土師器の破片、円面硯および墨書土器、さらには盆・柱痕などの木製品が出土している。その総数は須恵器一九二七点、土師器五一三六点である。

またこれらの出土遺物の大半は小破片であり、その復元率も極めて低いといわざるを得ない。当該期すなわち平安時代前半期における土器研究は、器種の組成および器形の計測属性さらには器形部位における器面調整のあり方など総合的に検討することによって、相対的編年の位置付けが明確になる。したがって、本調査において出土した遺物群から詳細な時期決定を行うには、いささか不充分な資料群と言わざるをえない。よって、ここでまず本遺跡出土の迎物群からその帰属時期にかかわる議論において限界のあること確認しておきたい。

以下では、出土遺物群から本遺跡を特徴づける遺構出土遺物および包含層（Ⅲ層）出土の遺物群から抽出して紹介することにする。

古墳時代の遺物（附図11：図版7）

第四号掘立柱建物址の第一一号柱穴から出土した古墳時代の高杯の細片である。細片の器形部位は胴部と脚部の接合部にあたる。器面はローリングを受け、摩滅している。しかし、表面を仔細に観察するならば、幅一㎜（単位幅不明）のハケ目が三箇所において確認される。ハケ目の条方向は基軸に大して平行に施されている。本遺物が四号建物一一号柱穴から出土したことは、二次堆積の充塡土に含まれた結果と解釈しておきたい。

平安時代の遺物

第二号掘立柱建物址出土遺物（附図11）

第二号掘立柱建物址の第二・三・四・六・七・九・一〇号柱穴の覆土層から遺物が出土している。そのうちわけは須恵器七点、土師器一八点、木片二点、搬入礫二点（うち一点に焼痕あり）が出土している。

2は有台杯である。第一〇号柱穴から出土している。口径一三・二㌢、底径九・四㌢、器高四・二㌢を計測する。色調は暗灰色を呈し、胎土の種別はC2類（註七）に分類される。身の浅いタイプで、体部下半は丸みをもち、体部上半からは口縁

部までほぼ垂直にのびる。口唇部はまるくおさまる。体部外面は全体的に滑らさである。底面の処理はヘラ切りによる。高台部は外にふんばり、内端接地し、端部はヘラ調整により稜を有する。

第三号掘立柱建物址出土遺物（附図11：図版7）

第三号建物の第一・二・四～一一号柱穴の覆土層から遺物が出土している。そのうちわけは、須恵器二二点、土師器一〇四点、木片一点、搬入礫一二点（すべて焼痕あり）である。

3は第一一号柱穴から出土した、口径一二・四㌢、器高二・九㌢、底径九㌢を計測する須恵質土師器の無台杯である。体部はゆるくたちあがり、途中から角度をやや急にする。内面は全面にロクロナデがほどこされるが、外面は体部中程から指によるロクロナデが施されているように見受けられる。底面はヘラ切りによって処理されている。焼成は極めて良好で、淡黄灰色を呈している。胎土は②類に分類される。

4は第一一号柱穴から出土した土師器の甕である。三点の口縁部破片接合資料で、遺存度は悪い。したがって、器高の計測はできないが、口径二一㌢を計測する。焼成はやや良好で黄褐色の色調を呈する。胎土は③に分類される。口縁部形は「く」の字に外反し、外反屈曲部および口唇部に凹線が認められる。また器面には煤状付着物がやや厚く観察される。胴部上半部の器壁は約八㍉を計測する。

第四号掘立柱建物址出土遺物（附図11：図版7）

第四号建掘立柱建址物の第一～九・一一柱穴の覆土から遺物が出土している。須恵器二八点、土師器八二点および搬入礫一三（焼痕が認められるもの五点）が出土している。

5はつまみ部が欠損している須形器の蓋である。口径一五・四㌢を推計する。天井部にはロクロナデが施されておらず、ヘラ切りの痕跡を残す。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。また一部の表裏面に若干錆色の変色が認められる。

6は口径三五㍉、器高九㍉を計測する宝珠つまみを有する蓋の破片である。天井部は中心にかけけややくぼむ。色調は灰色を呈し、胎土はC2類に属する。蓋の肩部に幅約二三㍉のロクロケズリが認められ、その外側には軽いロクロナデがほどこされている。

7は須恵器の無台杯である。底径約一〇㌢を計測する。体部外面はロクロケズリののちロクロナデがほどこされる。内面は中心付近までロクロナデがみとめられる。底部にはヘラ切りの痕跡がかるく消されており、なんらかの調整があったとおもわれる。焼成はやや良好で、淡黄褐色を呈する。胎土はA類に属する。また底面外側には「〇」と思われる墨書が観察される（附図16－1）。

8は須恵器の無台杯である。焼成は良好で、灰色を呈する。胎土はC類に分類される。この底部資料は、内面に少量ながら墨が付着する点と研磨痕が観察されることから転用硯として使われていた可能性がある。また、底面の処理はヘラ切りで行われ、そのヘラ切り痕が深いものと浅いものが二重になって観察される。また底部の立ち上がりがシャープである。（註八）

第四号土坑出土遺物（附図11：図版7）

本土坑からは須恵器四〇点、土師器一一一点、焼痕の認められる搬入礫五点、搬入礫一二点、木片一点と覆土最上部から中世陶質土器一点が出土している。

9は須恵器土師器の無台杯である。口径六・五㌢、底径三・九㌢、器高三㌢を計測する。焼成は不良で、色調は黄色味がかった灰色を呈している。胎土は②に分類される。全体的に摩滅がはげしく、かつ粗いつくりである。たちあがりの角度が低く、端部は丸くおさまる。底部外側はヘラ切であるが、その痕跡をほとんど残さず、中心にむかってくぼむようにロクロケズリが施されているとおもわれる。体部下半にはロクロケズリおよびロクロナデの痕跡がみとめられる。内面はロクロナデである。口縁部は摩滅がはげしく内外面とも調整は判然としない。これらの特徴は本地域において九世紀中葉の特徴である（註九）。

10は須恵器の無台杯である。口径八・五㌢、器高二・八㌢を計測する。焼成は良好で、灰色を呈する。胎土はC類に分類される。本資料も底部立ち上がり部位に調整変換部が観察される。体部外面の大半はロクロナデ調整が行われ、底部と体部の接合部においてはヘラ切りがみとめられる。また墨書による三本の線が観察される（附図16－6）。

11は須恵質土師器の小瓶である。底部径三・八㌢を推計する。焼成はやや不良で淡灰色を呈する。胎土は②に分類される。外面において底部と体部の接合面が顕著で、ふくらみをもつ。底部はヘラ切りと思われるが、はっきりしない。体部か

ら内面はていねいにロクロナデがほどこされている。

12は須恵器の蓋である。ヘラ切りによって作出されているが、その痕跡をロクロナデによってほとんど消しいる。肩部はヘラケズリが若干みとめられ、その上を粗いロクロケズリ(幅二二㍉)を施している。つまみは径二七㍉、高さ九㍉を計測する宝珠つまみである。焼成は堅く、色調は灰色を呈している。胎土はA類に属する。

13は須恵器の無台杯である。底径六㌢を推計する。焼成は良好で灰色を呈する。胎土はC類に属する。底面処理はヘラ切りによって行われ、墨の痕跡がわずかながら観察される。

14は土師器の椀である。底径六・二㌢を推計する。焼成は極めて良好で、赤褐色を呈する。胎土は③に分類される。底部の器厚はきわめて薄く、二㍉である。また底部外面はヘラ切りによって形成され、底部たちあがり下端まで認められる。器面上半部はロクロナデが施されている。器面外面の底部と体部の境は極めてシャープな稜線が認められる。

15は須恵器の有台杯である。口径一一・五㌢、底径七・一㌢、器高六・五㌢を計測する。遺存状態は良好で約八割が残っている。深身でやや小型の部類に属するであろう。体部は開き、直線的にたちあがる。底部はヘラ切りを行ったのちにロクロケズリが行われ、その範囲は体部下端部まで続いている。器面内外面ともていねいなロクロナデ調整が施されている。高台は不明瞭ながら外端接地である。底部中央部に「〇」の墨書が明瞭にみとめられる(附図16－8)。

16は土師器の小甕である。口縁は強く「く」の字に外反し、その径一六㌢を計る。焼成は良好で、胎土に粗い砂をまじえた黄褐色を呈する資料である。器面はロクロナデによって整形されている。また、外反する口縁内側に煤状付着物が認められる。

第五号土坑(附図12：図版7)

第五土坑覆土中から、須土器三一点、土師器二五八点、およびその最上位から中世等質土器二点が出土している。

17は土師器の甕の底部資料である。底径六・四㌢を計測する。焼成は良好で、褐色を呈する。底面は回転糸切り技法によって処理されている。底部と体部たちあがりの境界は極めて鋭角な稜線が観察される。

18は土師器の椀である。口径一三・八㌢、器高三・七㌢、底径六・二㌢を計測する。焼成はやや良好で、褐色を呈してい

る。底面は回転糸切りによって処理される一方、器面上半部までロクロケズリ調整が認められ、その調整変換部は他の資料と比べるとより高い位置にみとめられる。二次属性として口縁表裏面にのみうすく煤状付着物が認められる。

19は無恵器の無台杯である。摩滅がはげしく、粗いつくりである。底面外側にはヘラ切りの痕跡を顕著に残す。体部にはロクロナデがみとめられる。焼成は不良で、灰色を呈する。胎土はC2類に分類される。底部径八・四㌢を測る。

20は須恵器の蓋である。つまみ部の宝珠突起部がほとんど退化している。天井部は顕著なロクロケズリがみとめられるが、ヘラ切りの痕跡をわずかに残す。同様に、外面肩部にはシャープなロクロケズリが施される。つまみは径三〇㍉、高さ八㍉を計測する。焼成は良好で灰色を呈する。胎土はC類に属する。また、内面には研磨面が顕著に観察されることから転用硯もしくは皿として再利用された可能性がある。本資料の諸特徴から九世紀なかごろの在地系製品と考えられる(註一〇)。

第六号土坑(附図12：図版8)

六号土坑の覆土から須恵器六点、土師器一六点、焼けた搬入礫四点が出土している。

21は須恵器の壺の底部であろう。底部には高さ九㍉の有台を有している。その有台は微妙なヘラケズリによって細かな面変換する稜線が顕著に認められる。その底径は七・六㌢を測る。焼成は良好で、灰色を呈し、胎土はB類に分類される。底面の調整はヘラ切りによって行われている。これら特徴から、佐渡小泊産の可能性が推定される(註一一)。また、二次属性として底部に「生」の墨書を認めることができる(附図16－7)。

22は須恵質土師器の無台杯である。底径八・二㌢を計る。焼成は良好で淡黄灰色を呈する。胎土は②に分類される。底部は中心にむけてわずかに膨らむ。底面外側にヘラ工具をこすりつけたような跡がある。この作業によってヘラ切りの痕跡はかるく消されている。体部にはロクロナデ調整が行われている。これらの諸特徴から九世紀なかごろに比定される(註一二)。

第九号土坑(附図12：図版8)

第九号土坑の覆土からは土師器一三点、焼けた搬入礫一点が出土している。

23は須恵質土師器の無台杯である。焼成はきわめて良好で、淡黄灰色を呈している。胎土は②に分類される。口縁部端部のすぐ手前で破損しており、端部は尖るものとおもわれる。体部はやや丸みをもち、ロクロケズリの後、ていねいなロク

ロナデがおこなわれている。底部はヘラ切りによるが、その後ロクロケズリが施されている。

24は須恵質土師器の有台杯である。底部から体部下半までが残存している。厚くどっしりしたつくりである。有台は高さ八㍉と高く、特徴のある断面形を呈している。底径九・六㌢を計り、ヘラ切りによって処理され、その後ヘラケズリがていねいに施されている。内側も底部外周においてロクロケズリが行われ、体部と体部の接合による粘土の膨らみを消しているだけでなく、比較的明瞭な凹線が形成されている。体部にはロクロナデ調整がほどこされ、底部のロクロケズリとの境がはっきりしている。焼成は極めて良好で、茶色を呈している。胎土は②に分類される。

第一〇号土坑（附図12：図版8）

覆土からは須恵器一五点、土師器六六点、焼けた搬入礫三点、および盆状木製品を含む木片六点が出土している。本土坑出土の遺物群は、当該調査において復元実測図および復元遺物の量および質が最も優れている一群である。

25は土師器の無台杯である。口径一二・四㌢、器高三・四㌢、底径八・二㌢を計測する。焼成はやや良好で、淡白灰色を呈する。胎土は②に属する。非常に薄く成形され口縁部端部はとがる。底部はヘラ切りが施され、器面上半部はロクロナデがほどこされている。

26は須恵器の無台杯である。口径一二・六㌢、器高三・二㌢、底径九・二㌢を計る。底部はヘラ切りによって処理されている。内面全面と外面体部はていねいなロクロナデによって調整されて、非常になめらかである。端部付近でやや外反し、口唇部はややふくらみ丸くおさまる。焼成はやや良好で、白灰色を呈する。胎土はC類に分類される。

27は須恵質土師器の無台杯である。口径一三・二㌢、器高三・七㌢、底径八㌢を計る。焼成は良好で、淡黄灰色を呈している。胎土は②に分類される。たちあがりはかすかに丸みをもつが直線的にのび、端部はやや尖る。底部はヘラ切りの痕跡が顕著で、器面内外面ともロクロナデによる調整が施されている。このような諸特徴から在地産の製品である可能性が極めて高いと考えられる（註一三）。二次属性として、底部に墨書が観察される。その墨書は漢字の「新」であろう（附図16―4）。

28は須恵器の無台杯である。底径七・六㌢を推計する。焼成は良好で、黄褐色を呈する。胎土は緻密なC類に分類される。底面は回転糸切りによって調整されている。底部と体部の境界は明瞭で、体部にはロクロナデが施されている。

29は土師器の無台杯である。焼成は良好で、黄褐色を呈する。胎土は③に分類される。底部は回転糸切りによって成形され、その径は一一・八㌢を計る。器面はロクロナデによって調整されている。また資料一五などで顕著に認められた底部とたちあがり接合部の鋭角な稜線は認められず、だらりとしたたちあがりを呈する。

30は須恵器の有台杯である。体部下半から底部までが残存している。底径は七・二㌢と小型である。底面は回転ロクロによるヘラ切りである。外周のみロクロケズリがみとめられる。高台は高さ四㍉を計り、内側にロクロナデでほどこしていねいにしあげられている。底部内側にもていねいなロクロナデがほどこされる。焼成は良好で、灰色を呈する。胎土はC類に分類される。二次属性として底面に墨書痕が散見される。諸々の特徴から九世紀前半の可能性がある(註一四)。

31は土師器の小甕であろう。底面は回転糸切りによって成形され、その底径六・三㌢を計測する。焼成はや不良で、淡黄褐色を呈する。胎土には灰色赤色の小礫を含有している。二次的な属性として底部たちあがり内面に黒色付着物が顕著に認められる。

32は土師器の椀である。口径一二・七㌢、底径六・九㌢、器高四㌢を計測する。遺存度は八割と高い。底部は回転糸切りに技法よって成形され、器面は内外面ともロクロナデによって調整されている。資料一八と同様に、口縁部内外面に煤状付着物が顕著に認められる。焼成はやや不良で、茶褐色を呈する。胎土は資料一七と大きく異なり細粒の石英および白色・黒色の風化礫を混入している。

33は須恵器の長頸壺の口頸部である。口縁は強く外反し、口唇部端部は若干くぼむ面を有している。また、口唇外端部は稜が明瞭なリップ状を呈している。その口径は約八・一㌢を計る。頸部は回転ロクロによるしぼり痕が顕著に観察される。その頸部の長さは約七㌢を計測する。また一部の内外面に自然釉が認められる。焼成は極めて良好で、色調は淡灰色を呈する。胎土はA類に分類される。二次的な属性として、頸部破損面に少なくとも十面以上の破損面が観察される。個々の破損面を詳細に検討するならば、打撃による破損面の可能性が極めて高い。しかし、その打撃が人為的なものなのか、もしくはアクシデントによるものなのかは不詳と言わざるをえない。

34は須恵器の蓋である。つまみ部が欠損しているため、その形態は不明である。口径一六㌢を計り、大きい。焼成は良

好で、灰色を呈する。その胎土はC2類に分類される。天井部外側はヘラ切り痕を残さず、かつロクロケズリを施していない。体部にはロクロケズリの後ロクロナデを行っている。内面は全面にロクロナデをほどこしている。

35は器高約三六㌢を推計する土師器の長甕である。口径は一九・二㌢を計測する。その口縁部は強く外反し、その端部はくぼみを有する面をもち、口唇外端部はリップ状の稜を有する。焼成は極めて緻密でその色調は淡褐色を呈する。胎土には洗練された砂粒を含み器面もつややかである。本資料は約一〇点の破片接合による資料であり、その遺存度は九割である。欠損部の大半は底部に集中している。器面の調整は口縁部および胴部上半部と胴部下半部において異なる。すなわち口縁部および胴部上半部はカキ目を称する板状工具による調整が行われ、その調整方向は器軸に対して九〇度の方向に行われている。胴部下半外面は平行タタキ目によるたたき調整痕が認められる。また、内面においては異方向によるハケ目調整が行われ、そのハケ目工具の幅は、約二㌢を計測する。さらに内面を仔細に観察するならば同心円状のあて具痕跡が観察される。すなわち、このあて具痕と外面の平行タタキ目が対となる調整痕と推定される。さらに指摘するならば、内面胴部下半において、この同心円状のあて具痕をハケ目調整よって消しているということが指摘されよう。そして内外面の調整痕変換ラインは胴部上半部の最大径部位付近に求められる。

第一二号土坑(附図13：図版8・9)

第一二号土坑の覆土から須恵器二点、土師器八〇点、縄文土器一点、搬入礫一点が出土している。

36は須恵質土師器の無台杯である。口径一三・二㌢、器高四㌢、底径五・七㌢を計測する。焼成はや不良で淡黄灰色を呈している。胎土は②に分類される。底面は回転糸切り技法による成形が行われている。内外面もとにロクロナデ調整が施されている。

37は土師器の無台杯である。上半部は欠損している。底部径は五・三㌢を計測し、回転糸切り技法によって成形されている。さらに回転糸切り後にヘラ状工具による刻目が施されている。その刻み目は十印を呈する(附図16－7)。焼成は良好で、褐色を呈している。胎土は微細な白色・黒色砂粒およびチャートの小礫を微量に含む。

38は土師器の鍋である。底部は残っていないが、丸底と思われる。胴部上部から大きく外反し、くびれをつ。頸部には

凹線が明瞭に観察される。胴部上半部はハケ目による横位の調整が施されている。胴部下半部においては調整変換ラインを認めることができる。すなわちヘラ工具による調整が横・斜めに行われている。その工具の動きは左から右が基本になっている。内面は横位のハケ目によって調整されている。ハケ目の幅を観察するならば、口縁部にのぼっていくにつれてその幅が細くなっていく。二次属性として、口縁部内外面の二次焼成痕と胴部最大径下半に煤状炭化物が観察される。本資料は底部を欠損していることから、底径および器高は不明であるが、口径のみ計測することができる。その計測数値は三〇㌢を計る。焼成は良好で、色調は淡い肌色を呈する。胎土にはやや粗い砂粒を含有している。

第一三号土坑（附図13：図版9）

第一三号土坑の覆土から須恵器一五点、土師器五八点、焼けた搬入礫三点、搬入礫一点が出土している。

39は須恵器の蓋である。かなり大きく、口径一六・九㌢、器高三・一㌢を計測する。天井部には粗いロクロナデがほどこされ、ヘラ切りの痕跡をわずかに残す。体部外面は幅約二八㍉ほどの顕著なロクロケズリが認められる。縁部にはロクロナデとナデがほどこされる。つまみ部は突面をもたない宝珠つまみを有している。そのつまみの径は二・八㌢、高さ一〇㍉を計る。焼成は良好で、灰色を呈し、胎土はC2類に分類される。

40は須恵器の蓋である。天井部はロクロナデによって調整され、ヘラ切りの痕跡を残さない。体部にはロクロケズリとその後のロクロナデが認められ、縁部ではロクロナデのみが施される。つまみは小さく、径二・三㌢、高さ八㍉を計測する宝珠型である。しかし宝珠の凸部はほとんど発達していない。焼成は良好で、灰色を呈し、胎土はC類に属する。また、二次属性として天井部外面にわずかながら墨書痕と思われる淡い墨斑が散見できる。

41は須恵器の有台杯である。口縁部は欠損し、器高は不明であるが、かなり大型のタイプであると思われる。残存する底部から推計して、底径約一一㌢を計る。底部はヘラ切りによって成形されたのち、ロクロケズリをほどこしている。高台の高さは八㍉と大きい。器面は内外面ともていねいにロクロナデされている。また底部内面には、まず外周にのみほそくロクロケズリを行い、その後にランダムなナデが観察される。焼成はやや良好で、色調は淡黄褐色を呈している。胎土はC類に分類される。

42は須恵器の有台杯である。細片から推計するならば、底径一〇・六㌢をはかる。焼成は良好で、暗灰色を呈し、胎土

はC2類に分類される。体部器面は内外面とも微妙な凹凸面を有しながらも、上手なロクロナデ調整が施され、内側のみ底部までつづく。高台は外方にふんばる内端接地である。焼成は良好で、色調は灰色を呈している。胎土はC2類に分類される。また、高台の特徴や器面調整のありかたなどから、在地生産の製品の可能性がある(註一五)。

43は須恵質土師器の無台杯である。口径一三・二㌢、器高三・二㌢、底径八・四㌢を図る。焼成は良好で、淡黄灰色を呈する。胎土は②に分類される。体部はやや湾曲し、口縁部にいたって外反する。端部はややまるい。器面内外面はロクロナデ調整がほどこされている。底部はヘラ切りの痕跡が著しく残る。二次属性として底部に墨書痕らしい痕跡がわずかながらみとめられる。

44は須恵器の有台杯である。口径一三・六㌢、器高三・九㌢、底径一〇㌢を計る。底部はヘラ切りである。器面上半部は滑らかなロクロナデ調整が行われている。底部内面に非常に滑らかな面が観察される。高台は外におしひろげたようなずんぐりとした断面形を呈し、わずかに内端接地をする。焼成は良好で、灰色を呈している。胎土はB類に分類される。

第一六号土坑(附図13)

第一六号土坑覆土から須恵器二点、土師器八点、焼けた搬入礫三点、搬入礫一点が出土している。

45は土師器の無台杯口縁部資料である。口径一四㌢を推計する。焼成は良好で、黄褐色を基調にしながらも体部下半部において赤褐色を呈している。器面内外面はロクロナデ調整がみとめられる。

第一七号土坑(附図13：図版9)

第一七号土坑覆土から須恵器一点、土師器六点、焼けた搬入礫二点が出土している。

46は土師器の甕の口縁部資料である。口縁部は強く「く」の字に外反する形態を呈し、口唇端部には凹部を有す端部をもつ。器面の内外面はカキ目調整によって整形されている。焼成は普通で、色調は淡褐色を呈する。胎土は③に分類される。

第二〇号土坑(附図13：図版9)

第二〇号土坑覆土から須恵器五点、土師器一一点、焼けた搬入礫三点が出土している。

47は須恵器の有台杯である。口縁部は欠損しているため、口径器高は推計できない。底径は九㌢を計測し、ヘラ切りによって成形されている。高台断面は特徴的な形態を示している。焼成は良好で灰色を呈し、胎土はC2に分類される。

第二五号土坑（附図13・14：図版9）

本土坑はaトレンチで確認された遺構である。本土坑覆土から須恵器一一点土師器二七点、　焼けた搬入礫一点が出土している。

48は須恵器の無台杯である。口径一一・二㌢、器高三・五㌢、底径六・七㌢を計る。焼成は良好で、灰色を呈し、胎土はC類に属する。たちあがりから体部中程まで著しい凹凸面を有するロクロケズリが施され、中程から口縁部にかけてはそれをロクロナデで消している。体部中程にロクロナデをほどこすときに特に強い力が加わったものと思われ、その部分がくぼんでいる。口唇部はややとがる。底部はヘラ切りによってつくられ、その後異なる方向のナデがほどこされている。底部の器厚は一〇㍉と厚く、そのたちあがりはずんぐりしている。これらの特徴から在地の羽黒窯跡出土九世紀なかごろの遺物群に近似している（註一六）。

49は須恵器の有台杯である。口径一四㌢、器高七・五㌢、底径八・五㌢を計る。焼成は良好で、暗灰色を呈している。また、一部に自然釉が認められる。胎土はA類に属する。体部外面はロクロケズリが行われ、その後に口縁部のみロクロナデがほどこされている。体部内面はロクロナデ調整がみとめられるが、底部はランダムなナデ調整を行っている。底部はヘラ切りによって成形され、その後に高台を添付している。高台は内端接地であり、外端はリップ状の稜線を生んでいる。二次属性として「大」の字に近似する墨書が観察される（附図16―5）。

第二七号土坑（附図14：図版9）

第二七号土坑覆土から須恵器一点、土師器二点、焼けた搬入礫一点が出土している。

50は須恵器の有台杯である。底径八・四㌢を計測する。底部外面はヘラ切り技法によってつくられた後、外周のみロクロナデが認められる。高台はずんぐりとした断面計を呈し、安定的な接地が観察される。器面内外面ともにかるいロクロナデが施されている。またたちあがり角から推計するならば、深さのある器種と考えられ、九世紀中頃の可能性が指摘される（註一七）。焼成は軟質で、明灰色を呈する。胎土はC2類に分類される。

第五号溝跡（附図14：図版9・10）

第五号溝跡覆土から須恵器八点、土師器二五点、焼けた搬入礫四点、搬入礫一点が出土している。

51は須恵質土師器の無台杯である。口径一三・二㌢、器高三・六㌢、底径四・八㌢を計測する。焼成はやや良好で、黄褐色を基調としている。底部からたちあがりの一部において黒斑が認められる。底部の処理は回転糸切り技法を採用している。外面の底部と体部の境はやや明瞭な稜が観察される。内外面の器面はロクロナデ調整によって行われている。

52は土師器の椀の底部破片である。回転糸切り技法がみとめられる底径六・二㌢の底部破片である。焼成は不良で、全体的に摩滅している。色調は黄褐色を呈し、胎土は③に属する。

53は須恵器の無台杯である。口径一二・三㌢、器高三・九、底径　八・二㌢を計る。焼成は不良で、暗灰色を呈す。胎土には長石を含む砂粒を含有している。器面内外面ともロクロナデ調整がほどこされている。

54は須恵質土師器の無台杯である。口径一一・七㌢を計る。焼成は良好で黄褐色を呈する。胎土は②に分類される。器面調整は内外面ともロクロナデ調整を基本としている。

55は須恵器の壺の底部破片である。底部はヘラ切りによって成型され、高台を添付している。しかし、高台が破損しているためにその断面形状は不明である。体部は曲線的はロクロケズリによって調整されたのち、一部ロクロナデがほどこされている。焼成は良好で、灰色を呈し、胎土はC2類に分類されるものである。

第六号溝跡（附図14）

第六号溝の覆土から須恵器七点、土師器一三点、木片一点、焼けた搬入礫一点が出土している。

56は須恵器の無台杯である。口縁部は欠損しているため、底径の推計しかできず、八・六㌢を推計する。底面はヘラ切りによって成形され、体部との境が明瞭で、直線的にたちあがる。器面内外面はロクロナデ調整が施されている。焼成は良好で、灰色を呈し、胎土はC類に分類される。

第七号溝跡（附図4）

第七号溝跡覆土から須恵器三点、土師器一六点、焼けた搬入礫三点、搬入礫一点が出土している。

57は須恵器の壺の底部であろう。底部は八㌢を計り、特微的な厚みのある高台を添付している。その形態は外にふんばる内端接地である。また、底部内面全面が剝落している。その剝落面を仔細に観察するならば、体部との接合面で剝離したものと思われる。さらにその端部を観察するならば、少なくとも一〇面弱の打撃による剝離痕がみとめられる。その打撃は外から内側へ抜ける力によってたたかれており、その衝撃によって体部との接合面がその打撃によって剝離したものと考えられる。すなわちこれら打撃面はアクシデントによって生じたものではなく、人為的作用によって生じたものと考えられる。焼成は良好で、灰色を呈する。胎土はB類に属する。

第二四号溝跡（附図14：図版10）

第二四号溝跡覆土から須恵器一点、土師器一点が出土している。

58は須恵器の蓋である。口径一四・六㌢を計測する。外面天井部から体部にかけて著しい凹凸面を有するロクロケズリが施され、天井部のヘラ切り痕は残っていない。体部のほぼ中央部に調整変換点がある。すなわち、体部下半部から縁部にかけてはロクロナデがみとめられる。つまみは径三・六㌢、高さ七㌢を計測する凹型つまみである。焼成は良好で、灰色を呈す。胎土はB類に属す。

第二六号溝跡（附図14）

第二六号溝跡覆土からは、須恵器二点のみが出土している。

59は須恵器の蓋である。蓋のつまみは宝珠つまみが退化したもので、その径二・九㌢、高さ八㍉を計る。器面外面天井部から体部にかけては鋭いロクロケズリによって整形され、天井部においてはまったくヘラ切り痕を残さない。内面はかるいロクロナデがほどこされている。焼成は良好で、灰色を呈する。胎土はC類に属する。

第二九号溝跡（附図14）

第二九号溝跡覆土から土師器四点、焼けた搬入礫一点が出土している。

60は土師器の鉢である。焼成は良好で、淡褐色を呈する。胎土は③に分類される。口径三六・四㌢を推計する。口縁部は強く「くの字」に外反し、端部は内傾する。その外面は横位の凹部が指撫でによって形成されている。外面の調整を観察

するならば、口縁部から体部最大径部位までロクロナデによって調整されている。また、体部最大径部位下半は、ヘラ工具による縦・斜位の調整がほどこされ、その工具の運動は基本的に下から上へ動かしている。内面の調整は外面と同じく、体部最大径付近でその調整技法が異なる。すなわち、最大部位上半部はロクロナデ調整がなされている一方で、下半部では一〇条一単位（幅一二・二ミリメートル前後）のハケ目工具による異方向交叉調整が行われている。二次属性としては、器面内側の頸部下位において幅約六センチメートルの煤状炭化物が帯状に観察される。

第三〇号溝跡（附図15：図版10）

第三〇号溝跡覆土から須恵器七点、土師器一一点、覆土最上層部から砥石一点が出土している（この砥石は形態・素材から極めて新しいものである可能性がつよい）。

61は土師器の鍋に添付された把手の破片である。この資料の剝落部を観察するならば、鍋体部にソケット状に接合していたことが知られる。すなわち、本資料がソケットの凸部にあたる。したがって把手付き鍋の製作工程として、把手は部品として別に作られていた可能性が考えられる。把手部を観察するならば、粘土痕を手でしぼりながら形を整え、その後にソケット接合部付近のみ器面と接続する形でヘラケズリ調整を行っている。焼成はやや良好で、赤褐色を呈する。胎土には細粒の砂を混入させている。

62は須恵器の高台を有する甕である。底面はヘラ切りによる。高台が剝離しているためその横断形は不明である。体部下半部には縦位の平行タタキ目が観察され、さらにその上をナデた痕跡が認められる。さらに体部中位においては、カキ目が観察される。この平行タタキ目とカキ目の調整の前後関係は不明瞭である。内面を観察するならば、浅い幅広の凹凸面がロクロナデによってつくられているが、詳細に観察すると部分的に平行タタキ目のあて具痕跡が凹線として確認される。焼成は良好で、色調は暗灰色を基調としている。胎土はA類に分類されるものである。

F8区第一号ピット（附図15：図版10）

本ピットからは須恵器一点、土師器四点が出土している。

63は須恵器の有台杯である。口径一二・二センチメートル、器高五・三センチメートル、底径七・二センチメートルを計測する。深身でやや小型のタイプに属

する。体部はたちあがりから直線的にのび、端部はやや尖る。体部下半部のみロクロケズリの痕跡がのこり、体部中程から内面にかけては幾度かずつロクロナデを施している。底部はヘラ切り技法によってつくられ、高台が添されている。この高台は内端接地のタイプに分類されるものである。焼成は良好で、灰色を基調とする。胎土は細かな砂粒を含みA類に属するものである。

64は土師器の鍋に添付された把手である。資料六一の把手と比べ、本資料は凸状のソケット部を有していておらず、また、全体的にヘラ調整による稜線がわずかながら観察される。また、大きさとしても小型である。以上のような違いがみとめられる。焼成は良好で、褐色を呈する。胎土は粗い砂を少量混入しているものである。

E7区第八号ピット（附図15：図版10）

本ピット覆土からは土師器六点が出土している。

65は須恵器の技法でつくられた土師器の無台杯である。口径一三㌢、器高四・二㌢、底径九・七㌢を計測する。底部と体部の境は丸みをおび不明瞭となっている。体部はほぼ垂直にのび、口縁部がやや外反する。底面はヘラ切りによる。体部にはロクロケズリ調整が顕著に残り、口縁部はつよくロクロナデが施されている。内面は全面にかるいロクロナデがみとめられる。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈し、胎土には灰色・黒色の風化礫の細粒を含有している。

D6区第九号ピット（附図15：図版10）

本遺構から出土した資料は66の一点のみである。

66は須恵器の長頸壺の底部資料と思われる。器壁が八㍉～一一㍉と厚くどっしりとしたつくりである。底部はヘラ切りののちロクロケズリがほどこされている。底部は特異な横断面形を呈する高台が添付され、この高台の貼り付け面調整は、体部との外面接合部をより丁寧に調整していることがうかがわれる。この特異なな高台は、内端接地タイプに分類されるものであるが、むしろ内側が垂直に下り接地部となっている。体部外面はロクロケズリ・ロクロナデが行われ、砂粒の移動からこれらの調整が右から左へ行われていることがわかる。内面はざらつきがあり、粗いロクロナデ調整が施され、底面はすり鉢状を呈し平坦面を有しない。焼成はやや不良で、灰色を呈し、胎土はBに分類される。また高台底面に自然釉がみとめ

られる。

F8－14区－5（附図15：図版11）

67はF8区の第七号溝跡付近から出土している。須恵器の蓋である。焼成はやや不良で、摩滅がはげしい。淡黄灰色を呈する。外面天井部から体部にかけてロクロケズリののちにロクロナデがほどこされ、天井部ではヘラ切りの痕跡を残す。天井部内面は七条一帯（幅五㍉）のナデ調整が顕著にみとめられる。添付されたつまみは径三〇㍉、高さ一一㍉の宝珠つまみである。宝珠つまみの凸部は低い。

C6－6区－1（附図15：図版11）

68はC6区の第五号土坑付近から出土している。土師器の無台杯である。口径一三・二㌢、器高五・五㌢、底径七・二㌢を計測する。焼成は良好で黄褐色を基調とする。胎土には微量の砂粒を含む。全体に摩滅が激しく調整の観察はむずかしいが、底部はヘラ切りにであろう。体部内外面ともロクロナデ調整によって整形されているものと思われる。さらに底部と体部との境は比較的明瞭な稜線が観察される。

69は当該調査区から表採された須恵器の有台杯である。体部・底部・高台とも非常にしっかりしたつくりである。底径は八・四㌢を計測する。ほかの有台杯と大きく異なり、体部がたちあがりから外側へ大きく開く。底部内面は平坦で、異方向のナデによって滑らかに調整されている。また、高台の内側にはロクロナデがみとめられる。焼成は良好で灰色を呈している。胎土は非常に精緻である（註一八）。

70は当該調査区から表採された須恵器の蓋である。特徴的なつまみが添付され、その径は三七㍉、高さ七㍉を計測する。典型的宝珠つまみの変形で、宝珠凸部付近がしずみ、外縁部が鋭角に稜線化している。外面天井部は中心に向かってくぼみ、非常にシャープなロクロケズリがほどこされている。ヘラ切りの痕跡をまったく残さない。体部にも鋭利なロクロケズリがみとめられ、縁部にのみロクロナデがほどこされている。内面は全面にロクロナデがみとめられる。また、二次的属性として内面全体に墨が付着し研磨面も観察されていることから、転用硯として再利用されたものであろう。焼成は良好で、暗灰色を呈している。また、胎土はA類に属するものである。

71はB4区から出土した須恵質土師器の無台杯である。全体的に摩滅がはげしい。口径一二・八㌢、器高三・六㌢、底径八・四㌢を計測する。焼成は緻密で灰褐色を呈している。胎土は③に属する。底面はヘラ切りによって成形され、底部と体部の境は不明瞭な形でたちあがり、口縁部端部はやや尖る。体部にはロクロナデのほかに異方向のナデもみとめられる。また、底面の接合面に沿って破損している部位に漆と思われるエビ茶色の付着物が観察される。

72はC8区から出土した須恵器の無台杯である。口縁部は欠損している。底径八・六㌢を計測する。底面はヘラ切りによる成形がなされている。器面内外面ともにロクロナデ調製が行われている。焼成は良好で、灰色を呈し、胎土はC2類に分類される。二次属性として底部に漢字の「十」に近似する墨書がみとめられる(附図16－3)。

73はB8区から出土した須恵器の有台杯である。底径六・四㌢とかなり小さい。底部資料であるため、器高・口径に関しては不明である。底部はヘラ切りによって成型され、非常に特異な高台を添付している。この高台は他資料と大きく異なり、厚さ二㍉と非常に薄く、不安定な感じを受ける。また、この高台の内側にロクロナデがみとめられる。器面内外面はロクロナデによって調製しているが、外面は摩滅がはげしく不鮮明である。焼成は良好で、淡灰色を呈する。これらの諸特徴は群馬県地方にみとめられる要素に近似するという(註一九)。

74はaトレンチから出土した須恵器の有台杯である。体部下半部から底部のみが残存している。底径は六・一㌢を計測し、ヘラ切りによってつくられている。添付された高台は接地部へむかって細くなり、外へふんばらずに外端接地する。器面内外面とも非常にていねいなロクロナデ調製によって整形されており、外面においてはほとんどロクロケズリの痕跡を残さない。焼成は良く、やや暗い灰色を呈する。胎土はC類に分類される。

C7－14区－1(附図15：図版11)

75はC7区から出土した土師器の無台杯である。口縁部は欠失しており、口径および器高は計測できない。回転糸切りによる成形を受けた上げ底状の底部は径六㌢を計測する。底部と体部との境は明瞭な稜線で区画される。器面内外面ともにロクロナデ調製を施している。焼成は良好で、淡黄褐色を呈している。胎土は③に分類される。

硯（附図15：図版11）

E7区から出土した円面硯である。圏足部の大部分および硯部の陸の部分が失われている。よって底径および高さは不明である。口径は一七・二㌢、重さは七〇㌘である。圏足部は県内の他の類例に比べやや垂直にたちあがっていたと思われ、そのまま外側はわずかに外反し、内側は強く内傾して硯部の陸に続いていたものであろう。外面には外反のはじまる部位に横位の細い沈線が一条引かれており、その上部に刺突痕がみとめられる。この方形の刺突痕は、櫛状工具を器軸に対しては垂直に、器面に対してはやや斜めにして、連続的に押しあてたことによって生じたものである。圏足部にはヘラケズリがほどこされており、それが一部沈線より上にまではみ出しているのが認められる。これらの工程は沈線→刺突→ヘラケズリの順に行われていることが、器面に現れた粘土の動きから明瞭である。また圏足部には六個前後の透かし孔が穿たれていたと思われるが、孔の大きさが不明であるため正確な数は分からない。鋭利なヘラのような工具で外側から内側へむかって穿たれたものであるが、孔の隅には穿ちきれずに残余した部分がある。海の底面は極めて平坦に仕上げられており、海と陸の境界にはやや外反する突帯がめぐらされている。焼成は良好で、精緻な胎土を示し、色調は灰色を呈する。なお、実測図は孔の幅を二㌢とし、高さを七㌢として作図した。

墨書土器（附図16：図版12）

今回の調査では、篦書土器一点、墨書土器一九点が出土している（ここではわずかな墨の付着は含めなかった）。二〇点のうち、判読できたのが八点、不確定および不明のものが一二点である。墨書の施された器種は、有台杯・無台杯・椀・甕・長頸壺など多様であったが、杯蓋あるいはそのつまみに描かれたものはなかった（墨の付着したものはあったが、上記の理由で扱わなかった）。また墨書が施される部位は一例を除き、底部の外側に集中する。

以下、個別に説明を加えるが、その際、底部外側における上方・下方などの位置の表記は、文字が判読できたものに限り文字を正しい向きで見た場合の上・下を示している。

1は「〇」という記号であろうか。残存している部分は明瞭であるが、二分の一以上が欠損で判らなくなっており、正確なところは不明である。

2は箆書の施された資料で、「十」もしくは「×」と見える。底部外側に大きく、中央からかなりずれた位置に描かれている。二画目が手前に引かれたものだとすれば、一画目はかなり右上がりに傾く。

3は墨書であるが、これも「十」であろうか。底部外側において隅の方へかなり寄ったところに描かれている。摩滅によって薄墨になっており、筆順までは判然としないが、長い方を一画目と見た場合、二画目の最後が「抜き」でなく「止め」になっているのが気になる。この点にのみ注意すれば、13の例と共通するところがある。

4の「新」は無台杯の二分の一個体の底部外面のかなり右上方に寄った位置に記されている。かなり大きく描かれ、字体は比較的整っているが、五画目の反りが強く、右の「おのづくり」の方へはみ出してしまっている。全体的に強い筆勢を感じさせるが、このような勢いのある字体は本例のみで、大きさといい、類似するものはない。

5の「大」は、有台杯の底部外側の中央左寄りの位置に描かれている。字体は整っており、特に一画目の「入り」と二画目の「払い」が力強い。「入り」「払い」をこれ程強調する墨書はほかになく、また、「大」とおぼしき例は三点あるが、本例が一番はっきりしている。

6は須恵器無台杯の底部外側かなり隅に寄った位置に描かれている。欠損により判然としないが、残存した部分のみで判断すれば、平行する線が三本引かれており、これを横に見た場合「三」と読めないこともない。しかしながら、最も長い線が外側へ払われていることなど細部の筆遣いに注目すれば、むしろこれは縦に見るべきかも知れない。

7の「生」は壺の底部外側の上方やや左に描かれている。「入り」の部分を強調しないのが特徴であるが、一・二画が連続して引かれ、三画目が太く力強く、四画は弱いタッチで引かれ、五画はのびやかである。このような微妙な筆遣いの使い分けをしている例は、本遺跡出土のものではほかに見当たらない。

8は有台杯の底部外側のほぼ中央に、比較的太く「○」と記されている。資料中もっとも明瞭な「○」である。

9はかなり厚手の須恵器、杯類の底部ほぼ中央に描かれている。「大」あるいは「木」の一部であるように見受けられるが、欠損のためはっきりしない。

10の「衣」は須恵器の杯底部の小破片に記されたものである。他の墨書が三〜五㍉の太さで描かれているのに比べ、本例

のみが二㎜と細く描かれている。字体は整っており、特に四画目の筆勢が目立つ。中央からやや右にずれたところに記されている。

11は一見「大」と読めそうであるが、欠損のためと筆遣いに不明なところがあるため、判然としない。「大」と見ようとした場合、特に二画の「左払い」が連続しておらず、少し無理があろう。

12は土師器の無台杯底部のほぼ中央に記されている。摩滅のため非常に薄くなっているが、「大」と読める。二画目の払いの下にも墨の付着があるが、これがアクシデントによるものなのか意図的に描かれたものなのかは不明である。ほかの墨書に比べやや稚拙な感じを受ける。

13は「十」と読めるかも知れないが、だとすると二画目の「入り」が強すぎ、かつ「抜き」ではなく「止め」ている点も腑に落ちない。3例を含め、あるいは「×」などの記号であろうか。

14は須恵器の無台杯の底部外側の隅に描かれている。小破片のため確実なことは言えないが、おそらくは「二」であろう。「入り」「止め」とも明瞭でなくやや稚拙な感じを受ける。

15は土師器の杯の底部外側の隅に描かれている。小破片の全面に描かれているため、欠損部分にも書かれていた可能性もあろうが、判らなくなってしまっている。残存部分のみで判断すれば、平行して四本の線が引かれており、あるいは「四」を意味しているのかも知れない。それぞれの線の太さにむらが認められるのが特徴である。

16の「田」は須恵器の杯底部外側やや下方に描かれている。一画目が引ききっていないが、これは摩滅のために消失してしまった可能性もあると思われる。前例とは反対に筆圧が比較的一定しており、強調する部分が目立たないことが特徴である。

17も小破片である。一部欠損部になるが、「子」と読める。底部外側の上方隅に描かれている。

18は欠損部が大きく、どのような文字の一部であるのか、あるいは記号であるのか不明である。

19は「○」を描いているように見えるが、正確に閉じていないのが特徴である。

20は唯一底部外側以外に描かれた例で、須恵器の長頸壺の頸部外側に記されている。何を意図したものなのか判断しがたい。

以上のように、岩田遺跡から出土した墨書土器群は、確定的な文字はすべて単文字で、「新」「大」「生」「衣」「二」「田」

「子」の七字である。これらのみを対象とした場合、同じ文字を記したものは5と12の「大」以外はなく、非常にばらつきがみられるという特徴がある。記号的なものでは「十」のような記号が三点(篦書を含む)、「○」が三点である。また、異なる文字間に、類似した字体の有無を検討してみたが、これも抽出することができなかった。わずかに、12の「大」・17の「子」・14の「二」に、「入り」や「払い」を強調しないという点と線の太さにおいて比較的近似することが指摘できるのみである。しかし、特に12の「大」は摩滅のため薄墨になっており、筆遣いまでは検討の対象にできないかもしれない。

判読できた文字・記号の類例を主に県内で求めた。詳しくは第二表をご覧いただきたい。まず「新」は県内には明瞭な類例がないが、似たものに佐渡郡金井町泉畑田遺跡のものがある。石川県小松市浄水寺跡・金沢市黒田町遺跡などに認められる。容器の管理記号としてに用いられたのであるか、際儀献供に関する文字なのかは、今のところ判断しがたい。一方、「大」は全国的に類例が多く、大きさを表すものという説、吉祥句的な記号とする二説がある。県内では豊浦町會根・聖篭町山三賀・中条町中倉遺跡などが知られる。「生」は吉祥関係であろうか。県内では會根遺跡の例が知られている。「衣」は今回収集した資料には見られなかった。「二」は笹神村発久・新潟市小丸山遺跡などに認められる。「田」は農耕・祭祀関係と考えられ、類例が多い。隣接する長岡市下屋遺跡から五点報告されているほか、県内では寺泊町横滝山廃寺・上越市今池遺跡などからの検出例がある。「子」は石川県辰口町徳久・荒屋遺跡に一点ある。人をあらわすものかあるいは十二支を意味したものであろうか。

墨書された種別・器種別であるが、これは一般的に須恵器の杯類に施されることが多いとされている。この傾向は岩田遺跡でも確認された。まず種別では、須恵器一四点、須恵質土師器一点、土師器四点となり、やはり須恵器の占める割合が七〇%と多い。機種別では無台杯一一点、有台杯二点、椀一点、壺二点、器種不明の小片が四点であり、杯類が六五%を占めた。

第一表　岩田遺跡出土墨書観察表

番号	出土地点	種別	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底部径	胎土	焼成	色調	遺存	文字・記号 墨書位置
1 (7)	第四七柵立穴柱	土師	無台杯	2・3		10		やや良	淡黄褐色	四分の一	底部○か外側
2 (37)	第二二土坑	土師	椀			5・3	②	良好	淡褐色	底部のみ	篦書十か外側
3 (72)	C8地区	須恵	無台杯	2・3		8・6	C2		淡黄灰色	四分の一	底部新か外側
4 (27)	第十土坑	須恵質土師	無台杯	3・7	13・2	8・0	②	良好	淡黄灰色	二分の一	底部大か外側
5 (49)	第二五土坑	須恵	有台杯	7・54	14・0	8・5	A	硬	灰色	四分の一	底部二か外側
6 (10)	第四土坑	須恵	無台杯	2・7	12・0	8・4	C	硬	灰色	四分の一	底部生か外側
7 (21)	第六土坑	須恵	甕			7・6	B	やや硬	灰色	底部のみ	底部○か外側
8 (15)	第四土坑	須恵	有台杯	4・5	11・5	7・1		硬	灰色	五分の四	底部大か外側
9	第四八柵立穴柱	須恵	杯??				C	硬	灰色	底部破片	底部衣か外側
10	第四土坑	須恵	杯??				C	硬	灰色	底部破片	底部大か外側
11	第二五土坑	土師	無台杯			9・8	③	良好	茶褐色	底部破片	底部大か外側
12	第二五土坑	土師	無台杯		8・3	②	やや良好	淡黄灰色	底部破片	底部大か外側
13	第D七ピット6地区	土師	無台杯			9・9	③	良好	淡灰色	底部破片	底部十か外側
14	B5地区	須恵	無台杯				C	硬	灰色	底部破片	底部二か外側
15	B6地区	須恵	無台杯				?	硬	淡黄灰色	底部破片	底部四か外側
16	B8地区	須恵	杯??				C	硬	淡灰色	底部破片	底部田か外側
17	C7地区	須恵	無台杯				C	硬	淡灰色	底部破片	底部子か外側
18	C7地区	須恵	無台杯				C	硬	灰色	底部破片	底部不明か外側
19	C8地区	須恵	杯??				C	硬	灰色	底部破片	底部○か外側
20	F8地区	須恵	長頸壺				C	硬	灰色	頸部破片	底部不明か外側

木製品

今回の調査では盆・柱痕・木片などが出土している。木片はほとんどが不整形な小破片・細い木の枝状のものであり、すべての資料に明瞭な加工痕が残されていなかったため、ここでは扱わなかった。

盆（附図17：図版11）a） 第一〇号土坑2層中より出土した。最大長三五・八㌢・最大幅一六・五㌢、最大高一一・五㌢である。ほぼ中央で縦に割れており、半分は失われている。したがって、脚部も四脚あったと思われるが、片側の二脚のみ残存している。脚部は取り付けられたものではなく、加工の際に盛り付け部とともに作出されたものである。その形状は、一つは平面・側面ともほぼ方形であるが、もう一方は不整形である。前者の長さは六㌢、幅六・五㌢、高さは七㌢である。盛り付け部は現存している部分が半円形を呈していることから、本来はほぼ円形であったと思われる。ただし、一部突出した部分がある。厚さは二・五㌢である。表面は中央に向かって若干くぼんでおり、比較的滑らかに整形されている。一部その加工痕が認められる。裏面は整形が不十分で凹凸が激しい。

柱痕部分に相当する丸材（附図17：図版11） 全部で八本出土したが、そのうち加工痕らしきものが認められるaトレンチ第五号ピットから出土したもののみを図示した。現存する長さは六一㌢、幅二五㌢、最大厚は二一㌢である。片側の根元に向けて斜めに割れており、その際に生じたと思われる縦長の剝落痕のようなものが認められる。反対側の面および側面にはやはり縦長の剝落痕のようなものが認められるが、こちらは柱の太さを整えるためや微妙な整形のための人為的な加工痕と解釈したい。

銭貨（附図15：図版11） 今回の調査で渡来銭が1点出土している。D8区から出土した天禧通宝（北宋天禧年間 1017～1022年）である。直径は二・四㌢である。摩滅がいちじるしく、各文字は非常に不鮮明である。

註七　須恵器・土師器の胎土分類は『新新バイパス関係発掘調査報告書　山三賀Ⅱ遺跡』の分類に基本的にはしたがった。このうちC2類とは、C群のなかで胎土が更に精良で長石・石英など（海綿骨針も含まれる）白色粒子を多く含むものをC2類として分離した。

註八　坂井秀弥氏のご教示によれば、種種の要素から佐渡小泊産の製品である可能性があるという。

註九　坂井秀弥氏のご教示による。

註一〇　註九と同様。　註一一　註九と同様。　註一二　註九と同様。　註一三　註九と同様。　註一四　註九と同様。　註一五　註九と同様。　註一六　註九と同様。　註一七　註九と同様。

註一八　坂井秀弥氏のご教示によれば、これらの諸特徴をもつ資料は北陸にはなく、東海地方にみとめられるものに近似しているという。

註一九　註三と同様。

第四章　まとめ

一、墨書土器について

ここでは、岩田遺跡から出土した墨書土器について、主に①土器底部の外側の中でいかなる位置に墨書が施されるか、②墨書土器が遺跡内でどういう遺構・地点から出土する傾向にあるかについて述べることにする。

①出土した資料のなかで、墨書が杯底部の外側に集中することは第三章の墨書の箇所で最初に述べたとおりである(ここでは長頸壺の頸部資料と、篦書資料は製作段階で施され、墨書とは全く性格を異にするためこれを除外し、一八点のみを対象とする)。この墨書の施される位置をより細かく観察すると、多くの資料において墨書が底部の中心から外れたところに記されるという特徴が指摘できる。このうち文字が確定的に判読できたものについては、底部外側の中心からややずれるものとむしろ隅に近いものとの違いはあるものの、八点の資料のすべての文字が中心から外れたところに記されている。「二」・「子」の二点は隅に近い部分に施され、ほかの六点は中心からややずれた位置に書かれている。ずれる方向は多様であり、上下左右すべてが認められた。上方が四点、上左方に寄るものが一点、下方が一点、左方が一点、右方が一点である。この八点のうち、上下だけを問題にすると上方にずれて記される例が六二%を占め、他方、下方にずれるのは一二・五%であり、この集計からは、やや上方にずれた位置に書かれる傾向が大きいことが判る。なお、記号的なものも含めると「〇」の中で一点中央に記されたものがあった。

この文字を中心からずれた位置に書くという行為は、まず底部外側の中心にはヘラ切り痕が認められるために凹凸が激しく、この部分を避けるという意味がもともとあったのではないかという仮説がたてられよう。今回出土した一八点の底部資料のうち、一八点がヘラ切りで製作されたものである。したがって、墨書の資料はすべてヘラ切技法で製作された土器に記されたものである。「新」のような上半分に大きく書かれたものや「生」のごとく中心からややずれた位置に書かれるものには、このヘラ切りの痕跡部分を避けるという意図が働いていたのかも知れない。しかしながら、この「新」も文字の一部がヘラ切りの凹凸の激しい部分にかかっていることと、今池遺跡の「中」の例などが、ヘラ切りの中央部(あまり凹凸が激しくないようであるが)に記されたものが二点あり、上述の意図が確定的であるとは思えない。あるいは、ほかになんらかの意図な

り要因なりが存在するのか、まったくの偶然によるものなのか、さらには単なる集団（あるいは個人）のクセでしかないのか、さらにほかのもの（紙・木）に書くときのクセが影響を与えていたのか等の解明は、多くの資料での検討が必要かと思われる。

②次に、墨書土器の出土地点であるが、ここでは一九点すべての墨書土器を対象にする。調査区別にみると、A区からは九点、B区からは七点、両区をつなぐaトレンチから三点と、ほぼまんべんなく出土している。強いて分布の偏りを探すならば、やや西方に偏る傾向があり、グリットで言えば、B・C区に一七点（八九％）が集中した。出土遺構別で見るならば、掘立柱建物址の柱穴からの出土が二点、土坑七点、ピット出土が一点、包含層からのものが九点と、土坑からの出土が目立つ（三六％）。掘立柱建物址からの出土は二点とも第四号掘立柱建物址の柱穴からであり、第八号柱穴は建物の南西隅の柱穴であり、第七号柱穴はそのすぐ東隣に位置している。また、土坑のなかでは第四号掘立柱建物址の北側にある第四号土坑からの出土が三点と多い。この二つの遺構の位置するB4、B5、B6区は墨書土器が集中的に出土した地区であり、この三グリットだけで七点が出土している。新潟県内の岩田遺跡と同文字の墨書を出土した遺跡は表のとおりである（「十」、「○」も含めた）。このうち出土地点が報告されているのは豊浦町會根遺跡の「十」「大」「生」と聖篭町山三賀遺跡の「大」である。これらはすべて包含層出土のものであり、遺構に伴うものではない。しかしながら、出土地点のみに注目すると、土坑からの出土が多い遺跡としては管見に触れたもののなかでは、上越市下新町遺跡があげられる。同遺跡では一二点中五点が土坑から出土している（四二％）。ただし墨書が出土している同遺跡のSK31は、報告書中のA期すなわち八世紀後半であり、本遺跡とは時期的に隔たりがある。さらに掘立柱建物の柱穴からの出土例は上越市今池遺跡SB29－7から出土している。7ピットはこの東西建物の北側梁行の東端から二本目の柱穴である。

第二表　県内における岩田遺跡出土同文字・記号墨書類例表

文字・記号	遺跡名	出土地点
○	発久（笹神村）	
○○	若宮（真野町）	
十	會根（豊浦町）	61N5
	発久（笹神村）	
	片桐塚群（見附市）	
	金屋（六日町）	
	若宮（真野町）	
	本屋敷（金井町）	
	高田（神林村）	

文字・記号	遺跡名	出土地点
大	下新町（上越市）	
	浜田（真野町）	
	會根（豊浦町）	61N5
	山三賀（聖篭町）	A9区
	薬師地（三条市）	
	本屋敷（金井町）	
	中倉（中条町）	
生	會根（豊浦町）	60N10
二	発久（笹神村）	

文字・記号	遺跡名	出土地点
田	小丸山（新潟市）	
	泉畑田（金井町）	
	新五衛山（豊栄市）	
	下屋敷（長岡市）	
	横滝山廃寺跡（寺泊町）	
	今池（上越市）	
	発久（笹神村）	
	本屋敷（金井町）	

二、当該調査区の遺構分布について

当該調査区のA・B区から検出された遺構群は、その長軸や主軸の方向に規制があるようである。特にA地区の第1号掘立建物址の桁行および梁行の方向を基準に全体を観察すると、いくつかの基準方向がある。

一、a－a'：b－b'の東西軸とc－c'の南北軸の基準軸に沿って配置している遺構は、第一号～第四号掘立建物址：畝状小溝群：第三号柱穴列である。更に、この中に少なくとも第二号と第三号建物址重複関係があったことから二時期（前期・後期）に細分できる。

二、d－d'：e－e'：f－f'の軸に沿う遺構は第四号土坑：第六号溝跡：第一号柱穴列：第二号柱穴列：第七号土坑の配列関係が認められる。この配列軸は現在の水田軸に一致することが指摘できよう。

三、g－g'の軸に沿っている第七号溝跡である。

以上のように、少なくとも三グループの配列軸が確認できる。この異なる配列軸は構築時期の異なりから生じたものだと考えたい。したがって、これら遺構群は三時期に大別できるものだと考えたい。その時間的位置関係とその帰属年代については、検討資料の不足からその判断に大きな限界があることは否めない。よって、雑駁的な大枠にはめこむ作業を行なうことにしたい。その基準は、第六号溝跡が第四号掘立建物址の第二号柱穴を切っていたことから、第四号掘立建物址が古くて、第六号溝跡が新しいことが確認できる。また、第二号柱穴列・第三号柱穴列が第七号溝跡を切っていることから、第二号柱穴列・第三号柱穴列が新しく、第七号溝跡が古いことが確認できる。

よって、第4図に示した如くに三グループ（第一期）→一グループ（第二期）→四グループ（第三期）の遺構変遷を求めることができる。各期の在り方を再検討してみたい。以下に触れて見たい。

〈第一期〉

当該期は不詳と言わざるを得ない。少なくとも真北に対して約六度東に傾いている軸を、基準の配列軸として空間設計が行なわれていた可能性がある。

〈第二期〉

第一期から大きく配列軸を変更しなくてはいけない事象が生じたことを、第二期基準軸が示唆している。この基準軸は真北に対して約四五度西に傾いている。当該期の特徴は、大きな建物群と畠が空間を異にして計画的に配列される時期である。また、四基の建物址は第二号・第三号・第四号掘立建物址は東西方向に桁行を揃え、第一号掘立建物址はこれらと直行して桁行を南北方向に揃えている。また、第四号掘立建物址の北側桁行と第二号・第三号掘立建物址南側の桁行との間の空間と第二号・第三号掘立建物址東側の梁行と第一号掘立建物址西側桁行との間の空間を「道」(第4図ドット部分)として考えてもよいものなのであろうか。さらに、第四号掘立建物址の東側の梁行の軸(c—c')のラインと畝状小溝群の西側ライン(h—h')との間隔が約七間半を測る。推測の域ではあるが、第二期には当該掘立建物群の東西軸および南北軸に沿って方五間の条坊が計画的に配置されていた可能性がある。言い換えるならば、第一号掘立建物址～第四号掘立建物址さらにaトレンチの柱址やB1—第3号ピット等の配列や存在から、方七間半の条坊に計画的に配置された掘立建物址があり、その東側に畝条小溝群「園宅地」(註二〇)が配置されていたと推考できる。

この畝状小溝群を切るように確認された第一〇号～第一三号土坑の集中は、畝状小溝群の配された条坊内に重複するように構築されている。これを偶然の重複と見るより、定められた空間内(条坊)の利用と捉えたほうが無難だと考える。同様な事例として、同じ条坊内での建て替えが行なわれている第二号・第三号掘立建物址があげられる。

以上のように、定められた空間内での計画的利用とその空間の機能分離がしっかりと行なわれていた可能性を、これらの遺構群の構造から推測することができる。そして、それらは少なくとも前期・後期に細分できる。

〈第三期〉

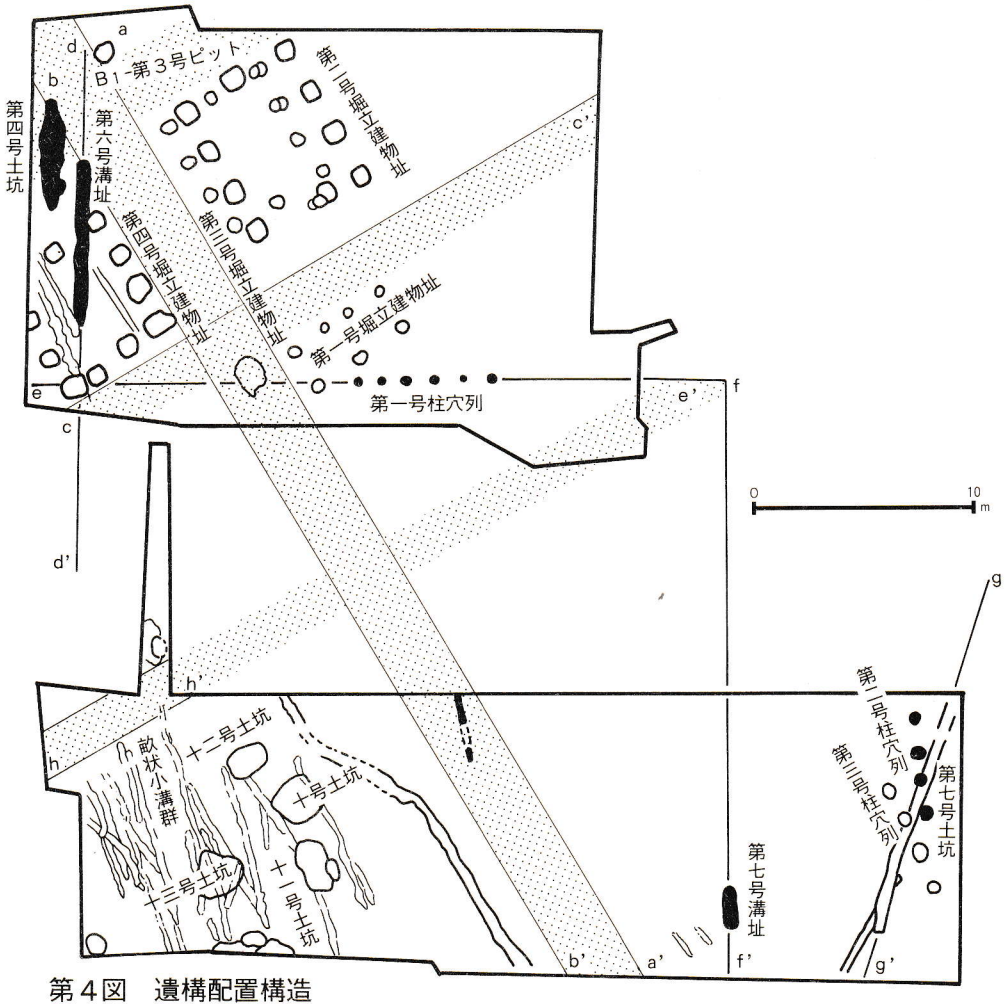
第三期の配列軸が現在の水田区画の軸にほぼ一致するという特徴がある。当該期に属するという遺構は、第四号土坑・第六号土坑・第一号柱穴列・第七号土坑である。これらの帰属時期をどう扱うかは非常に難しい。特に第四号土坑からまとまった土器群の出土がある(附図11)。この遺構覆土は第一期遺構群と同様な特徴を示していたことからも判断して、とりあえず、現段階ではその出土遺物群の特徴から九世紀中葉に帰属する遺構群と考えたい。

以上のように、当該調査区から検出された掘立建物・溝・土坑・畝状小溝などの遺構群は、構築時期・機能空間を異にして重複している可能性を検討してきた。

すなわち、当該調査区付近において九世紀前葉～九世紀中葉にかけて（可能性として八世紀末の構築もありえる）、機能を異にする大規模な遺構群が計画的に配置されていた可能性が推測できる。その時間幅の中で遺構群は少なくとも三時期に大別できると考えている。

今後、岩田遺跡の性格を考える時に信濃川以西の古志郡域に位置することとその地理的環境である、一、信濃川と渋海川の合流点に立地　二、小国層に堆積する粘土層と須恵器窯址の分布　三、寺泊層に埋蔵される石油が自然に沸いていた山屋地区を含む油田地帯などの諸点を踏まえ、当該調査区の遺構群とその変遷や円面硯・墨書土器の考古学所見を詳細に照合・検討する必要があろう。

註二〇　坂井秀弥　一九八六『北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅱ　一之口遺跡西地区』新潟県教育委員会
佐藤雅一　一九八七『梨ノ木平遺跡』塩沢町教育委員会



第４図　遺構配置構造

三、岩田遺跡発掘調査の意義

岩田遺跡は信濃川以西の古代・古志郡域に属する越路町大字沢下条字岩田の台地に所在する約一万平方メートルの遺跡である。さらに遺跡周辺には岩野原・笹山・羽黒の三大窯跡群や岩野原遺跡A地点などの律令時代の生産遺跡や集落遺跡が数多く点在している地域でもある。このような地理的・歴史的環境を背景に形成された『岩田遺跡』は、この地域においてどのような性格を有して形成された遺跡なのであろうか。

中越地方において平安時代の掘立建物址（計画的に配列）・溝・畝状小溝や円面硯・墨書土器・盆状木製品などが面的調査によって明らかになった例として、本遺跡は初例と言える。この成果を踏まえて、本遺跡の形成変遷とその社会的背景を位置付けることによって、おのずと「岩田遺跡の意義」が明確になるものと考えている。

第一は、岩田遺跡を取り囲む地形（河川：峠）・地質（粘土：石油）的な環境と歴史的環境。

第二に、周辺に点在する律令時代の遺跡のなかで特に窯跡群の存在が重要な意味を持っていると言える。すなわち、これらの生産遺跡を管理していた組織の処点とその生産管理体制の在り方・意義を明らかにすることが大事であろう。

第三として、岩田遺跡に計画的に配置された建物群とその変遷。それら出土した遺物群（墨書土器：円面硯）の性格と意味、以上に要約される諸点を踏まえて、岩田遺跡の様態を推考してみたい。

岩田遺跡における当該調査区は、少なくともその主体は平安時代前葉～中葉までに出現→消滅した遺跡である。この時間幅の中で遺構群は少なくとも三回の大きな建て替えを行なっている。この三時期を眺めてみると、第二期が当該調査区において一番安定した中心的な時期であったと言える。また、この第二期は、企画的に方七間半の条坊を配していた可能性が指摘できる。しかし、時期を異にすると、その建て替えは同じ配列軸に沿って構築されるのではなく、配列軸を異にして行なわれている。ここに大きな問題点があると言えるであろう。

とりあえず、岩田遺跡の様々な環境と要素を踏まえるならば、より公的な性格を有する役所的な施設（里長の屋敷）が存在していた可能性が十分に推測されよう。そして、遺跡周辺に平安時代前葉～中葉において盛業していた窯があるならば、その生産集団となんらかの関連があった可能性はなかったのであろうか。この点については、今後の詳細な生産遺跡遺物群と消

費地遺跡(特に岩田遺跡)遺物群との対比が重要と考える。この視点に対しては、現状では各遺物群の胎土の重鉱物組成分析(註二一)を試みた。まだ、分析試料が数量的に少ないことから機会あるごとに試料増加をしていく必要があろう。そして、その科学的分析結果に、考古学的な器形・調整・組成などの所見をクロスチェックすることで漸く判断できるもので、現状で即断するものではないと考える。また、土器胎土・調整・器形などの特徴から佐渡：小泊産と推定される須恵器の坏類があるという(註二二)。これらは視覚的考古学所見であり、「考古学の正道としての見解」である。ただし、その見解をより強固のものにするためにも科学分析の実施と照合が必要だと考えている。

九世紀前葉前後から活動が始まる岩田遺跡当該調査区は、九世紀中葉に認められる経済的・社会的画期に一致するかのように消滅していく。また、その画期を生んだ矛盾と歪を背景に、本遺跡が形成されたのではないだろうか。律令経済は国家的土地所有に基礎を置いていた。それは班田制である戸籍の整備と口分田の班給、そして租税である物納税(調・庸)と徭役労働(雑徭)によって支えられるものであった。しかし、租税の実態や強化は公民の分解・没落や逃亡などによって、租税体制を根底から揺るがし、中央財政の窮乏化が進んだという。また、公民からの収奪物の分配比重が、国家から地方豪族や国司層に傾いた。このような状況から八世紀後葉から政治的・経済的動揺が顕在化し、律令国家財政の基盤をおびやかすことになったという。その対策として、交易制や私富の導入を図った。しかし、租税収種の基盤となる班田制そのものが、九世紀から衰退過程に入り、十世紀初頭をもって終りを告げてしまった(註二三)。さらに、九世紀中葉頃に税制(戸籍体制から負名体制への変化)・行政・文書形式に変化が生じたとも言われている。

このような国家支配の動揺の中で、越後国古志郡の本地域には岩田遺跡が形成されてきた。特に第一期から第二期への変化は、中央・地方間の関係の変動期の中で街道の変化・国司支配の緩みなどや在地における何らかの異変によって生じた可能性が考えられるが、現時点で確定するに至っていない。そして、第三期において遺跡は終焉する訳であるが、政治的・経済的変動に連動した現象として、その終焉を迎えると捉えられないであろうか。岩田遺跡の意義は、以上のように今後本遺跡を基軸として、古志郡域の遺跡：遺構構造と遺物流通を射程において検討することによって、後期律令時代の動態を「地域」として把握できる方向性を示した意味において極めて重要と言える。

註二一　〈付編〉を参照していただきたい。

註二二　本遺跡から出土した須恵器の器種組成を検討するときに、坂井秀弥氏らによる九世紀後半の佐渡小泊産の須恵器の本土への流通という解釈を射程に入れたところ、胎土分類における視覚的考古学的所見と科学的な分析結果のクロスチェックの必要性を感じた。よって、われわれはまず須恵器の断面を観察して、A・B・Cと三大別した(註七)。Cに関しては作業の過程のなかでC1・C2に細分することが可能となった。これらの資料から数点ずつ抽出し、胎土分析にかけたのであるが、今両者を照合したところ、多くの不整合・不一致を見た。この要因として、第一にわれわれ観察者の観察能力の不足、第二に視覚的考古学的分類の限界性が、あげられよう。また、遺跡間の同定に関しては、資料数の僅少さが指摘されている。本遺跡内の胎土分類においては、要因の大半はとくに第一の要因が大きいと思われる。深く反省する次第である。しかしながら、同時に第二の視覚的考古学的分類の限界性も示唆しているのではないだろうか。したがって、今後は、考古学的所見と科学的分析の前向きな照合のなかで、新しい解釈枠を模索していく方向性が必要ではないだろうか。

註二三　栄原永遠男　一九八四「律令国家の経済構造」『講座日本歴史1』原始・古代1　東京大学出版会

参考文献

大川清・青木健二他　一九八三『中山遺跡第二次発掘調査報告書』越路町教育委員会
金子拓男　一九九一「和島村八幡林遺跡について(速報)」『郷土新潟』第二一巻一一号
柏崎市市史編さん委員会　一九九〇『柏崎市史　上巻』柏崎市教育委員会
北村亮他　一九八三『中山遺跡発掘調査報告書』越路町教育委員会
国史大系編修會　一九六五『国史大系第二十六巻　交替式　弘仁式　延喜式』吉川弘文館
駒形敏朗他　一九八二『成台遺跡調査報告書』越路町教育委員会
駒形敏朗他　一九八三『多賀屋敷遺跡発掘調査報告』越路町教育委員会
駒形敏朗・寺崎裕助　一九八一『岩野原遺跡』長岡市教育委員会
駒形敏朗・寺崎裕助　一九八二『笹山遺跡』長岡市教育委員会
近藤勘治郎　一九三八『三島郡誌』三島郡教育委員会
中川成夫　一九五八「古志郡山本村間野窯址発掘調査報告」『越佐研究　第十三集』新潟県人文研究会
中島栄一・坂井秀弥他　一九八四『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告I』今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
中静喜一郎　一九五五『岩塚村史』岩塚村教育委員会
中村孝三郎　一九六六『先史時代と長岡の遺跡』長岡市立科学博物館
中村孝三郎・小林達雄　一九六〇『朝日遺跡』越路町教育委員会
中村孝三郎　一九六一『朝日百塚　並松縄文遺跡調査報告書』越路町教育委員会
新潟県　一九八〇『新潟県史　通史編1』原始　古代1
広川一雄他　一九七三『越路のあゆみ』越路町教育委員会
源　順　一九七七『倭名類聚鈔』風間書房

附図・図版

凡例

一、本文中では遺構名を第一号掘立柱建物址や第一号土坑のように表記したが、附図中においては繁雑さを避ける必要があったため、SB1・SK1などと略記号で表記したものがある。その場合の対応関係は次のとおりである。

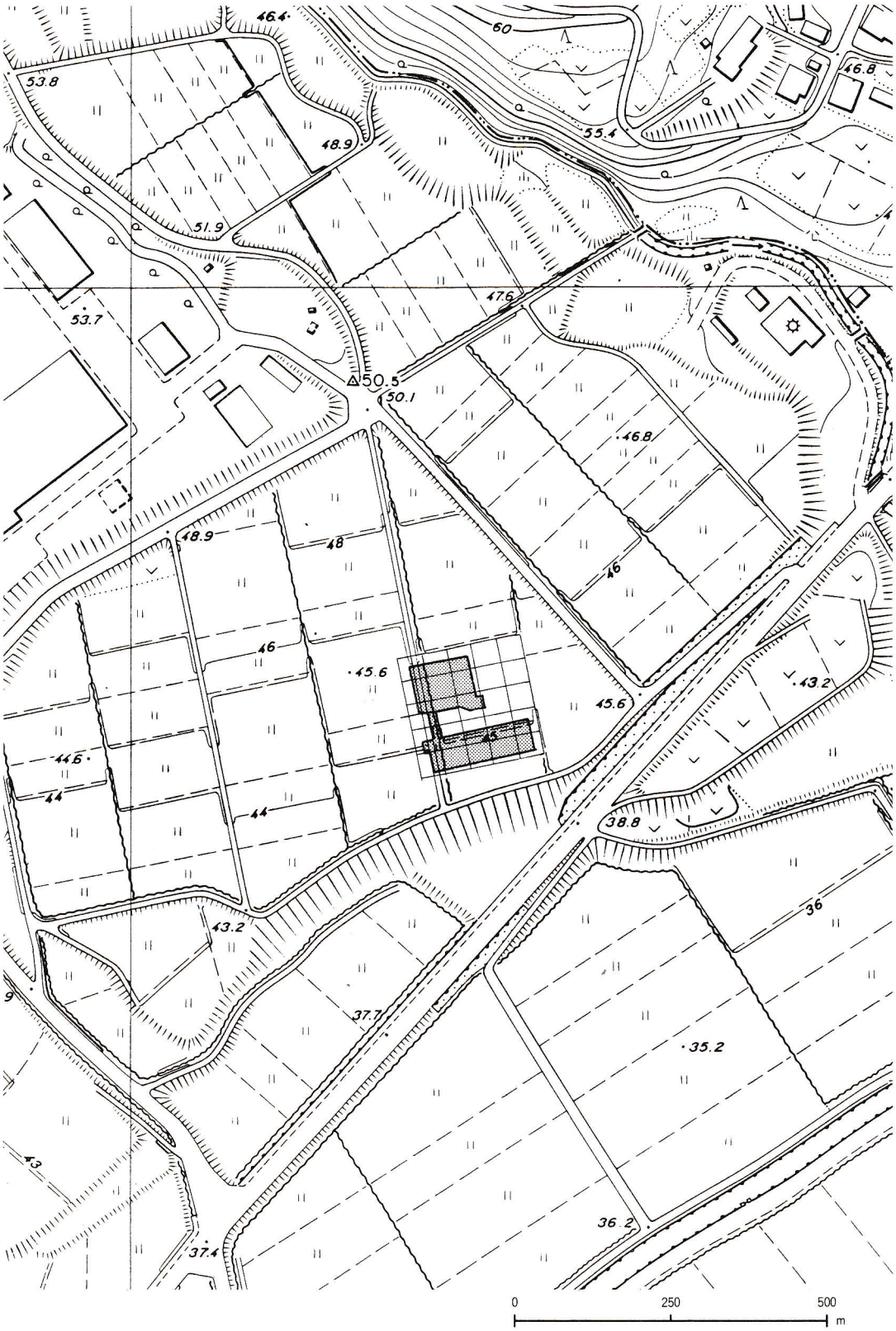
柱穴列　＝SA
掘立柱建物址＝SB
溝　跡　＝SD
ピット　＝P

二、遺構実測図の掲載に関しては、方位を統一しようとしたのだが、主にスペースと縮尺率の制約から、著しく統一を欠いた。

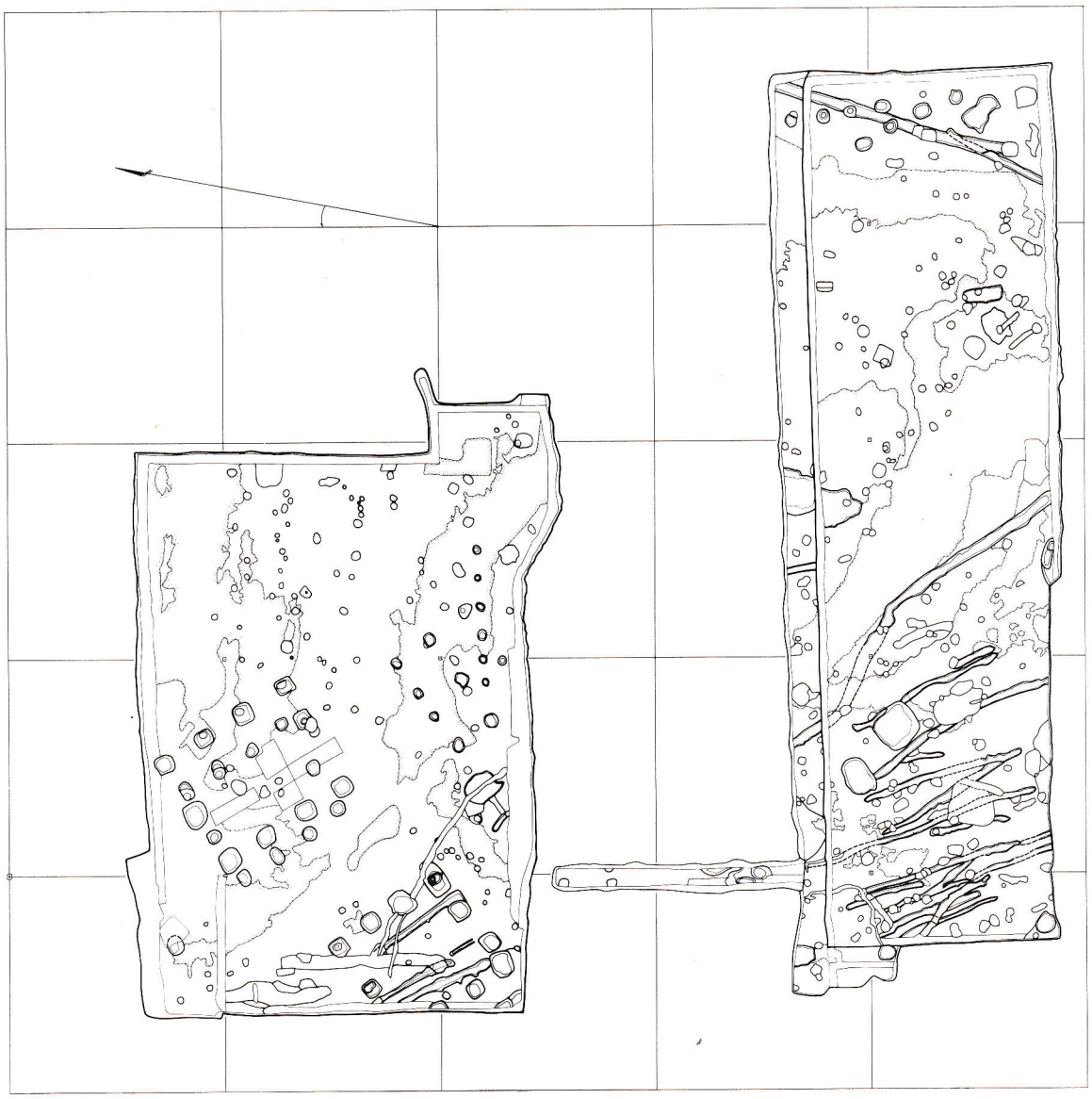
周辺の主な遺跡分布図

附図一

附図2


46.4
60
53.8
46.8
55.4
48.9
51.9
47.6
53.7
50.5
50.1
46.8
48.9
48
46
46
45.6
45.6
43.2
44.6
44
44
38.8
36
43.2
37.7
35.2
43
36.2
37.4
0
250
500
m

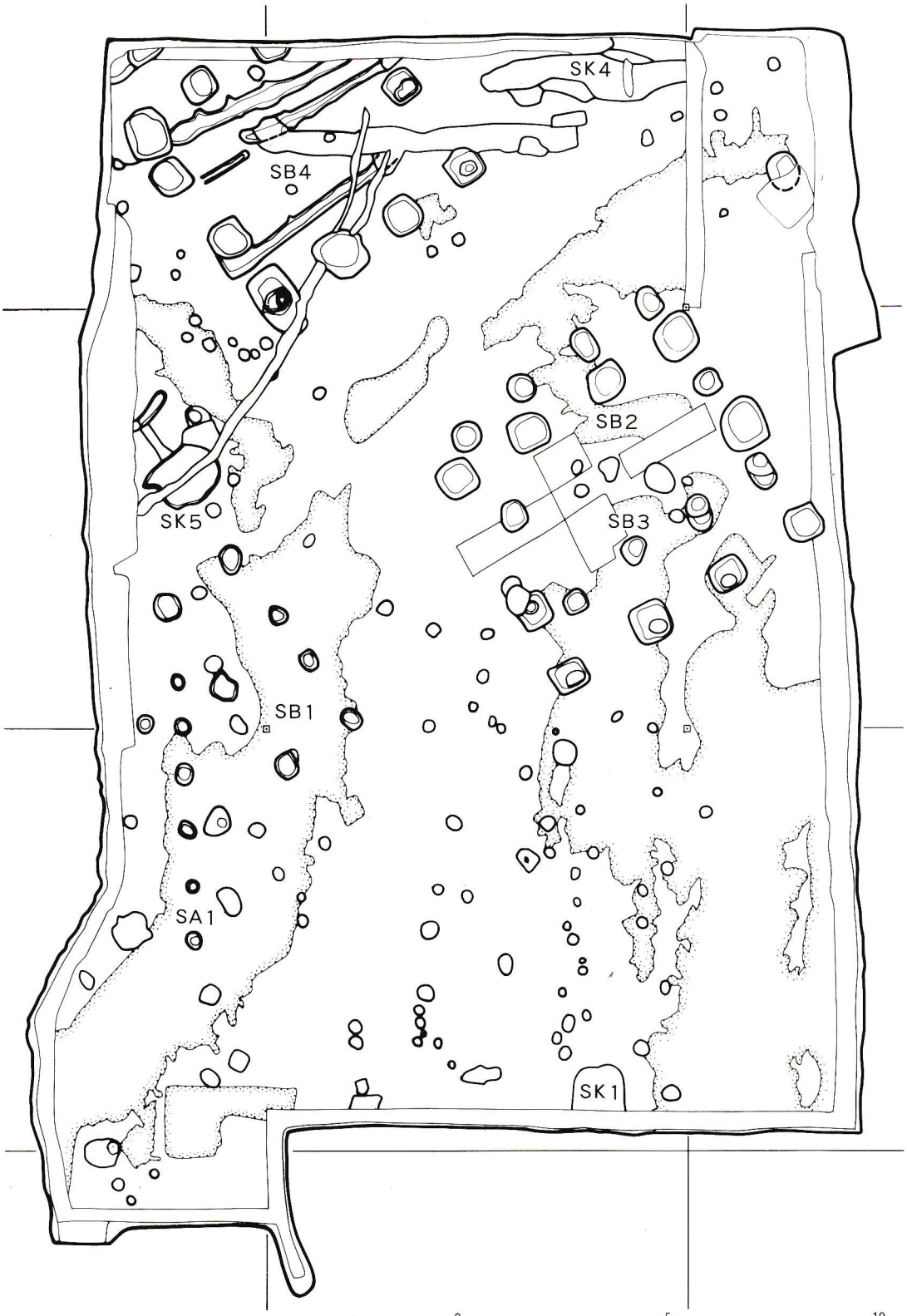
附図3



0 5 10 m

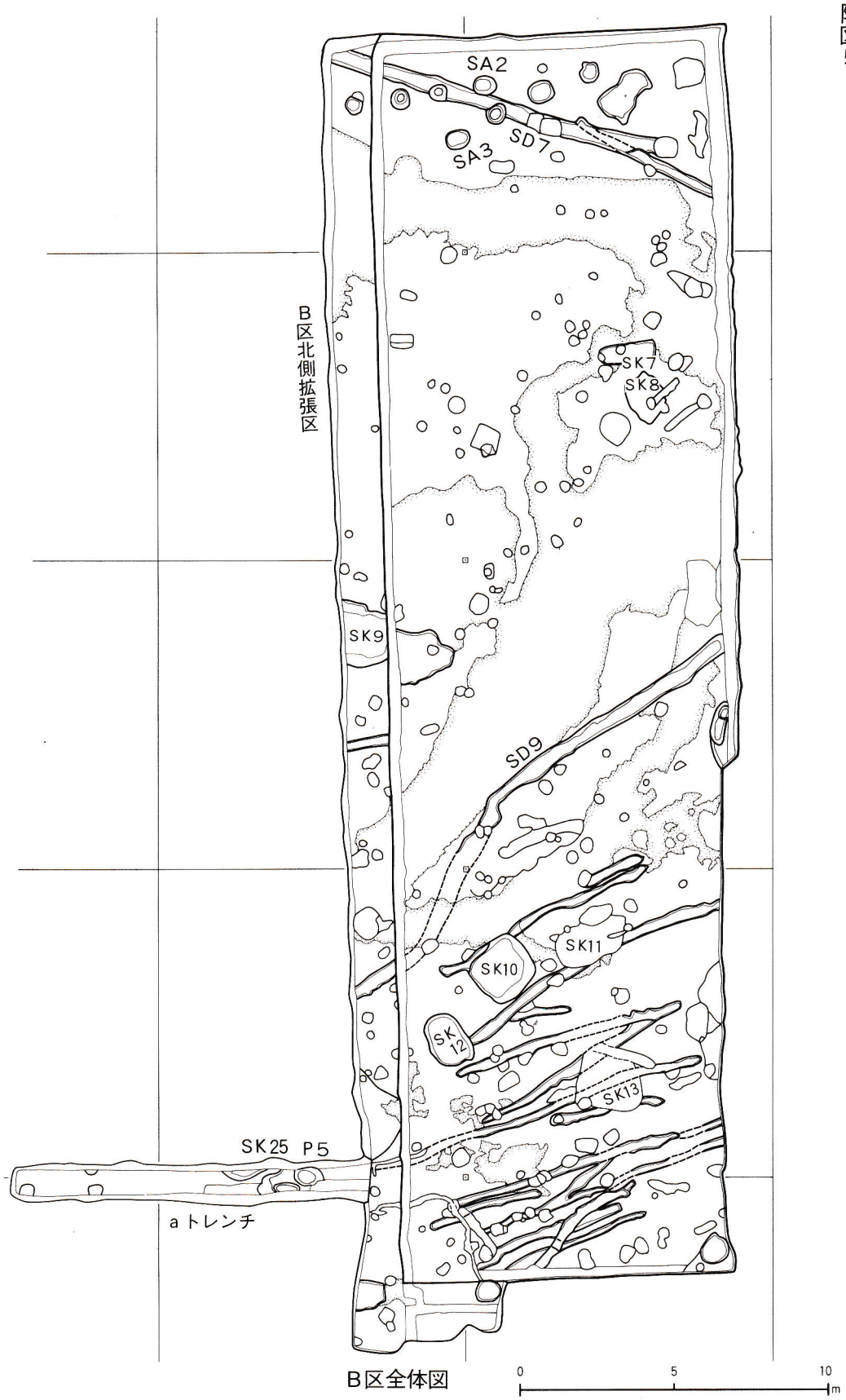
砂礫分布

附図4



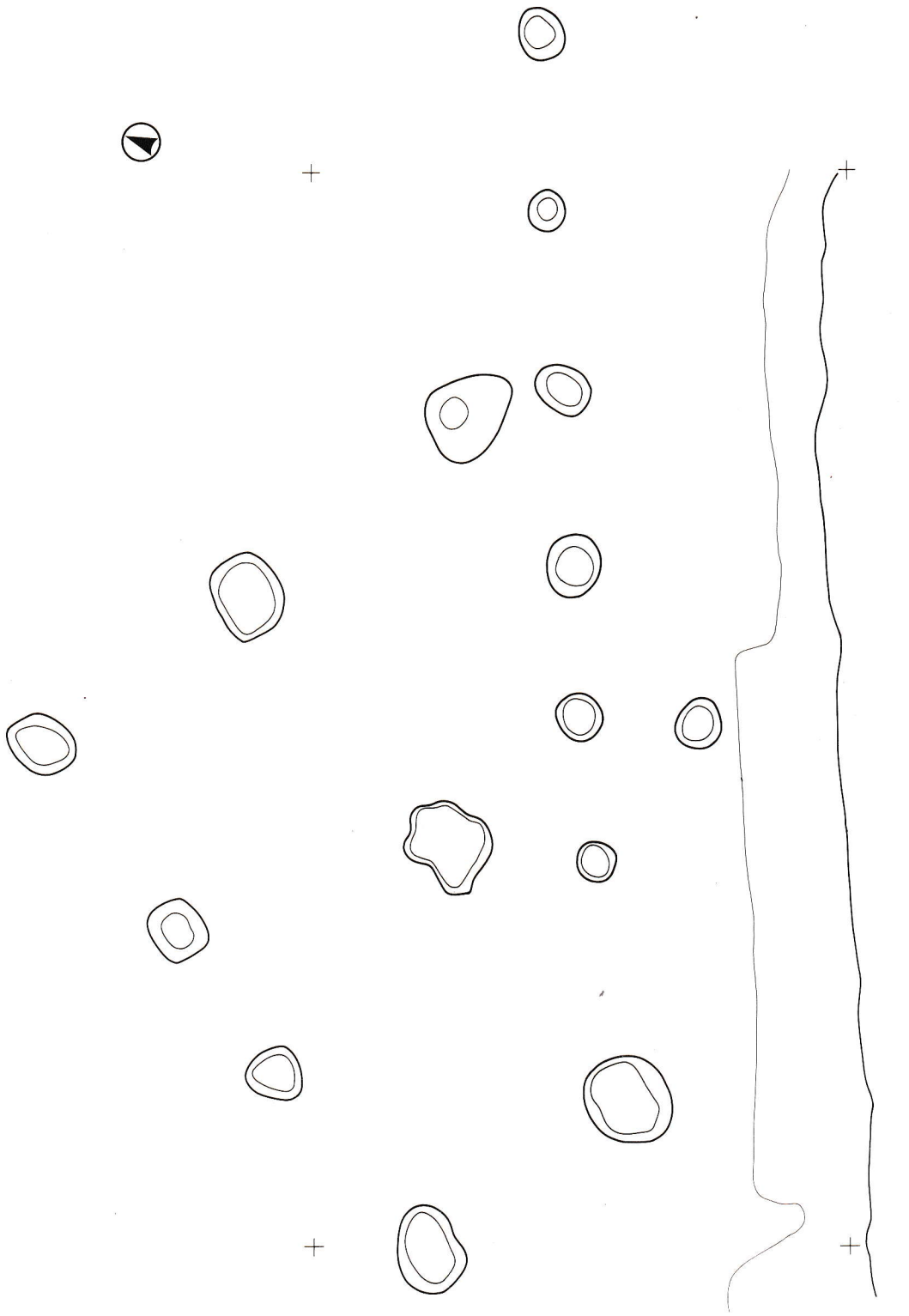
A区全体図

0 5 10 m

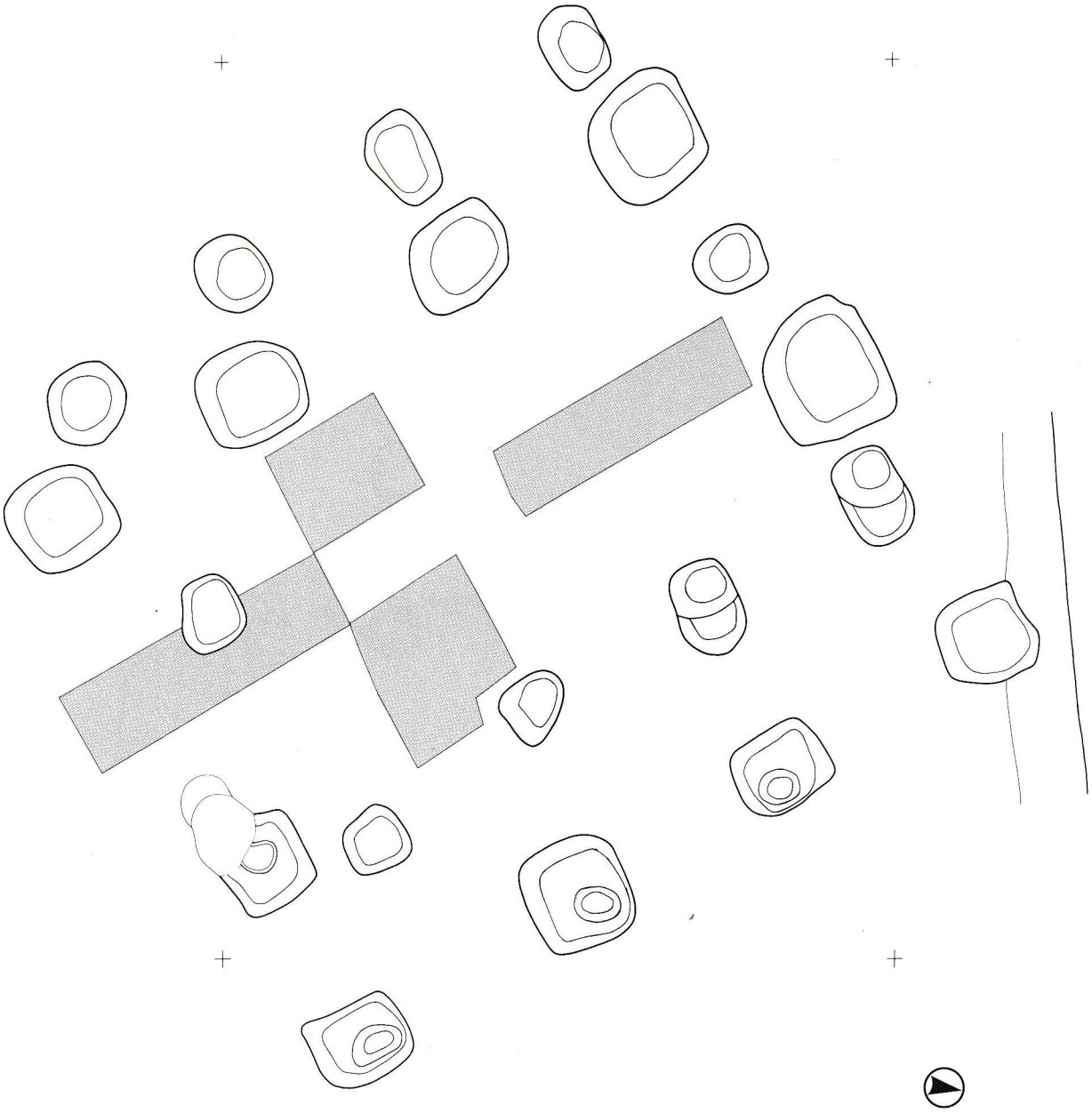

SA2
SA3
SD7
B区北側拡張区
SK7
SK8
SK9
SD9
SK11
SK10
SK12
SK13
SK25
P5
aトレンチ
0
5
10
m

B区全体図

附図6



第１号掘立柱建物址　第１号柱穴列

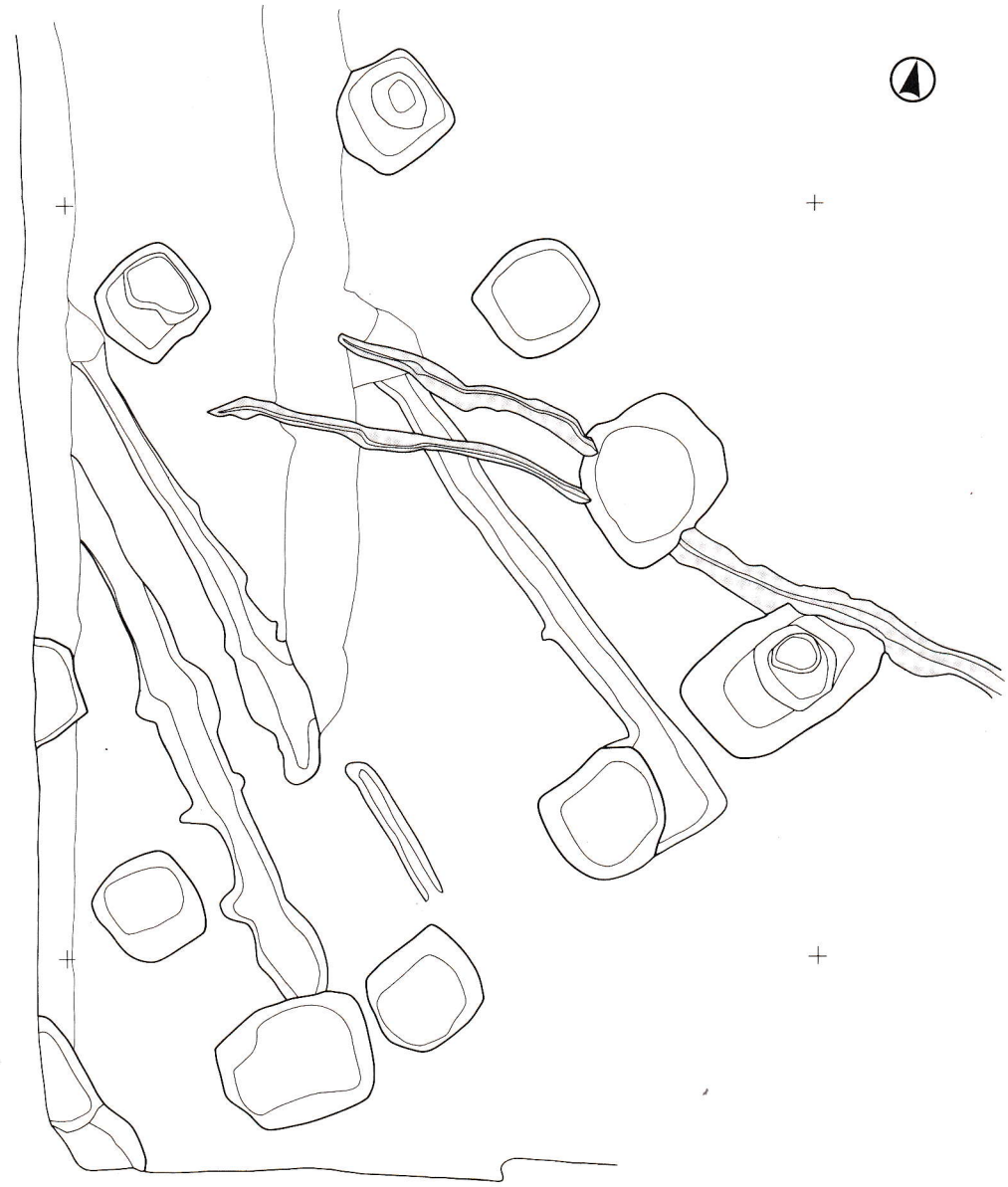


サブトレンチの位置

第2・3号掘立柱建物址

0 1 2 3 m

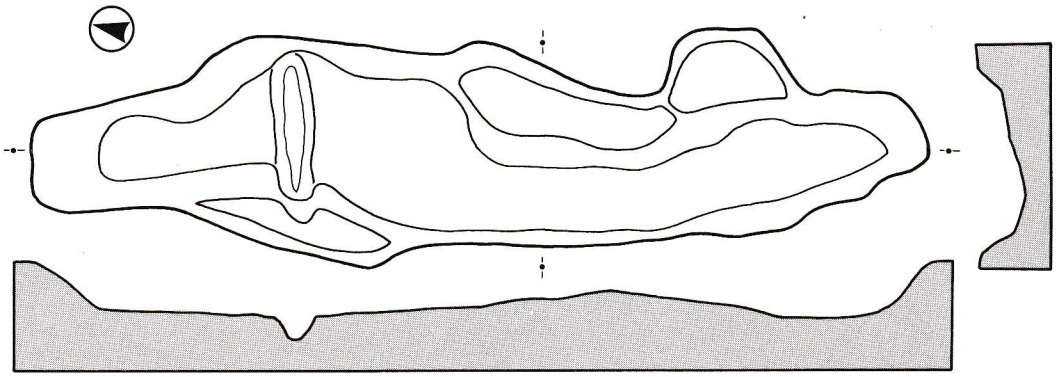
附図8



地割れの跡

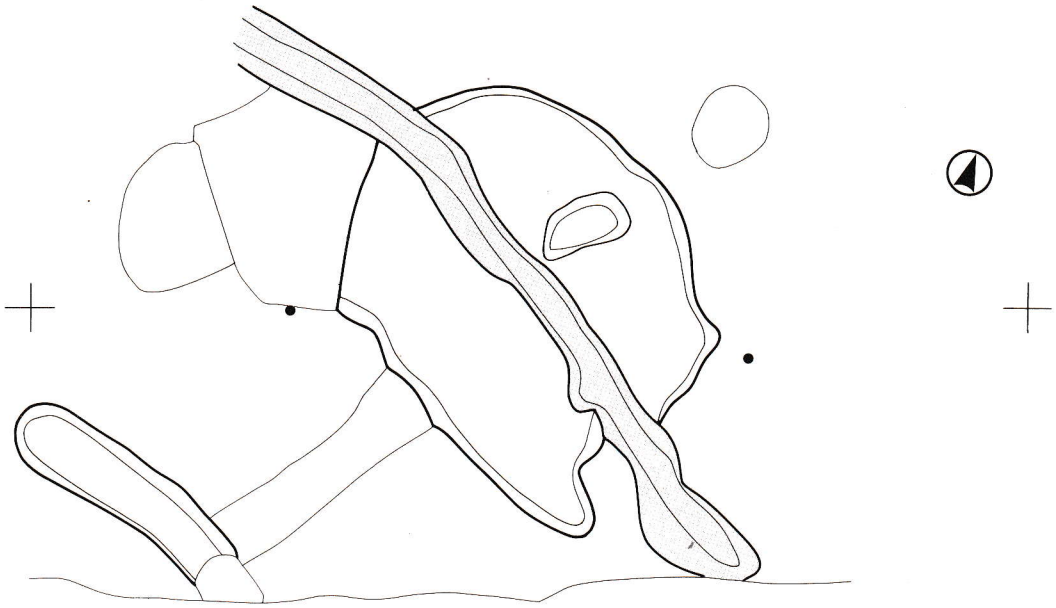
第４号掘立柱建物址

0 1 2 3 m



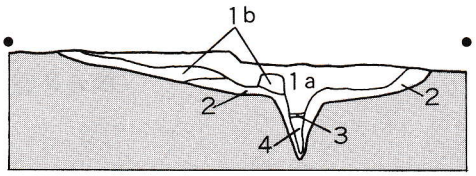
第4号　土　　坑

0　50　100 cm



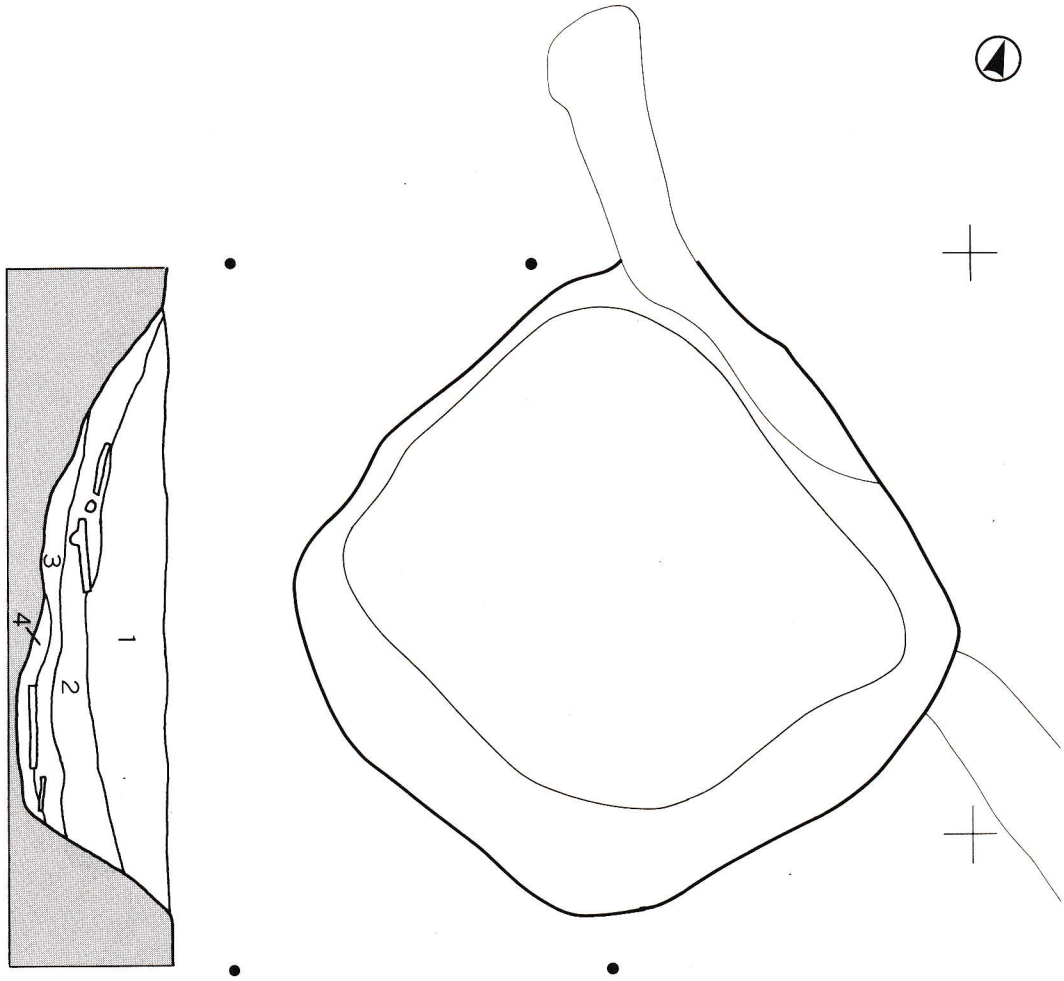
地割れの跡

1a　黒褐色土（締りよい）＋炭化物（大量）＋小礫
1b　黒褐色土（締り悪い）＋炭化物（少量）
2　明褐色土（粘性強い）
3　青色粘質土
4　黒褐色土（粘性強い）



第5号　土　　坑

0　1　2 m



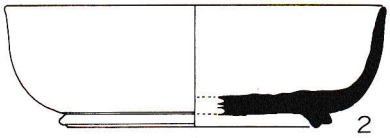
第10号　土　　坑

0　1　2 m

1　黒色土＋炭化物＋小礫
2　暗黒色土(粘性あり)＋カーボン
3　暗灰青色土＋黒色ブロック＋カーボン
4　黒色土＋カーボン

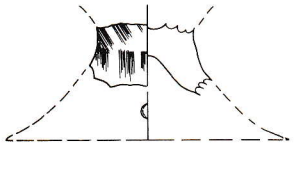
平安時代の遺物

第二号堀立建物址

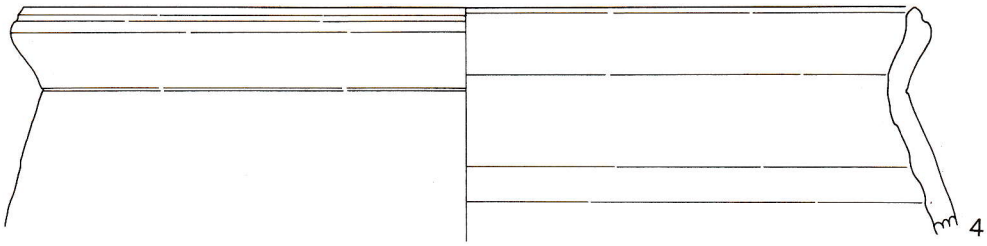


古墳時代の遺物

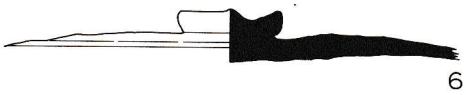
第四号建物址 P11

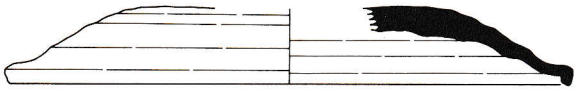


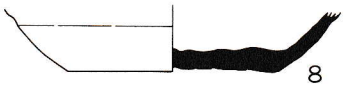
第三号堀立建物址

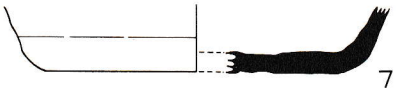


第四号堀立建物址

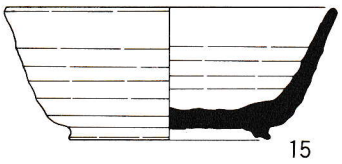


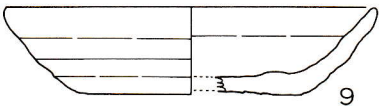


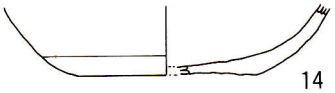


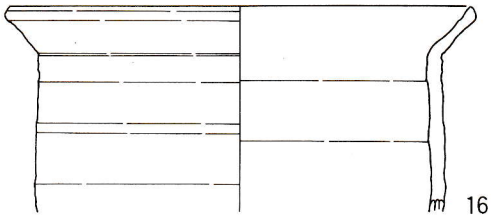


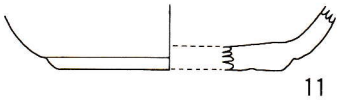
第四号土坑

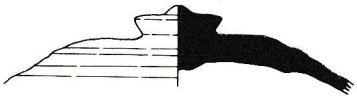






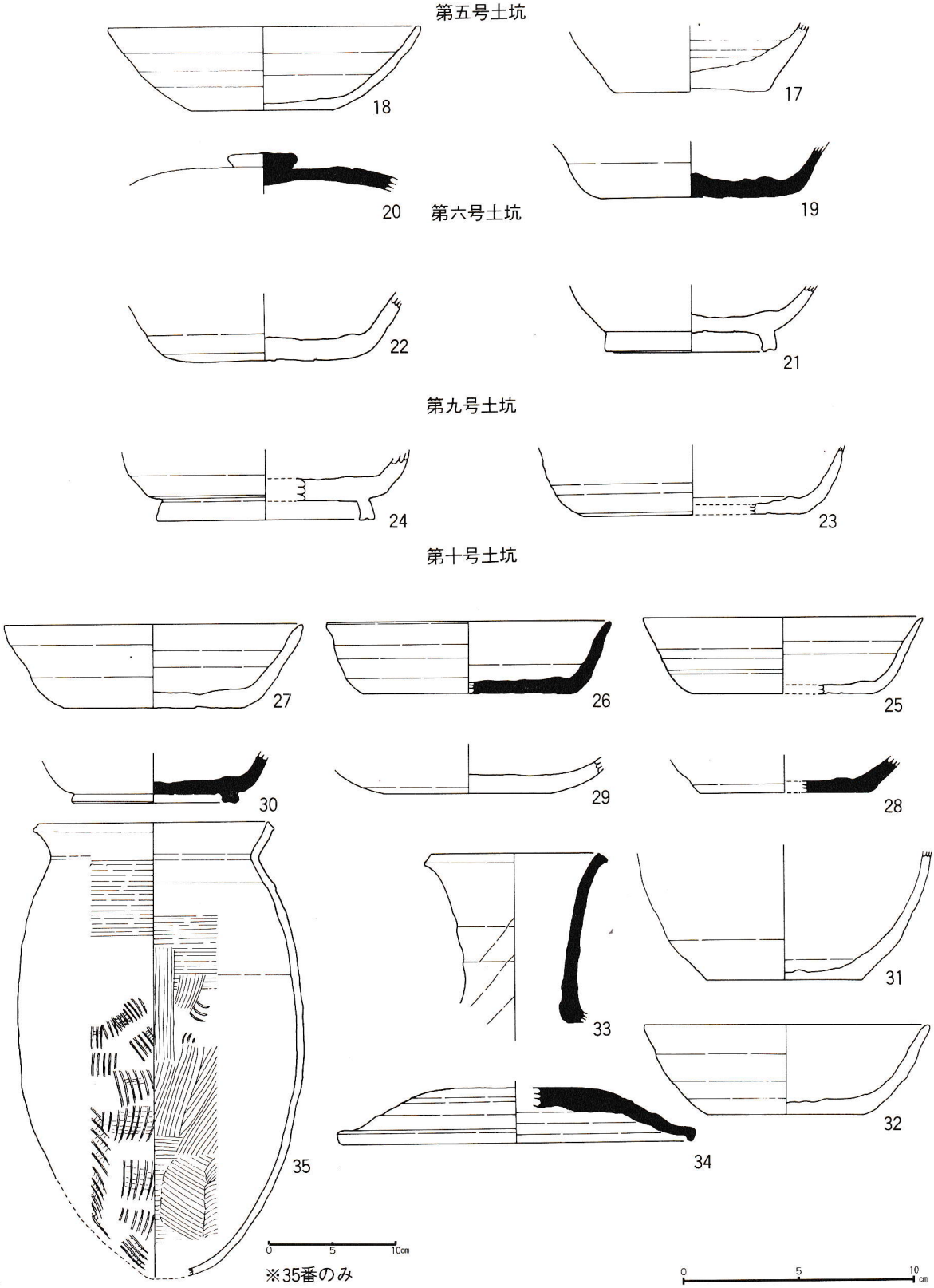




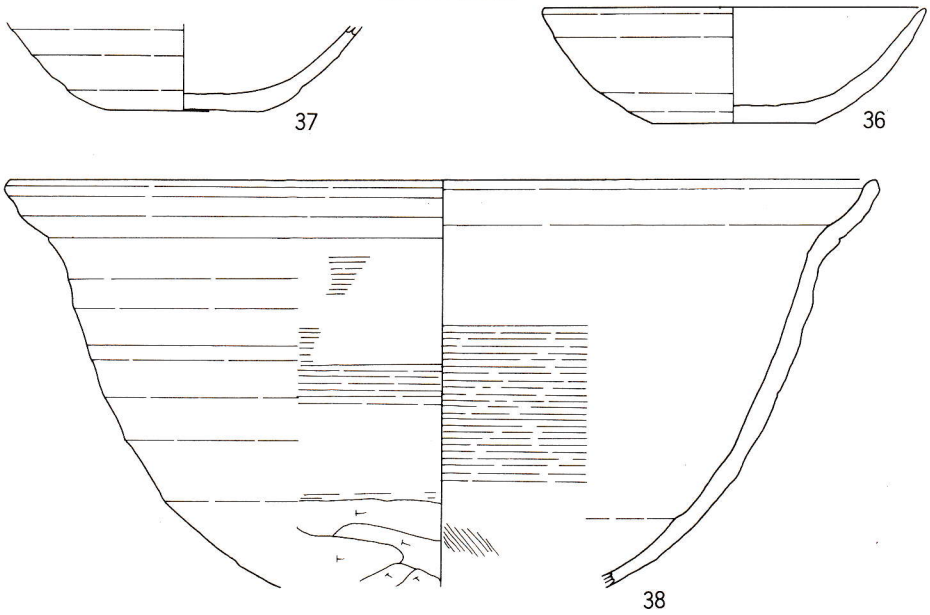


0 5 10 cm

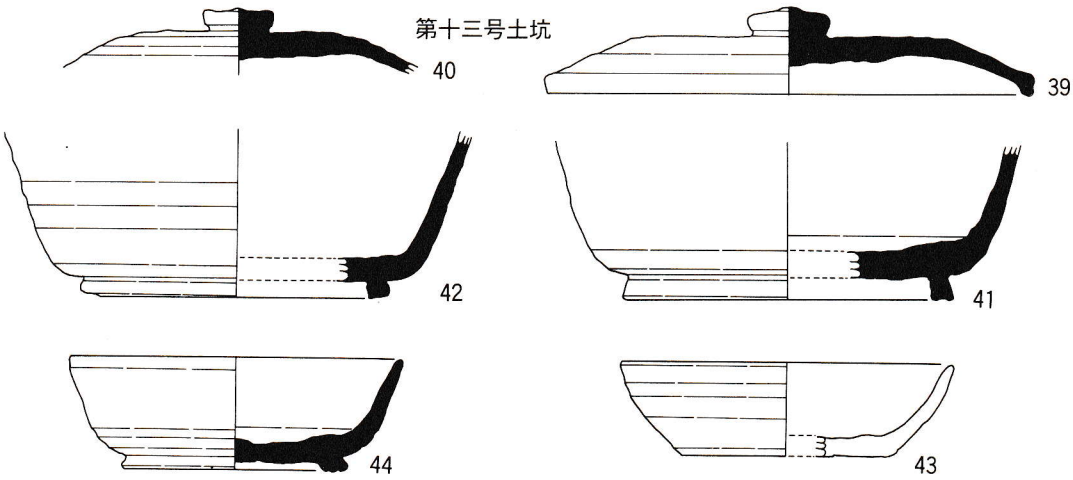
附図12


第五号土坑
18
17
20
第六号土坑
19
22
21
第九号土坑
24
23
第十号土坑
27
26
25
30
29
28
31
33
32
34
35
0 5 10cm
※35番のみ
0 5 10 cm

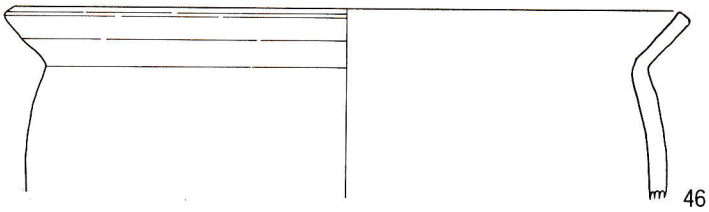
第十二号土坑



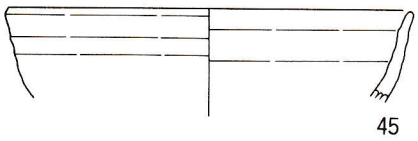
第十三号土坑



第十七号土坑

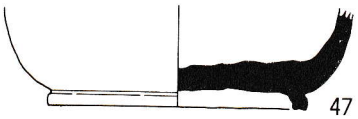


第十六号土坑

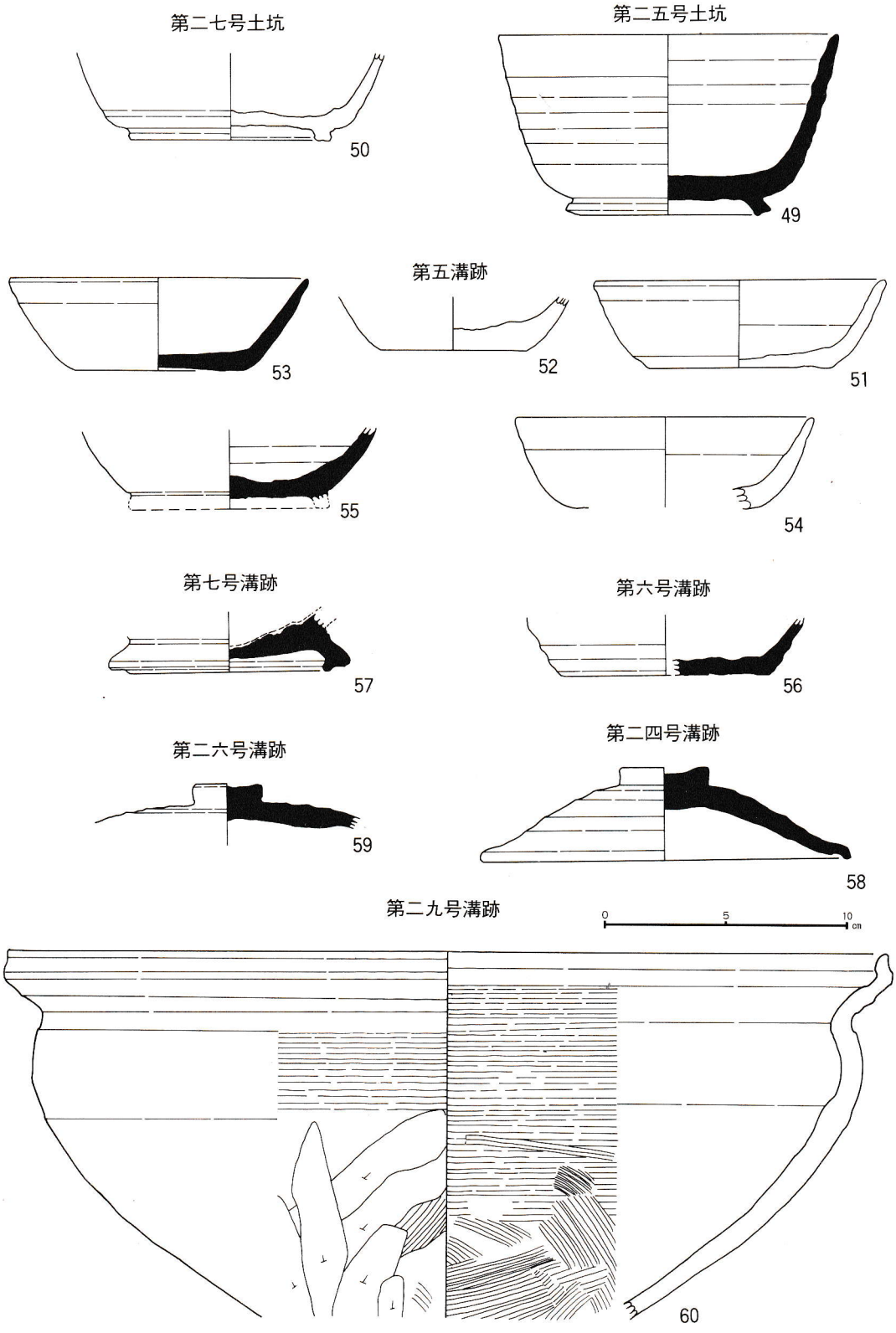


第二五号土坑

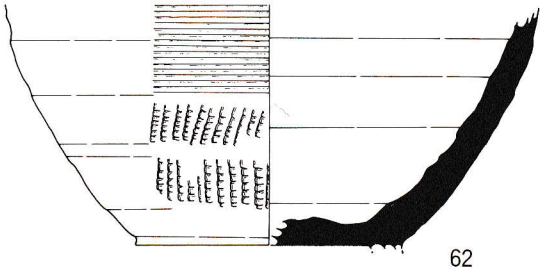
第二十号土坑

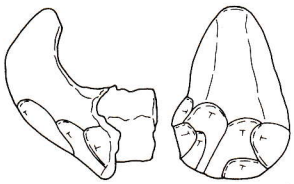


附図14

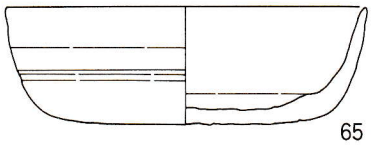

第二七号土坑
50
第二五号土坑
49
第五溝跡
53
52
51
55
54
第七号溝跡
57
第六号溝跡
56
第二六号溝跡
59
第二四号溝跡
58
第二九号溝跡
0
5
10
cm
60

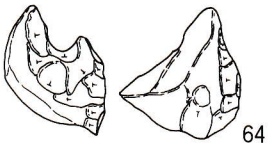
第三十号溝跡

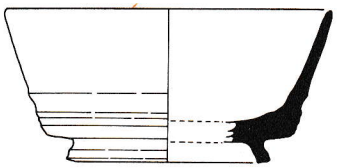

62


61

ピット出土


65

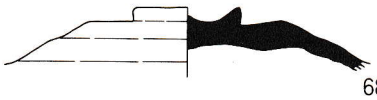

64

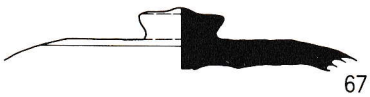

63

66

グリット出土

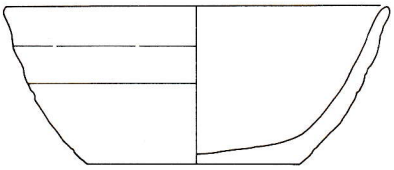
69

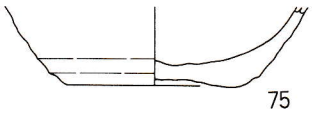

68


67

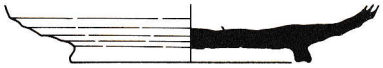
72

71


70


75

74


73

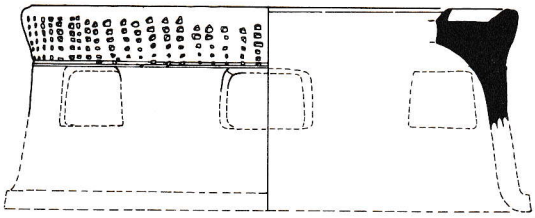
宋銭

77

0 1 2 cm

※77番のみ

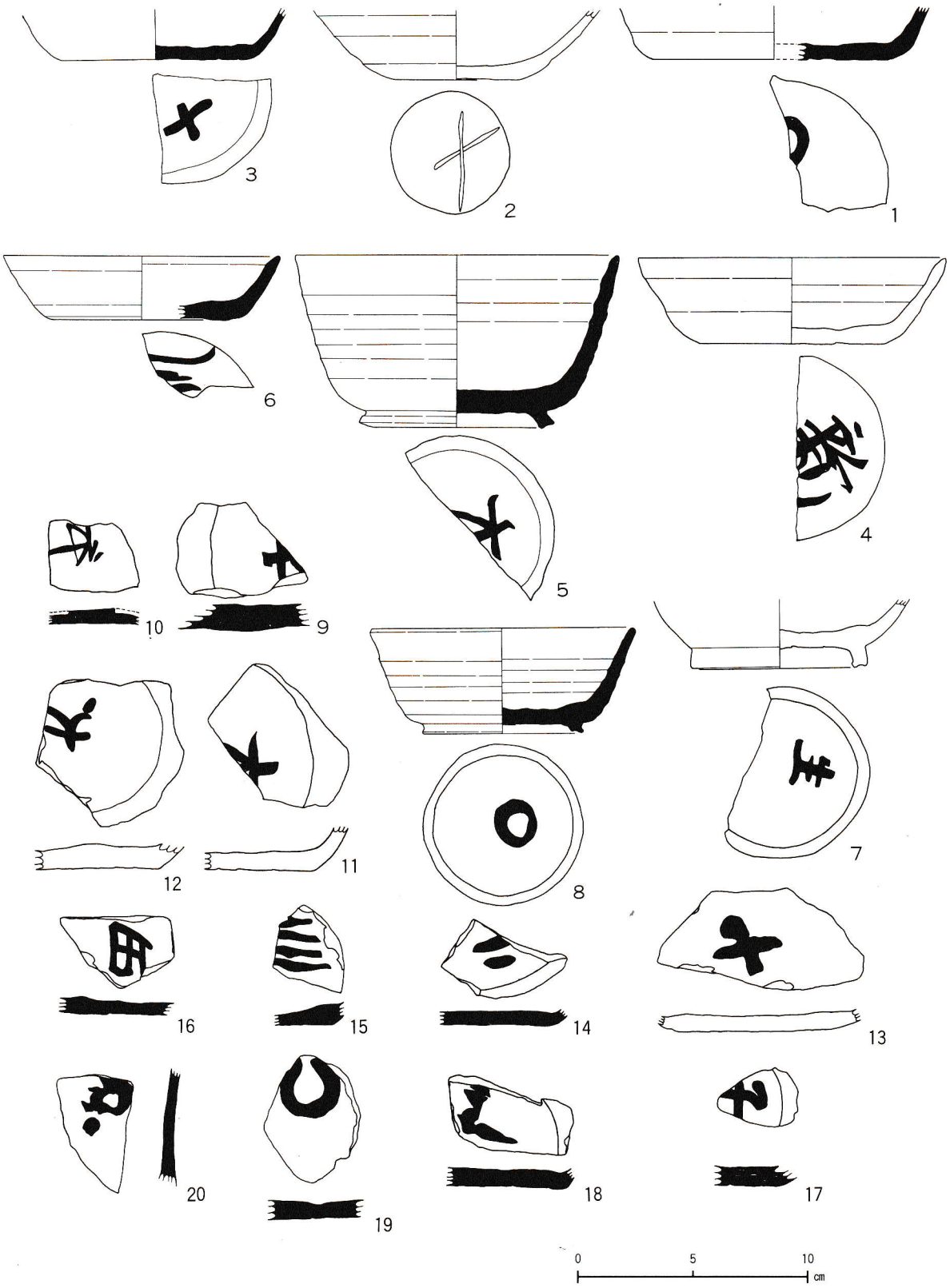
円面硯


76

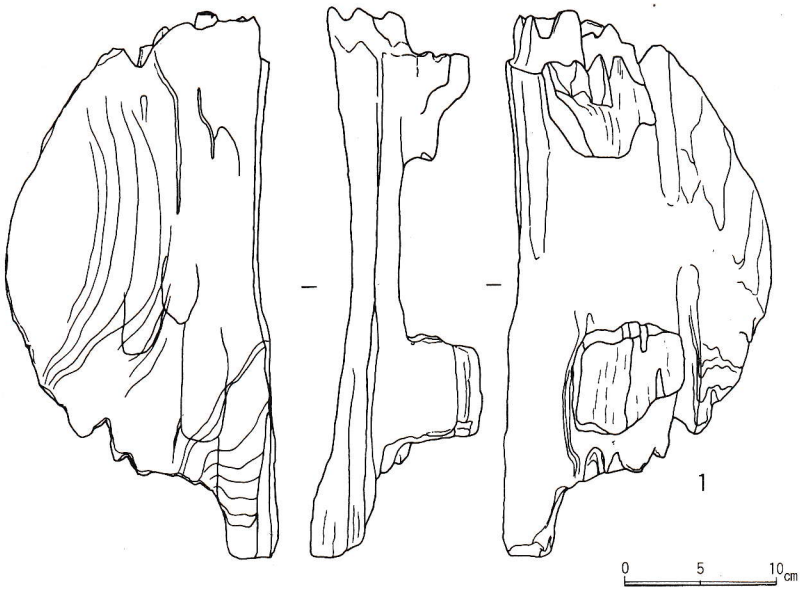
0 5 10 cm

附図16

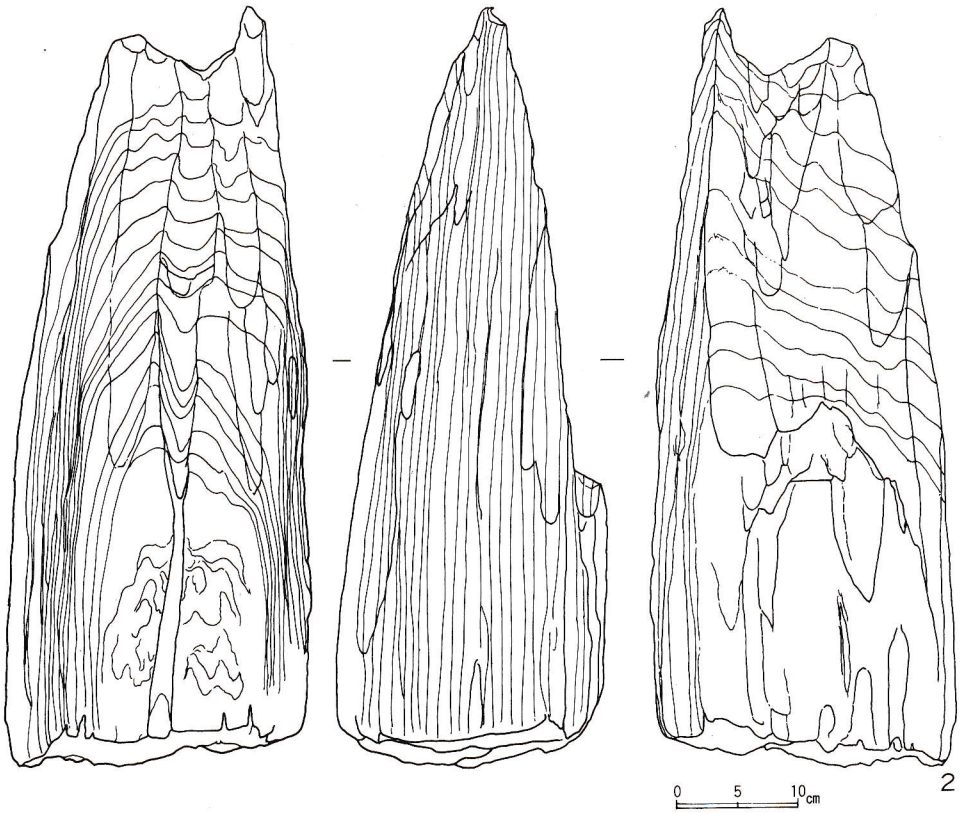
墨書・箆書土器



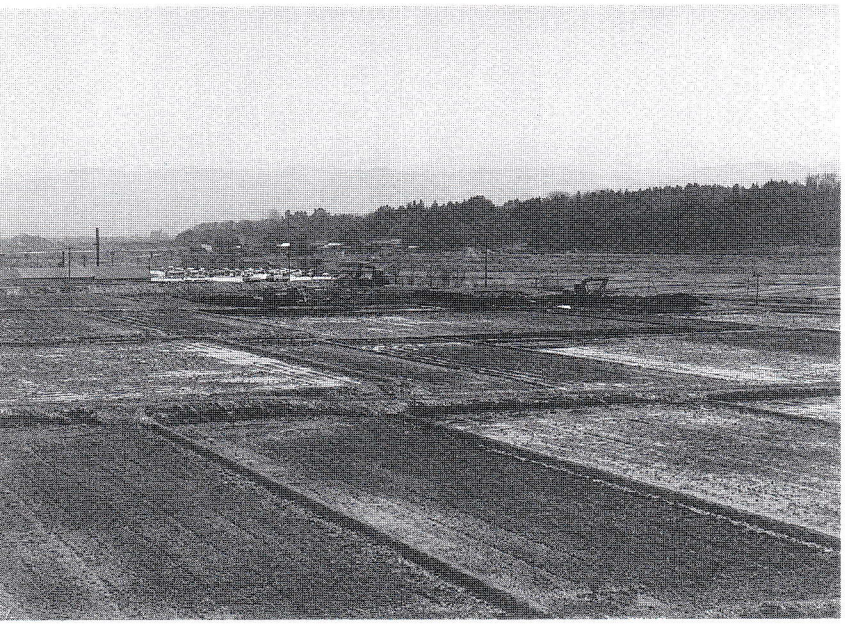
盆



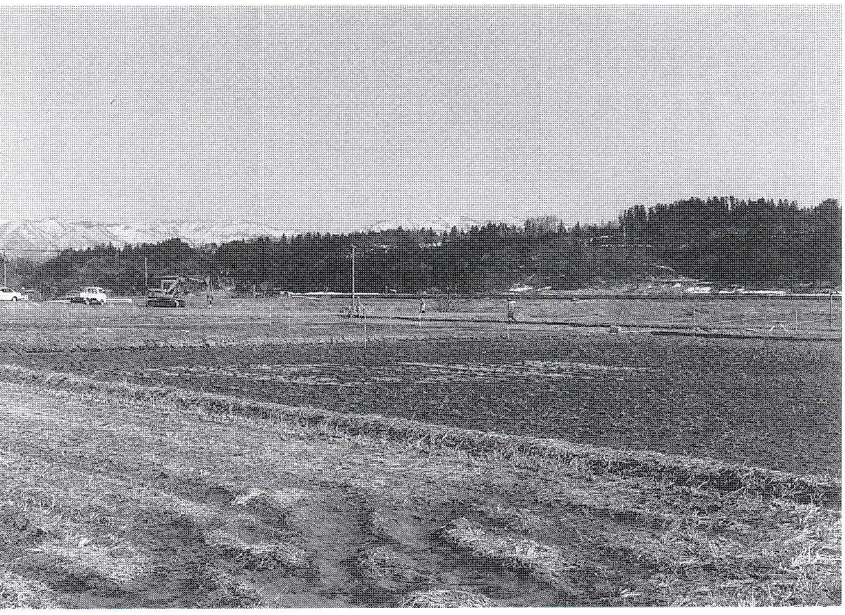
柱根部分に相当する丸材



遺跡遠景
南東から



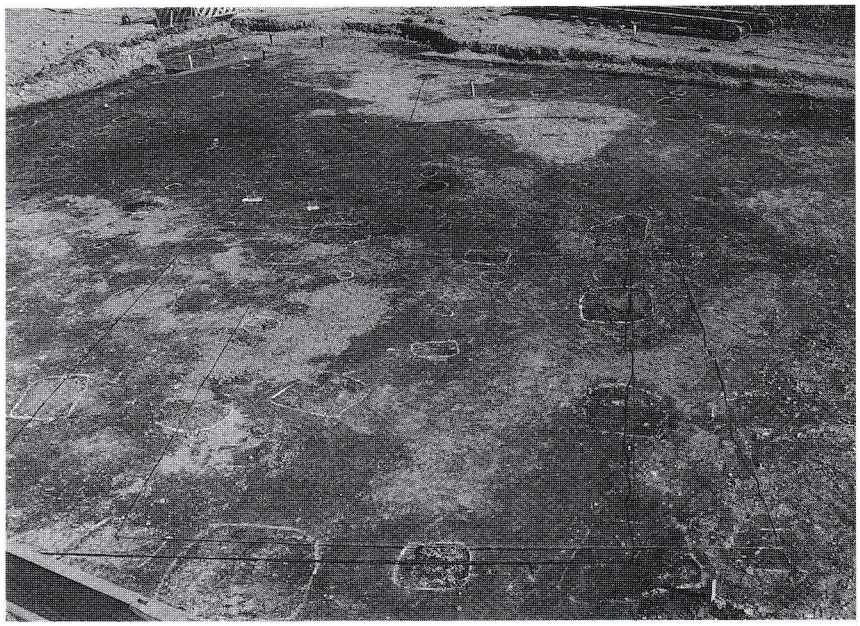
遺跡近景（A区）
北西から



遺跡近景（B区）
北西から

図版2

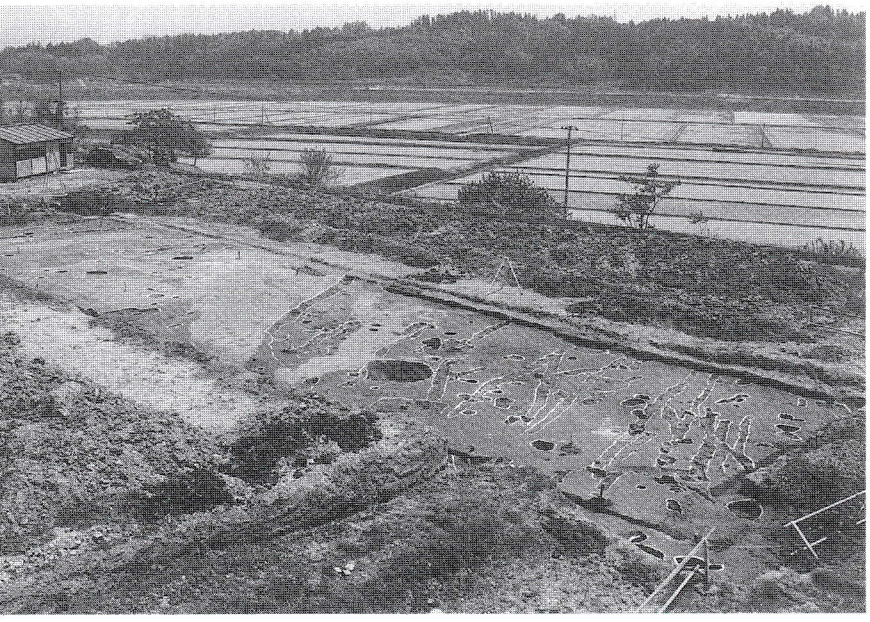
A区作業風景
南西から



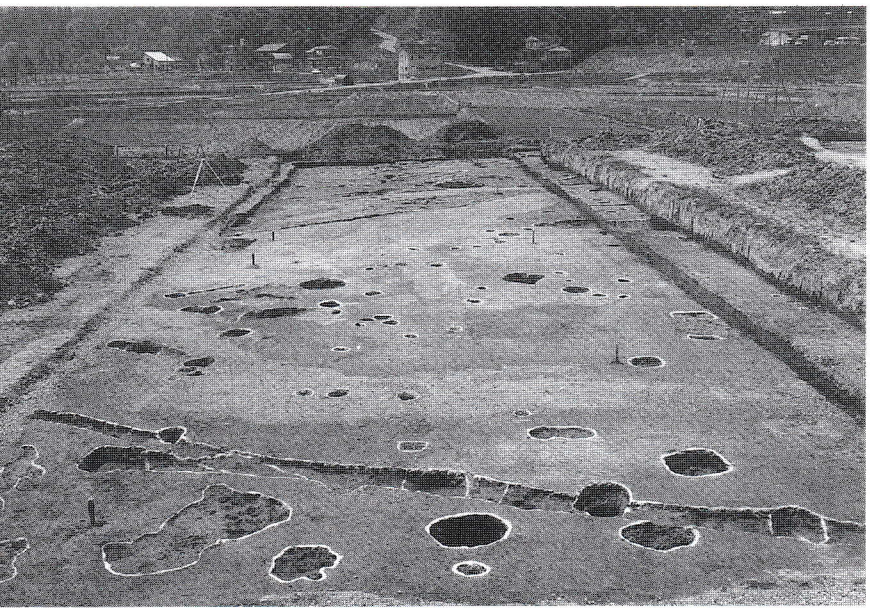
第二. 三掘立柱建物址
平面プラン検討
北西から

地割れ状溝の検討

A区完掘状態
南西から



B区完掘状態
北西から



B区完掘状態
東から

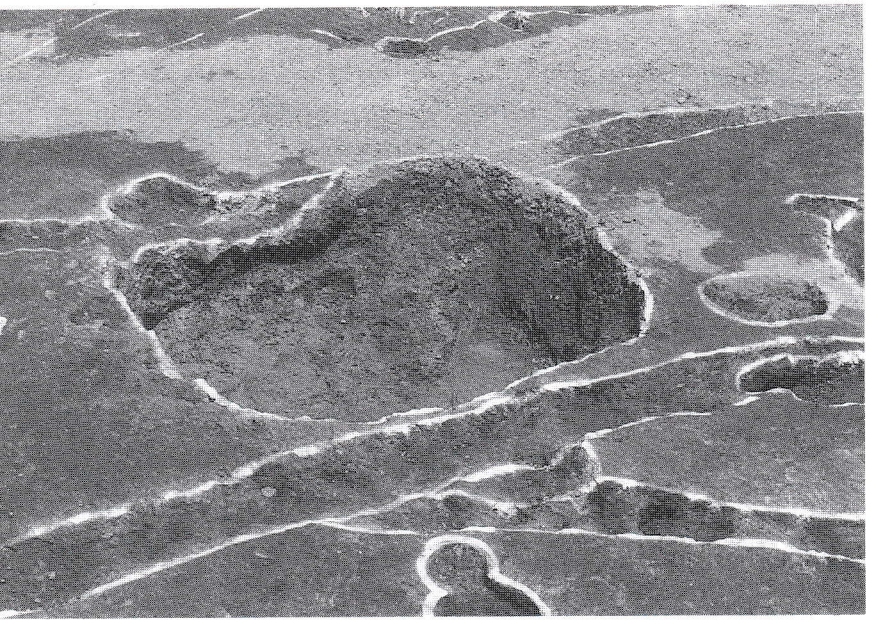
図版4

第１号掘立柱建物址
西から

第２・第３号掘立柱建物址
南西から

第４号掘立柱建物址
南西から

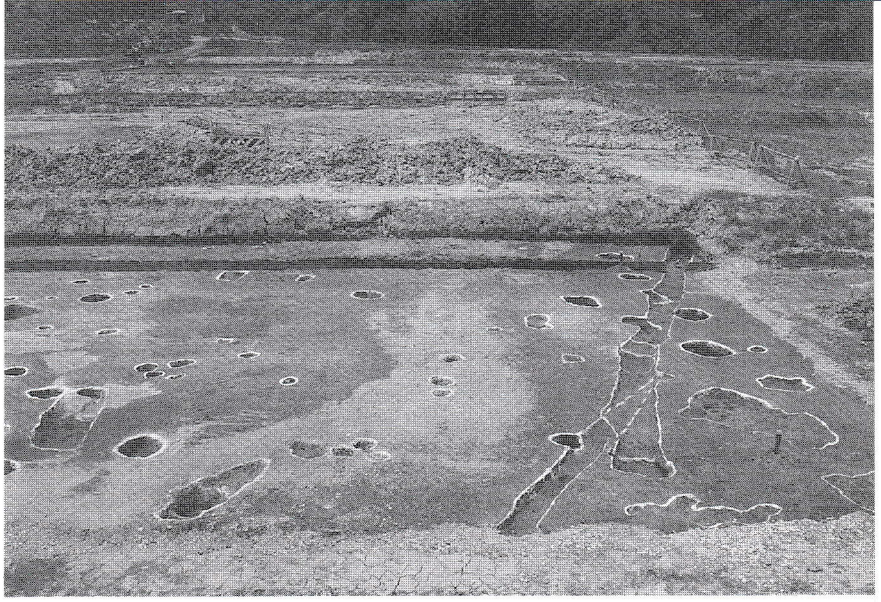
第五号土坑周辺
完掘状態
南東から



第十号土坑
完掘状態
西から

第十号土坑
ベルト付近
遺物出土状態
西から

図版6



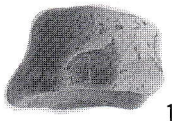
第７号溝跡周辺
南から

第９号溝跡周辺
南東から

畝状小溝群
北から

図版7

古墳時代の遺物

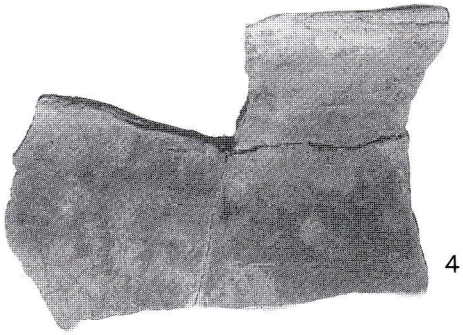


1

平安時代の遺物

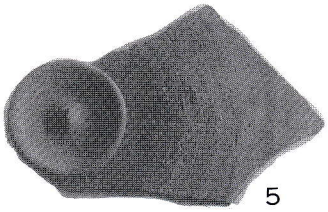
第３号掘立柱建物址出土

3



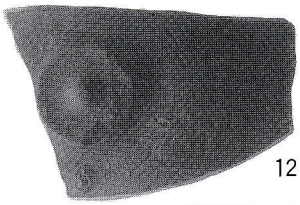
4

第４号掘立柱建物址出土



5

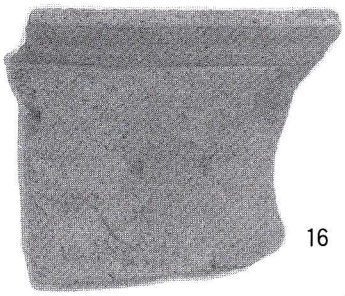
第４号土坑出土



12

9

8

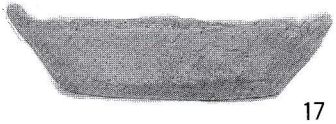


16

15

第５号土坑出土

18



17

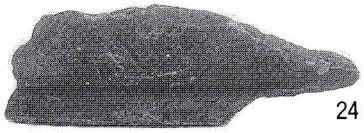
縮尺　約二分の一

第６号土坑出土

22

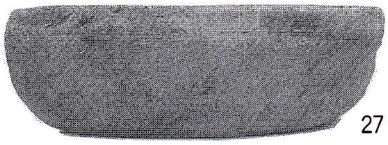
21

第９号土坑出土

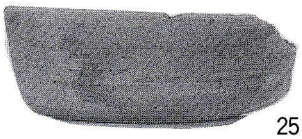

24

23

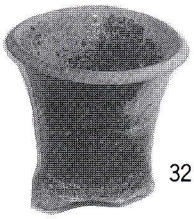
第10号土坑出土

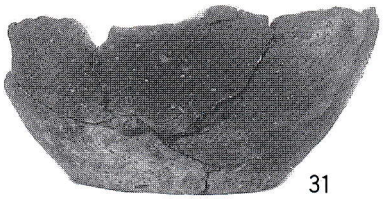

27

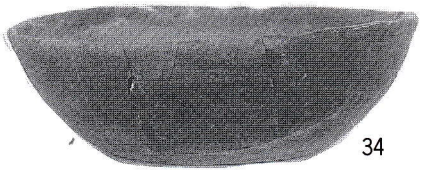
26


25

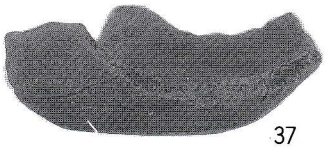
35

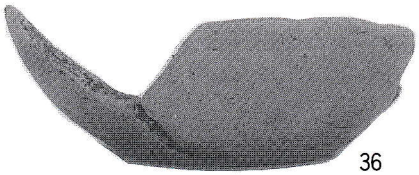

32


31


34

第12号土坑出土

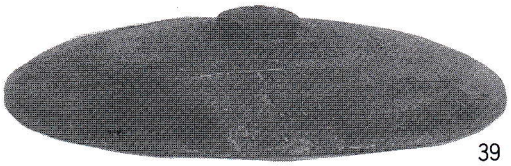

37


36

縮尺約二分の一　32は約四分の一　35は五分の一

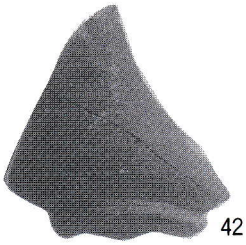
図版9

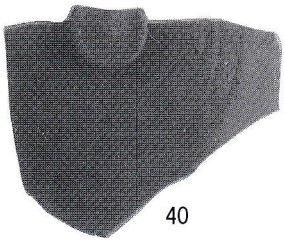
第13号土坑出土


39

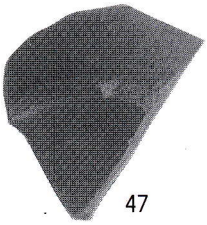
第12号土坑出土

38

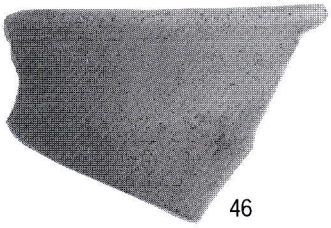

42


40

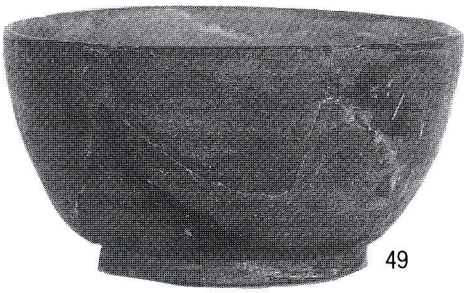
第20号土坑出土


47

第17号土坑出土


46

第25号土坑出土


49

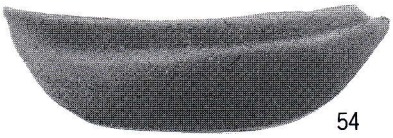
48

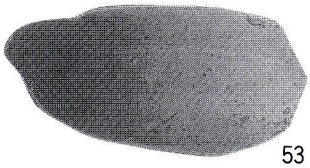
第27号土坑出土

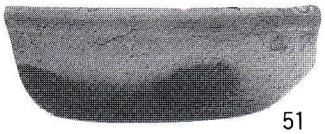
50

縮尺　約二分の一

第５号溝跡出土


54

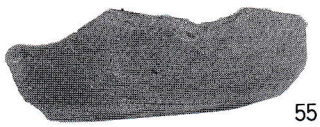

53


51

第24号溝跡出土

58

第５号溝跡出土



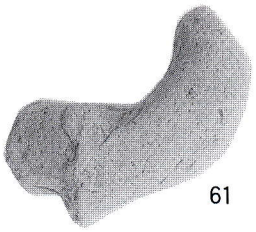
55

第29号溝跡出土

60

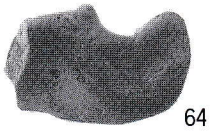
第30号溝跡出土

62



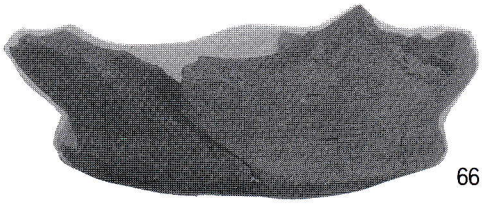
61

ピット出土



64

63



66

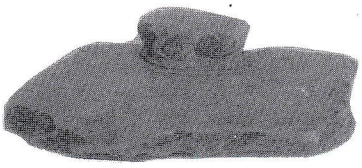
65

縮尺約二分の一

図版11

遺構出土および表採

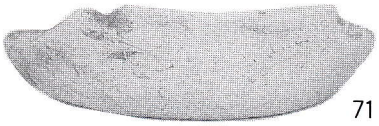
68



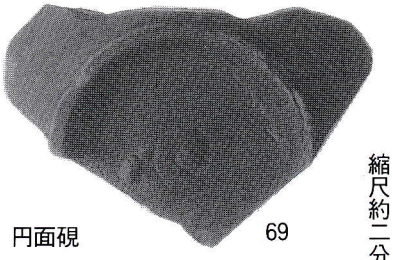
67

70

73

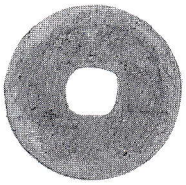


71



69

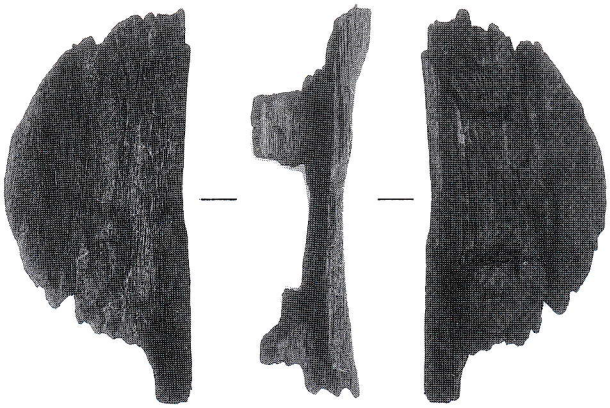
渡来銭



円面硯

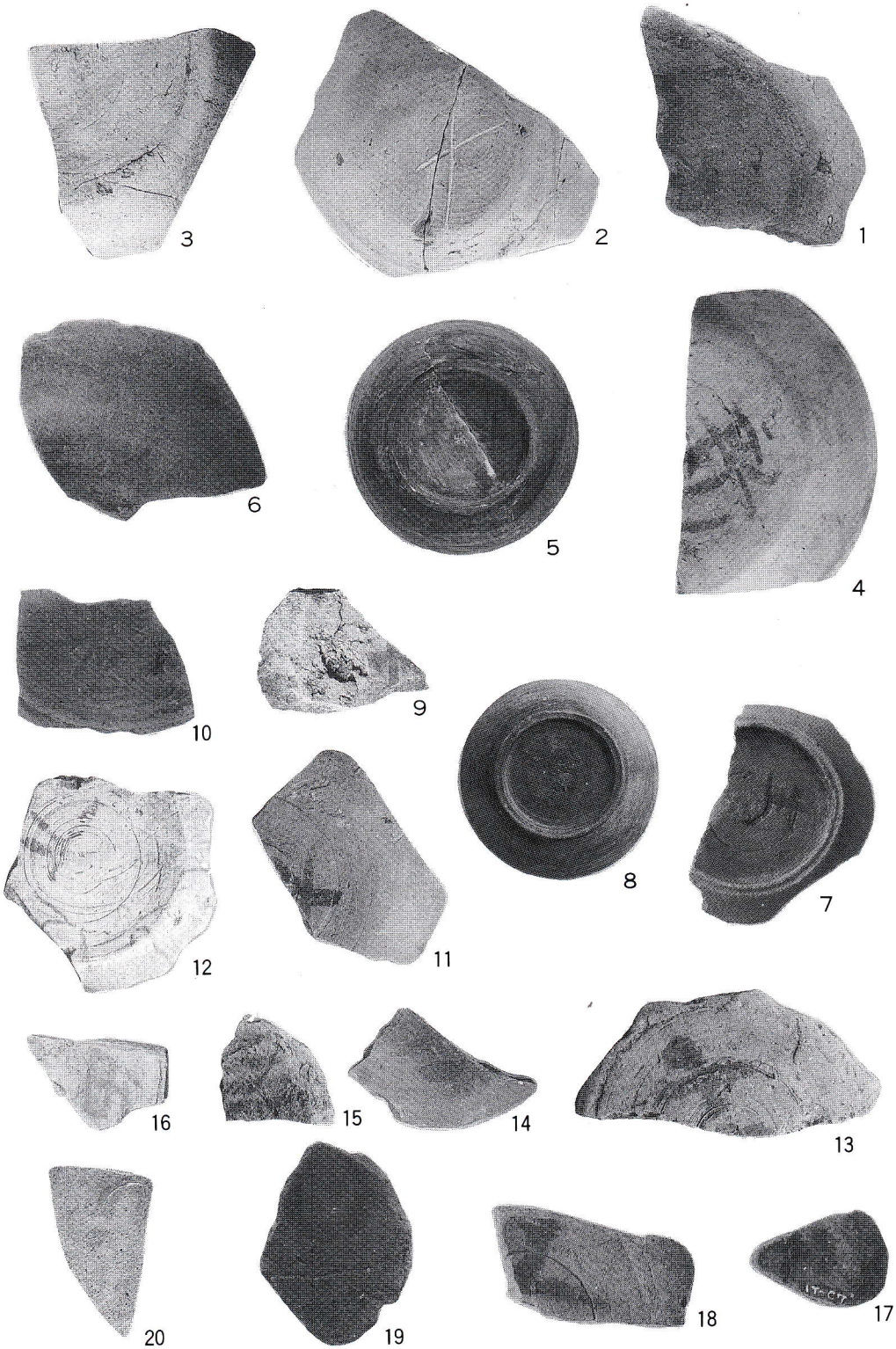
柱痕

盆



縮尺約二分の一　渡来銭は一分の一　盆は約七分の一　柱痕は一〇分の一

墨書および箆書土器



縮尺不同

越路町文化財報告書第一九輯

岩田遺跡

印刷日　一九九二年三月二五日
発行日　一九九二年三月三一日

編集　佐藤雅一・石坂圭介
執筆　山本順平・安藤正芳
神林昭一・星野洋治
佐藤雅一・石坂圭介

発行　新潟県三島郡越路町大字来迎寺
越路町教育委員会

印刷所　有限会社　上村印刷所
六日町田中町　☎七二二一六五